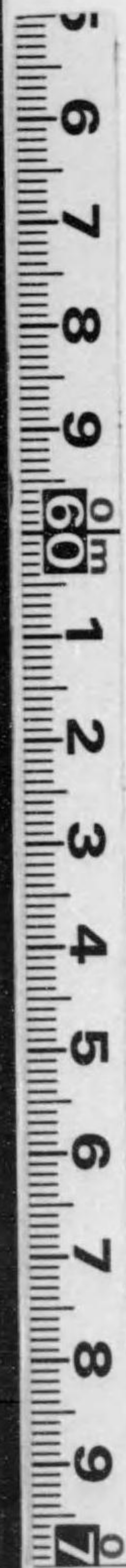


329

183

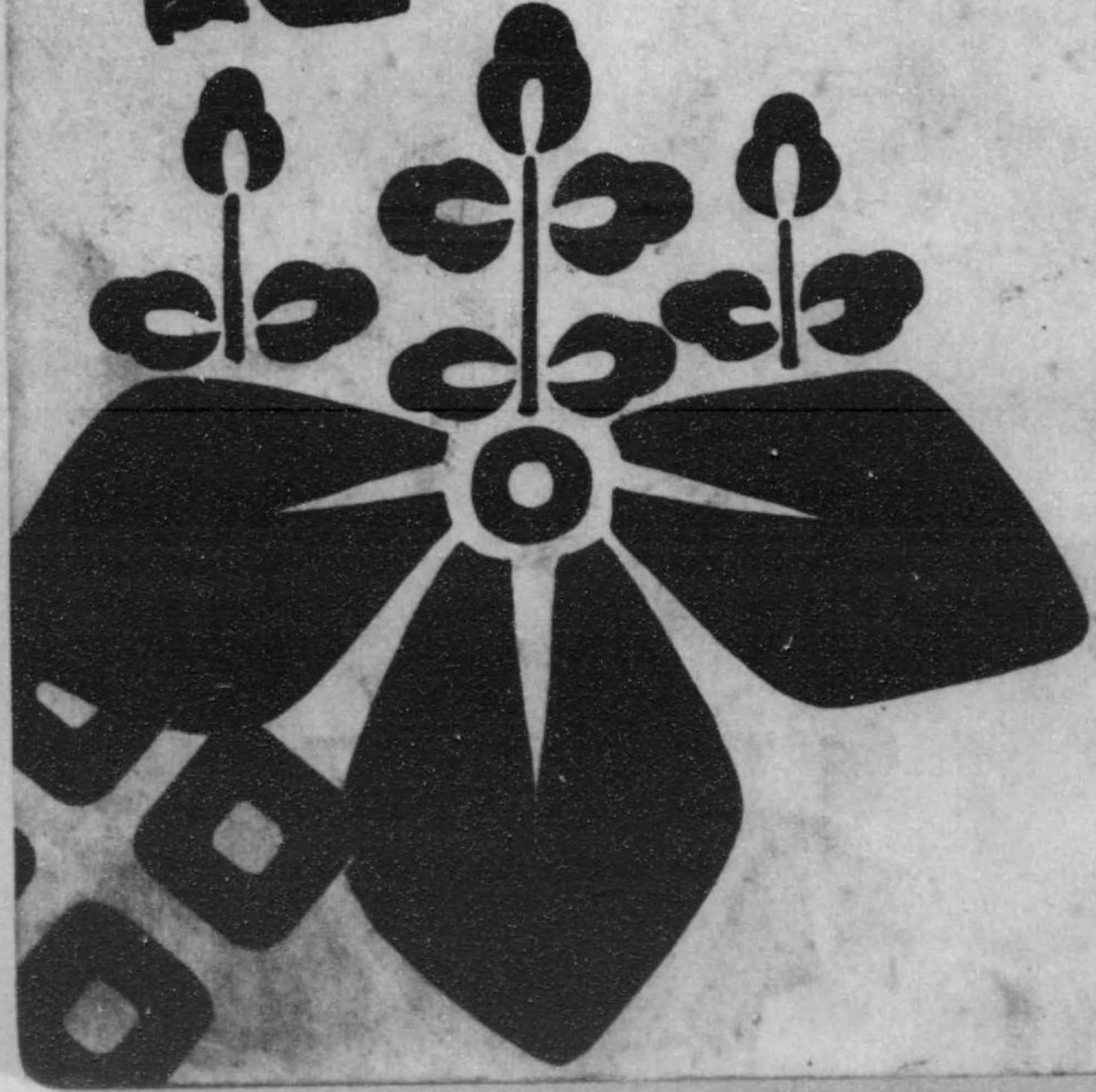


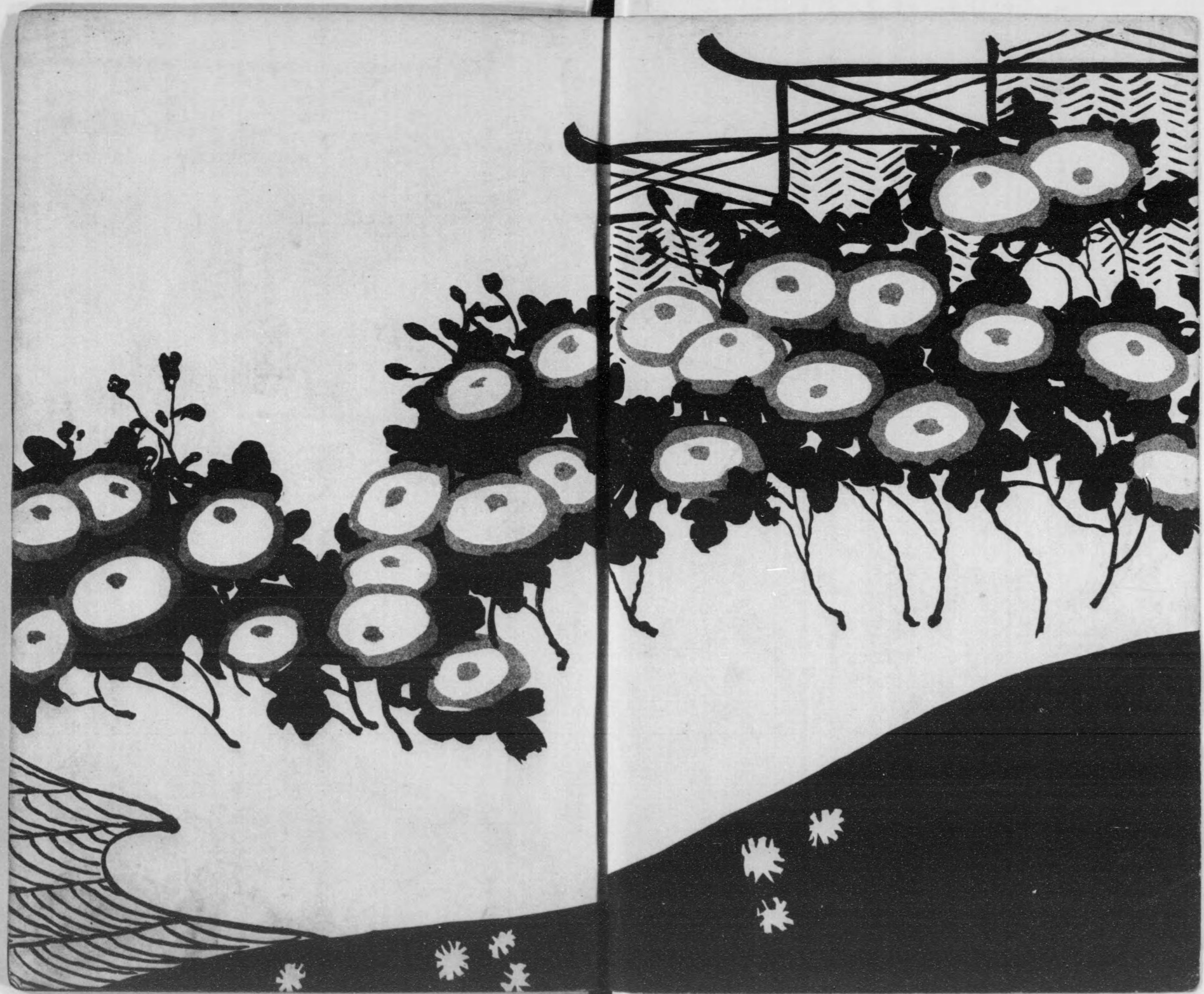
始



說案

海峽三心記

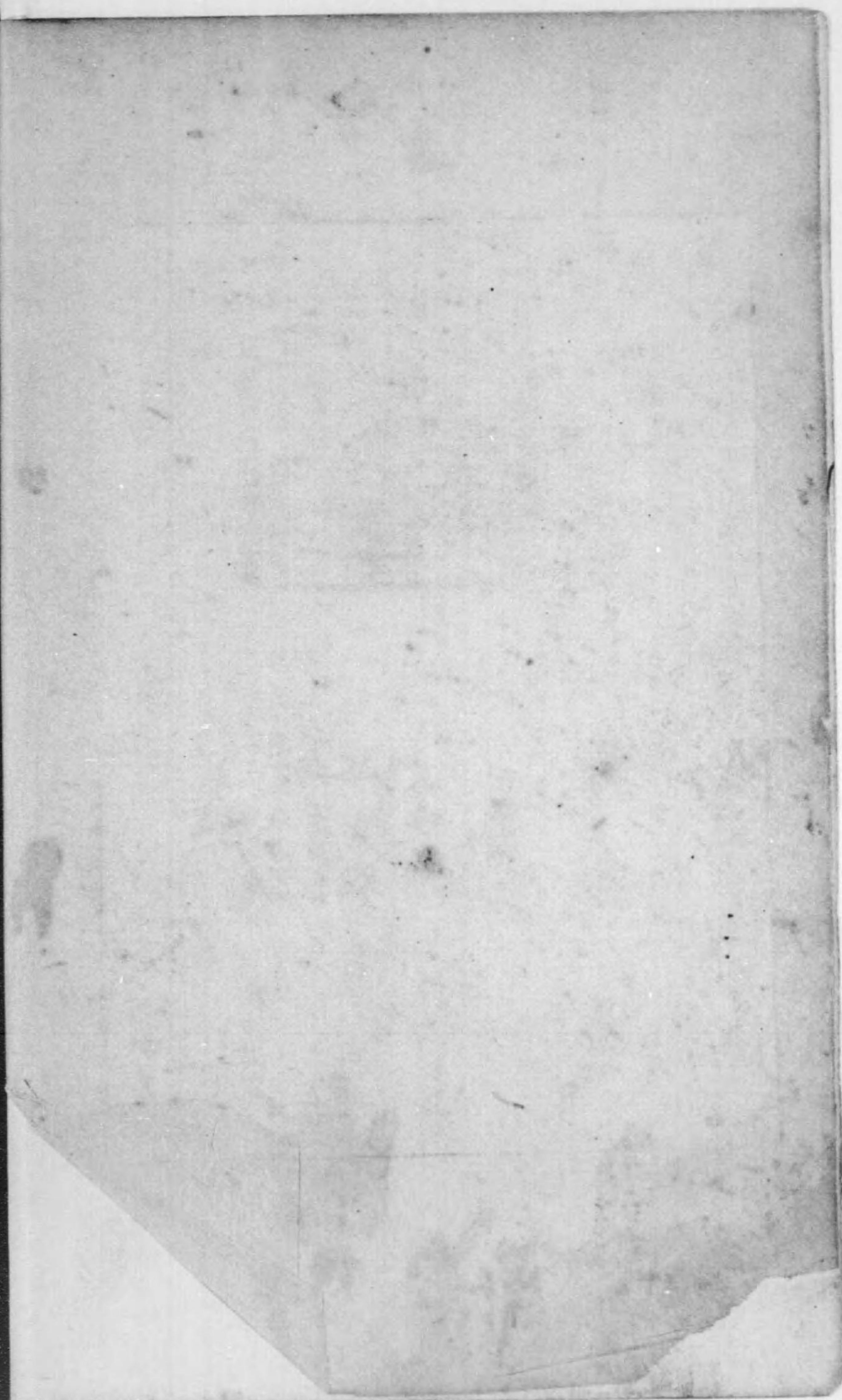






三代記

大正
2. 8. 18
内交



實錄倉三代記

綠園生著

(一)

慶長四年春まだ淺き二月十日の夜の事であつた、江州堅田の片邊に、見る蔭もなき藁葺の小家を建て、心のまゝに暮らして居る前の近江の太守佐々木六角宰相義郷の門の戸をほとりと叩く女の聲がした、義郷は五年前にあらぬ叛逆の汚名を蒙つて、一族郎黨と共に無惨の最期をお遂げなされた前關白秀次公と真逆の交りがあつたから、それが身の災害となつて石田三成の爲めに讒言せられ、秀次公の御謀叛に同心したお疑ひで、代々續いた江州の所領までを沒收せられ、遂に浪々の身となつたのであるが、天性剛毅洒落の大將でありますから、冤枉を訴へやうとするでも無く、家財家具はことごとく譜代の家人百姓に取りらせて、自分は堅田の片邊に家を構へ、その後は一竿を友として静に餘生を送つて居たのであつた。

1 最も斯ばかりの大難に處しながら微も狼狽の様子なく、湖水の波に棹して、風流を樂しむほどの人であるから、學問は廣く、諸藝にも達し、土地の人からは氏神のやうに敬はれて居る、殊に武士の覺

悟といふことに就いては、深く研究して居たのであつた。

當時浮世の事には關り合の無い義郷の門の戸を、然も夜深に叩くのは、仔細無くて協はぬ事、折柄義郷は奥の間で書見して居たが、餘りに強く叩くので、次の間に伏せつて居た僕の牧平を呼び起した

「牧平、牧平、誰か来たやうな、早く起きるか」

牧平は眠たさうに欠伸をして

「御前、もうお出掛けてござりまするか、蚯蚓なら昨日澤山取つて置きました」

「寢惚けては可かん、釣に行くのでは無い、誰か門の戸を叩いて居る、早く來意を訊ねて遣れ」

牧平は畏つて出て行つたが、程もなく歸つて來て、

「御前、申し上げます」

「何ぢや、誰が参つたのぢや」

「子供を伴れたお女中でございます、夫にお供の衆と見えて、二十七八のお武家が二人、是非お殿様にお目に掛りたいと仰せなされて……」

「子供を伴れたお女中、誰であらう」など義郷は首を傾げて「まぬし姓名を聞いて來たか」

「うゑ、お名前は聞きませぬ」

「何故聞いて參らん、執次に出て姓名を聞かぬ奴があるか」

「夫は如才なくお訊ね申しましたけれど、只當國馬淵の者とはかり、御前へ御對面致した上、具に申し上げるとのお詞でござりました」

「馬淵の人といふか」

「左様に仰せてござりました」

「心當りは無いが、兎も角も此方へ通せ、逢ふて仔細を聞いて見やう」

牧平は又心得て門口へ出たが、今度は三十五六の容貌美しき女性と五六歳ばかりになる男の子とを案内して來た、義郷は宏量海の如き人であるから、この素性も知れぬ來客に座を設けて待ち受ける、牧平は次の室へ手をついて

「馬淵からお越しになつた御婦人は、このお方でござります、と、披露した。

義郷は襖の間から次を伺ひて

「どうか此方へお入り下さい、夜中と云ひお關ひは致しません」

斯う心安う云はれたのが、彼の婦人に取つて何れ程の歡びかも知れぬ、短檠の火の届く處まで膝行も寄つて、伴れて來た子供をその身の上座に引き直した、甚しく苦勞をしたと見えて、何處やらに

定めて局の丹精であつたらうのう」
「申し上げるも涙の種、是には仔細がござりまする」

(11)

右京太夫局の語る所に由ると、木村常陸介重茲が妙心寺で腹切つた時は、春雄（重成の幼名、一に治雄に作るものもある）がまだ産れたばかりで、お上へ届け出にもなつて居なかつたから、局は密に懐にかき抱いて、江州馬淵の里には、聊かの知己あるを幸ひ、それを便つて逃れ来て人知れず養ひ育てた、處が木村家譜代の家臣若松市郎兵衛、今岡太兵衛の二人が、馬淵の里に若君恙なく在すと聞き、健氣にも尋ねて来て呉れたから、之に大いに力を得て、今日までは諸共に教育の任に當つたのであつた、處が去年は太閤殿下お薨れになり、今年には加藤福島の面々と、石田治部少輔と確執を生じた噂も聞く、戦國の世に一かど物の役に立つべき小兒を、草深い田舎で、然も女の手にて育てるのは、夜光の珠を砥にもかけず、石瓦の中に混じて置くも同様、此上の罪はあるまいと思ふから、今日は二人の郎黨を催促して、殿様を見かけお願ひに参りました、私の口から斯う申すのも如何なれど、流石は常陸介様のお胤、御惻愍なことは云ふに及ばず、物事に沈着あり、機に臨みて勇氣あることは、二人の郎黨も舌を巻いて驚くほどでござりまする、常陸介の舊誼を思し召されて、お小姓代りにも召し遣は

せ、何卒親に劣らぬ様な武士に仕立て、戴きたうござりまする、と涙ながら頼み聞こえた。
是を聞いて見ると、右京太夫局は男も及ばぬ氣象、一家の大難に處して騒がず狼狽へず、主家の血統をかき抱いて、五年の間浪々の中に養育した心掛け、天晴と云はねばならぬ、義を見て勇む義郷は局の詞を熱々聞いて
「汝の真心を草葉の蔭で聞いたならば、常陸介もさぞ満足するであらう、乃公も故關白殿下とは莫逆の友であつたから、常陸介とも自然親しくした、他人とは思はぬ、春雄は手許に引き取つて、きつと男にして取らず、其義は安心するが宜からう」と、思ひの外軽く承知したのであつた。
「それでは私の心を憫れと思し召して、春雄様を御養育、男に仕立て、下さるのでござりまするか」
「常陸介への義理、是はいふまでもない事、關白殿下御家人の遺子を養育するは、殿下報恩追善の一ともなる事と思ふに由つて、きつと男に育て、遣る、然し、春雄の一身乃公に任すであらうのう」
「お引さ受け下さらば、春雄の生涯は何事に由らず、殿様にお任せ申ししまする」
「諾しさらば、身に引き受けて養育する、而て汝は」
「私此上は思ひ置く事もござりませぬ、諸國行脚の尼ともなりて、常陸介殿御菩提を弔ひまする」
「うむ、夫もよし、さらば二人の郎黨は何とする」

「若松市郎兵衛は主人に劣らぬ忠節、勇氣も人に勝れて、戦争の進退、是は腕に覺えありと申しまする、又今岡太兵衛は勝れたる智者、いかなる大難に出逢ひましても、取り亂したる事なき兵、春雄お側に付き添ひ居らば、行末物の役に立つべき者と存じまする、由てこの二人は、炊事、草履握の賤役にもお使ひなされて、成るべくは殿様御息を掛けさせられて、お召し使ひを願ひまする」

「諾う、その儀も心得た、市郎兵衛、太兵衛、縁頭へ廻れといへ、序に近附になつて置くぞ」

「はッ」と、局は嬉しさに足も慄へて、匍ふが如くに次へ退つたが、二十日あまりの月、比良の頂に掛つて、夜は次第に深け行く庭前へ、聽て二人の郎黨は姿を見せた。

(三)

右京太夫局は春雄の事を呉々も頼んで置いて、義郷の許を去らうとした、夫までは義郷の顔と、局の顔をまぢく見詰つて居つた春雄が、此時急に聲を出して、

「乳母や、もう行くのか」と、呼んだ、

局は肉身の母親であるけれど、局の爲めには主のお胤であるから、自分からは和子様を敬ひ、春雄からは乳母やと呼んで居た、昔は母子の關係よりも主従の關係に重きを置いて居たのであつた、爾う聲を掛けられると、覺悟はして居るものゝ、悲しさが胸に滿ちて、局はハラ／＼と涙を溢して

「和子様、私もうお暇を致します、あなたは今日から此殿様をお主とも氏神ともお父様ともお師匠様とも思召して、優和しう遊ばさねばなりませんぞ、私がお側を離れますと、あなたのお身内は一方も無いのでござりまするぞ、何事も殿様のお詞をお背き遊ばしませんでした、お學問からお武藝に至るまで、精を出して御稽古をなさるので御座りまするぞ、假初にも乳母やの後を慕ふたり、見苦しい所行をして御殿様に笑はれてはなりませんぞ」と、嚙んで噛めるやうに云ひ聞けた。

春雄は別に泣きもせず、後を慕ふやうにも見え、黙つて點頭くばかりであつた、

「それから和子様の御用は、市郎兵衛と太兵衛とが辨へます、市郎兵衛も太兵衛も和子様の御家人てありまするが、今日から和子様は御當家の御家人てござりまする、お殿様の御家來同様でござりまする、されば二人の御家來も、和子様の御自由にはなりませんぞ、何事もお殿様のお指圖通りに遊ばさねばなりません」

春雄は只點頭いて、局の云ふ言を一心に聞いて居るのであつた、局はさし寄つて短檠の火に熱々と春雄の顔を見入つたが、

「和子様あなた、私の申した事がお分りになりましたか、あなたは今日からこのお殿様の御門人てござりまするぞ、このお殿様のお側で、文武二道のお稽古をお受けにならねばなりませんぞ」

「夫は分つたが、乳母は何うしやる」

「私は女の事、和子様のお側に居りましては、却て和子様のお爲になるまいと思ひます故、明日から諸國遍歴に出掛けやうと存じます」

「それではもう乳母やに逢ふことは能きんのう」

「和子様が立派な大將にお爲り遊ばした時、お目通りを願ひに参ります、申すまではござりませんが、随分御精をお出し遊ばして、お父様の御耻辱をお雪ぎにならねばなりませんぞ」

「乳母や、私が一人前の武士になつたら、きつと逢ふて呉れるなア」

「きつとお歡びに参ります」

「それさへ聞いて置けば用は無、歸れ、歸れ」

「はい、お暇を致します」と、局は深く涙を拂つて「殿様何分とも宜しくお願ひ申します」

「心配するな、親に勝つた立派な武士に育て、遣る」

「有難う存じます、其御一言を土産にして、一たん馬淵へ引き取ります、市郎兵衛殿太兵衛殿、行末長く和子様の事をお願ひ申して置きますぞ」

「市郎兵衛も太兵衛も名残惜し氣に挨拶する、局は尙くだくと春雄の事を義郷へ頼み聞こえて、たゞ

獨り春風寒き湖水の縁を歸り去つた。

(四)

其後局は如何にせしか、少しも消息が知れなんだ、けれど春雄は氣に止める體も見えず、まだ五歳の腕白盛りであるから、毎日近所の子供を集めて、悪遊戯に耽つて居た、市郎兵衛も太兵衛も、これには殆んど持て餘して、屢々意見を加へて見るが、少しも聞き入れさうにせぬ、或は義郷が叱つたら多少云ふ言を聞いたかも知れぬけれど、是は大器の大將であるから、どんな悪戯をしやうとも、一向に頓着なく、學問武藝を教へるでもなければ、教訓を加へるでも無く、春雄の事は捨て育てにして、毎日釣りにばかり行つて居た、春雄は又これをよい事に、義郷の居ぬ時は、座敷も廣敷も、玄關も書齋も、悉く自分の遊び場所にして、悪戯をして居つたのであつた。

爾う斯うする中に、その年の春も暮れて、杜宇血に啼く五月雨の頃となつた、いかな釣好も雨が降つては出掛ける理に行かんから、義郷は久しぶりに机の前に座つて、兵書に目を晒らして居る、市郎兵衛と太兵衛とは牧平と同じやうに、蚯蚓を掘つたり、草鞋を作つたり、餘念も無く働いて居る、春雄は今日も雨で、外へ遊びに行くことが出来んから、近所の腕白兒を五六人も呼んで来て、家内中を飛び廻つて遊んで居た、その騒々しさは到底お話しにはなり難ねる。」

大體の者なら叱言を言ふ處であるが、義郷は平氣の平左で、そこらに居るかとも云はぬ、春雄の遊あそびは戦争摸擬から角力になつて、角力から提迷藏に轉じた、恰ちやうど未刻少すくなく前まへであつたらう、一人の子こ供どもが鬼になつて、他の子供がそこら中を隠れ歩く、春雄は竊足ねんそくで義郷の書齋へ入つて来て、義郷が書しよ見けんをして居るその後へ身を潜めた、けれど義郷は何んとも云はぬ。

提迷藏が終んだかと思ふと、今度は投石なげいしを始めた、小石を澤山拾つて来て、家の中で投げ合ふのであるから、是は亦一方ならぬ騒々さわさわしであつた、何うかすると鐵砲彈丸てつぱうだんのやうに義郷の居間へも飛んて来る、襖ふすまに中る、障子しょうじを破る、床とこの置物おきものを轉覆ひっくりかかす、亂暴らんぼう狼藉らうじやく云ふばかりも無い、けれど義郷は何も云はぬ。

この遊戯あそびの眞最中に、殿いぬしい武士ぶしが一人家來けらいの五六人も伴れたのが、この茅屋へ入つて来た。

「ちと物を尋ねる、六角相宰殿の御浪宅は是か」

草鞋わらじを作つて居た牧平は振り向いて

「宰相様のお館は是ぢや、お前は何方からお越こしなされた」

斯かうは云つても、餘り穢きたい住居すまひであるから、彼の武士ぶしは念ねんを推して

「前の當國たうこくの領主りやうしゆであつた佐々木六角相義郷殿のお館ぢやの」

詞ことばがいかにも横柄わやうべいであるから、牧平は憤いきりとして

「夫それに違ちがひないから違ちがひないと云ふのだ、疑うたがふなら外ほかへ行つてお聞きなさい」

「然しからば執次しやくじを頼たのむ、拙者せつしやは當國たうこく佐和山の城主じやうしゆ石田治部少輔殿いしだぢぶしやうぼうだん御内ごうちに、鎌田六郎親政かまたむろちかぢと申すもの、直ただ々ただ目めに掛つて御意ごいお得えたい事ことがある、御在宅ございならば、左様さやうに通じて貰もらひたいのぢや」

牧平は不思議ふしぎさうに鎌田六郎の顔を見返つて、其そのまゝ義郷の居間へ行つた、さうして鎌田六郎來意らまいの次第しだいを通じると、兎も角も逢あふから表座敷へ通して置けといふのであつた。

處ところが座敷一ぱい小石の原はらで、足を容ゆるめる處も無い、春雄その他の子供連中は、今や石合戦いしがくせんの最中さいちゆうであつた、牧平は苦くるい顔をして

「春様、お客様があるから少し静しずかに、あアお前まへさまにも困こまつたものだな」

(五)

けれどそんな事に頓着とんちやくする春雄では無い、

「牧平め、要いらんことをいふ、お客様らゐが何んだ、皆みなが遣れ、お前達も私のお客ぢや」

双方さうほうから投げ合ふ小石が、ばらり／＼と雨のやうに落つる、市郎兵衛いちろうべゑと太兵衛たひべゑとは見るに見かねて「もし和子様、どうしたと云ふもので御座ります、そんな事をなされては、お客様へ失禮しつれいでございます

勢ひを以て攻め立てなば、いかな家康殿も敗北は知れてある、さすれば天下の政は再び大阪の御幼君（秀頼のこと）をさして云ふ）に移るのは必定と存じます、そこで貴殿」と、六郎はまたも膝を前めた。

(六)

それでもまだ義郷は返事をせぬ、春雄は此方の話がさしも天下の大事を物語つて居るには頓着なく例の子供を相手にしてがや／＼と騒いで居る、六郎は身を前めて、

これは秘密の軍議でござるが、佐々木殿は名譽の大將、漫りに御口外はあるまいと思ふから、打開けてお物語り申せとの御説でござつたゆゑ、内々で申し上げるが、此度の合戦味方大勝利に極つて居る、それを何かと申せば、先刻も申し上げた上杉景勝殿も味方、この景勝殿は音に聞こえた剛氣の大將、いざ戰場に向つては、血に餓えた虎狼のやうに只進むことばかりを御存じになつて居る、それは直江山城守といふ御家人があつて、謀計を帷幄の中に握られて居る、この上杉殿盛んに要害を構へになる城の御普請、砦、櫓をお築きになる、これは徳川殿御法度の中でござるに由て、深き御咎めのあるは必定、遂には東國御征伐といふことになる、その慮を謀つて我等主人、二十六箇國の兵を帥ゐ、堂々と江戸表へ御出陣になる、家康殿驚いて引き返さうとなさる處を、上杉の軍兵追ひかけて駆

け散らさうといふ軍略、この手にかゝつてはいかな智慧者も、手の出し處なく敗北するは極つて居る何とよい謀計ではござらぬかと、掌を指すやうに物語つた

然し義郷は別に感じた様もな、

「そこで貴殿への御口上は、義郷殿御運拙く、太閤殿下の御勘氣を受けさせられて、只今はある甲斐も無くお暮しなされてあるが、代々の御名家、殊に當國は御先祖よりの御所領でもあるゆゑ、此度秀頼公へ御加擔あつて、不肖ながら三成の爲めに力を添え下さるとなれば、關東滅亡の後は舊領御安堵なさるやうに取り扱ひ、御代々の御家名再興の事に力を盡して進じやうとござりました、お見受け申した處、まだ御老年と申すては無し、大器を以て日々竿を友となさるゝは惜しみても餘りある事拙者主人へ御隨身のお心はござりませぬか」と、始めて來意を告げたのであつた、義郷はとろんとした眼で

「石田三成といふは、觀音寺で小姓をして居た佐吉の事ぢやの」

「其邊の事は存じませぬ、只今にては佐和山二十三萬石の御主、豊臣家第一の御家人でござりまする」

「それが關東徳川殿と戦するに由つて、私に味方せいと云ふのか」

「主人より口上の意味は、まづ其處でござりまする」

「折角のお頼みぢやが、こればかりはならぬ、私も秀次公とは風流の交りを致して居たが、太閤殿下には所領を没收せられた怨みこそあれ、些とも思になつた覚えは無い、況して観音寺の小姓であつた佐吉の幕下について、戦争する心は無いから、歸つてその通りを傳へてくれ」

「無、無禮の一言、拙者主人を観音寺の小姓とは何うぢや」

六郎は一方ならぬ腹立ち、満面に朱を注いで詰め掛けた、義郷は氣にも止めず、

「夫から干戈は濫りに動かすもので無い、濫りに動かすは干戈の徳を亂るのぢや、佐吉如き軍配で、徳川殿旗本は突き入られるものでは無い、及ばぬ事を致さうより、分に過ぎた二十三萬石を大事に抱へて、ちツとは武士らしい生活をせへと傳へよ」

「云はせて置けば云はうやうも無い無禮の言葉、殊には出陣の首途に聞き捨て難き一言、お手前眞氣で云はつしやるか」

「三成こそ氣も狂はうづれ、義郷は眞氣ぢや」

「眞氣で主人を罵つたな」

「罵つたのでは無い、同國の交誼を以て忠告をして遣るのぢや、この外に云ふ事は無い歸れ」

「いや歸らぬ、貴公如き腰拔武士、關東を鬼のやうに恐れる腰拔武士、味方と思し召したは御主人の過失、否ならば否で強てとは云はぬ、御主人の事を悪口した因縁聞かう、返答のしやうに由つては、前の太守として手を見せぬぞ」

決闘眼になつて佩刀の柄に手をかけた、義郷は騒がぬ、

「爾うぢや、佐吉を物に譬へて云ふと、貪つて飽く事を知らぬ山犬ぢや、山犬に譬ある戦は出来ぬ、それを御存じも無くお味方せられた大小名が可哀想なわ、はゝゝゝ」と、大笑してそのまゝ座を起たうとした。

(七)

鎌田六郎は烈火の如くになつて、

「待て、待て」と、聲を慄はせた。

「山犬の家來に用は無いが、それともまだ云ふことでもあるか、あらば云へ、山犬の鳴き聲など聞き好いものでは無い」

「善く申した、そ、その口、美事に……」と、云ふ聲よりは前に、腰の佩力が鞘走つて「つ、劈いて……」

眞向に振り被つた二尺三寸の太刀息をはづませ、眼を血走らせて、義郷の様にきつと眼を付けた、自分が刃を抜いたから、義郷も同じく抜き合せて、對ひ合ふてあらうと思つた處、義郷は此方を振り向いて、睨むやうに突立たまゝ、佩刀の柄に手を掛けぬのであつた、六郎はいよく入を馬鹿にする

と憤つて「覺悟しろ」といふ聲の下に、はつしとばかり斬り付けた。

今まで悪戯に餘念もなく見えた春雄も、目の前にこの様を見ては驚かずに居られぬ、他の子供はちり／＼と逃げ去つた後で、縁の手水鉢の前へ突立たまゝ、目を圓うして義郷の安危を氣遣つて居た。六郎の斬り附けた太刀は宛ら飛鳥の如くて、義郷の首はあはや血煙の中にころりと落ちたかと危まれたが、六郎の太刀風よりも、義郷の手の方が早かつた、六郎の太刀風飛鳥ならば、義郷の手練は電光であつた、さつと身を開いたかと思ふ間もなく、手に提げて居た佩力の中から、一條の電閃めき波つて、

「不禮漢」と、叫んだ聲の中に、鎌田六郎親政は左の肩頭を一尺ほど切られて、その場に撞と打ち倒れた。

その時の義郷の面の恐しさは、春雄が一生涯忘れることの能さぬ恐しさであつた。

流石の春雄もぶる／＼と慄ひ出して、思はず其處に跪いた、その中に義郷は徐に刀の血を拭つて

元の鞘へ收める、一たん物凄く變つた面の色は元へ覆る、恐る／＼次の間からさし覗いて居た牧平を見返つて、

「見苦しい、此死骸をそちらへ方附けろ」と、命じた。

牧平は心得て蟲の息になつて居る鎌田六郎を漸と次の室へ運び出した、大切な君命を蒙りながら、むざ／＼と命を殞した六郎の家來は、無慘な主の最後を見て、一言の故障を云ふ勇氣も無く、堅田の町で駕を雇つて、雨の中をとぼ／＼と歸つて行つた、最もこの事が公に知られては鎌田家の家名にも關はるといふので、治部少輔へは急病の届に爲し置き、子息の某へ家督相續を願ひ出たといふことである、是れは餘談ながら序なれば断つて置く。

義郷は牧平が死骸を方附けるのを待つて、

「春雄、こゝへ來い」と呼んだ。

今までは餘り恐しくない叔父さんと思つて居た義郷の今日の様を見て、恐い、強い、怖しい人と云ふ事が解つた跡で、

「はゝ」とばかり手をつかへた。

「お前に云ひ聞かすことがある、これへ參れ」

「はら」

「其處では話が出来ん、これへ参れと云へば是へ参れ」

例に異つたことは無いが、これが何んとなく身に沁みる。

「はい、何か御用でござりまするか」

義郷よりは自分の方が異つて居る、詞が今までのやうに疎雑で無い。

「も少し進め、一生の心得を云ひ聞かせる」

(八)

義郷は莞爾ともせず、

「お前は今の男が、何う云ふ理由で私の刃の錆になつたと思ふ」と問ひ掛けた。

春雄は返答の詞が無い。

「お前は最初から側に居て、始終の様子を見て居たのであらうが、何ういふ理で、鎌田六郎が二つとない命を殞したと思ふな」

重ねての問ひに黙つては居れらぬ。

「はい、何ういふ理由でござりまするか」

「知らんといふか」

「私には解りません」

「お前も悪戯に掛けては一人前ぢやが、また物の道理を辨へる力は無いのう、鎌田六郎が二つと無い大事の命を殞したは、詮ずる處堪忍の二字を忘れたからぢや」

「はら」

「人間が世に處して行くには、何うしても堪忍の二字を基とせねばならぬ、堪忍の二字を土臺にせぬ人間は、恰ど泥の上へ建てた大家の様な者で、少しの風雨にも瓦解する、早い話が今の鎌田六郎、私が山犬同様な人間ぢやと罵つた、あの時堪忍さへ致し居れば、命を殞すにも及ばず、又君命を辱むるにも至らぬ、それが僅の堪忍を致しかねて、私に白刃をさし向けた、それが命を殞す基になつて居る、あれしきの事に堪忍の二字を守り得ぬ様な不所在漢を家來に致し居るさへあるに、大事の役目に選んだと云ふのは、治部少輔も馬鹿な男、とても天下の大事を語るには足らぬ、鎌田六郎もさほどの大役に選まれるほどの男であるから、原より馬鹿ではあるまいが、只堪忍の二字を忘れたばかりで、自分の命も殞し、主君の名まで穢すやうな事に立ち至つたのぢや」

春雄はまだ五歳の子供であるけれど、怖い恐いと思ふ義郷の詞であるので、一々胸へ針を刺すや

うに聞こえる、沈と垂頭して身動きもせず聞いて居た。

「それでお前もよく考えて、この堪忍の二字を身の守りとせねばならぬ、堪忍の二字に見放されては
とても立派に世に立つて行く事は能きぬぞ」

「は」

「お前も只の子供では無い、お前の親は木村常陸介重茲と云つて、前關白の執事までも致したもので
ちや、最も最初は太閤殿下のお目鑑に協つて、秀次公のお附きともなつたものぢやが惜いことには秀
次公の非行を諫めかねて遂に太閤の御怒りに觸れ、あらぬ悪名を蒙つて、妙心寺の露と消えた、お前
も全體ならば安穩で居られぬ處を、母の注意とは云ひながら、斯うして無事に成長致したのは、全く
天が常陸介の最後をお感みあつて、お前に父の悪名を雪がせやうとなさるのぢや、お前は是から武士
として立派に名をなすばかりでなく、主と頼む人に忠義を盡して、親の悪名を清うせねばならぬ、さ
ればお前の武士道も立ち、行末武名を輝かすことも能き、私はお前に悪戯を休めよとは云はぬ、止
めよとは云はぬが長幼の序を亂してはならぬ、先日より黙つて聞いて居るに、二人の家來の云ふ事も
多くは上の空に聞いて居るらしい、それではならぬ、その様に家來を疎略にしてはならぬ、お前が成
人していざ一身の大事となつた時、お前の爲に死ぬものは二人の家來ぢや、是も序だから云ふて置く

是からは善く氣を附けて、人に笑
はれぬやうにせねばならぬぞ」

(九)

義郷が一度の教訓は、市郎兵衛
太兵衛二人の家來が、千萬言を費
した忠言よりも善く利いて、その日からは
春雄の行爲ががらりと變つた、昨日までは
腕白で仕方のなかつたものが、今日は見違
へるやうに優和しくなつて、近所の子供に
言葉も交さぬ、義郷が釣に行く時は、同じ
舟に乗せられて、この子供のやうな老英雄
と樂みを同らし、義郷が居間で書見てもし
て居る時は、矢張側に付添つて書物に親し
むやうになつた、義郷も是て育て効がある



と喜び、二人の郎黨は行末頼母しく嬉し涙にくれた。

義郷が石田治部少輔からの使者を斬つて、この利發者の大事を味方しなかつたと云ふ事は、双方で秘密にせられて居たけれど、秘すより現はるゝは無して、いつの間にか天下へ知れ渡つた、それが傳へ傳はつて、遂に徳川家康の耳へも入つた。

それから半月ばかりも經つて、五月雨の空近頃が無い好天氣となつたから、義郷は例の一竿を携へて湖水の邊へ釣に出掛けたのであつた、その日は舟を行るのが面倒だといふので、柳の蔭に床置をすゑて、そこで糸を垂れて居た、側には春雄が附いて居る。

すると未刻少し過ぎた頃、牧平が宙を飛んで遣つて來た、

「殿様又來ましたよ、又殺されに來ましたよ」

義郷は笑つて

「牧平、又慌てゝ遣つて來たな、來たとは何が來たのぢや」

「立派な武士が來ました、是非殿様にも目に掛りたいと云つて……」

「さうか、では石田の家來が、先月の恨みを云ひに來たのだらう」

「いえ、さうではありません、私も若しやと思ひましたから、善く聞いて見ましたが、石田の家來

では無く、徳川家康の使者だと申します、石田の家來とは違つて、大層丁寧な侍でございます」

「徳川殿から使者が參つたといふか」

「へえ、左様でございます」

「徳川殿から……はてな」

「御留守だと云つて追ひ返して遣りませうか」

「いや、それも不憚な」

「それではお歸りになりますか」

「さうさな、歸つて來意を聞きたいが、恰ど今釣れ盛つて居る處ぢや、止めて歸るも惜しいやうに思ふ、使者の名は何と云ふ」

「成瀬隼人正とか申しました」

「なに、成瀬隼人が參つたか、彼は聞てゆる大剛の士、禮を厚うして迎へる筈ぢやが乃公は世を捨てた身、厳格しい禮儀にも及ぶまい、お急ぎならば是へと云へ」

「へえ、では……」

「それともお急ぎでなくば、夕暮過ぎには立ち歸る、暫時お待ち下さるかと申して見よ」

「委細心得ましてござります」と、いふので牧平は立ち去らうとする、義郷は餘念も無く釣を垂れて居る處へ、成瀬隼人正は供をも伴れず只一人て遣つて來た、けれど義郷は氣が附かぬ。

「卒爾ながら、お尋ね申す、佐々木六角宰相義郷殿ござるかの」

義郷は一心不亂に浮標を見詰めて、この聲が耳へ通らぬ、春雄は袖を引いて、

「殿様お客様でござりまする」

義郷はまだ振り向いても見ぬ

「六角宰相殿でござるか、拙者が徳川家譜代の家臣成瀬隼人正でござる」

「もし、殿様、お客人でござりまする」

「義郷は浮標を見詰めたまはして」

「存じ居る、成瀬殿失禮ながらこのまゝで御免を蒙りまするぞ」

「勿論、このまゝ、お樂みの處をお邪魔して濟まんが、主人よりの密旨、ちと申し上げたい事がござ

つて……」

「何かは存じんが、これ承る、まづ御來意を仰せ下され」

隼人正は芝草の上に座を占めた、夕陽はちり／＼照り渡る。

(十)

「今日参つたは餘の儀で無い、先日石田治部少輔家中の者、貴殿を味方に頼むといふて、再三使者に参つたさうな、然るに貴殿、眼敏く、天下の形勢を看破つて、治部少輔に味方致されぬばかりか、只一刀に使者何がしを切り捨て、節義を全うせられたといふ、此事我等主人も聞き遊ばされて、義郷殿こそ聞きしに勝る氣象なれ、當時戰國の習ひ、主取をお望みあらば、随分高祿にも有り付き、いざ戰爭と申す場合には、一かどの勳功をお樹てなされるのも心のまゝ、蛟龍の器を以ていつまでも池中にお屈めなされるは惜しむべし、家康不肖なれど關東の押へとして、内大臣を辱うし、所領餘りあればその中の幾分を裂き、貴殿御馬の材にも呈らせんと御口上、士は己を知る者の爲めに膝を折りて、主人の爲に奉公の忠を御盡し下さるやう、數ならぬ在下よりも只管お頼み申すてござる」と、隼人正は辭を申うして云つた。

義郷は夕陽の光淡く照る水の面に、今浮標の動く最中であつたから、この口上には返事もせぬ、春雄は子供心にも、亦先日やうな恐しい事になりはせぬかと心を痛めて居るのであつた。

「斯う申しては如何ぢやが、主と頼みて耻かしからぬ大將、徳川殿へ御隨身下さるとなれば、及ばずながら在下も力を添へて、御前へのお執成は屹度仕る、御返答は何うてござらうの」

義郷は漸と一尺あまりの大鯛を釣り上げて、この潑刺たるを籠の中へ入れながら、

「徳川家康殿こそ太閤殿下の度量はおはさね、古今類なき名將と承つたが、今の口上で愛憎が盡きた、貴公江戸へ歸つて左様申せ、義郷浪人こそ致し居れ、盲目は主に取りたくござらぬと……」

「え、誰あらう、徳川内府様を……」と。隼人正は怪しからぬ様で問ひ掛けたが、そこは家康の股腔だけあつて、思ふ事の十分の一も口へ出しては云はぬ「もし、所領にも望みてもござらば、其處は又我等の計ひで……」

「馬鹿を申せ、瘦せても枯れても佐々木義郷ぢや、所領の爲めに奉公はせぬ」

「さらば他に……」

「望みといふては、無い、家康公もし誠の賢君名將ならば、それがしが石田治部に同心致さぬ一事を以て、其志を御存じあるべき筈ぢや、それに此度の小事をお聞きなされたらあつて、急のお召はその意を得ぬ、必竟それがしを愚の者と思し召してのお用ひと存ずれば、いかに奉公の忠を盡しても、行末頼もしうはござるまい、由つて折角のお志ながらこのお話は断り申す、どうか家康公にそれがしの申したる言を御披露下さり」

云つて又絲を垂れた。

「成るほど、是は御有理のお詞なれど、主人の内意、左様云ふ理では決して無い、兎も角も一應主人旗下へお越し下されて、篤と内意を聞かせられたる上……」

「いや、見込の無い大將に會ふたりとて効はあるまじ、浮世忘れた耳に知行所領の話、聞かさへも耳が穢れる、再び仰せ下さるな、それがしは是にて御免を蒙る」

云つて竿を肩にして悠々と立ち歸る、後からは春雄魚籠を持つて付き従ふ、隼人正は呆氣に取られて立つて居た。

(十一)

その後再三家康から使者を送つて、義郷に隨身を勧めたが、義郷は前にも云つたやうな理由を名として遂に勧告に應じなかつた、若義郷が家康の部下に屬して、得意の軍略を振つたならば、或は一かどの大名となり佐々木の家名を再興したかも知れぬ、けれど彼は何んと云つても聞き入れず、遂に一生涯を堅田の漁夫で終つて了つた、彼が石田治部少輔の使者を一刀に斬つて捨てたに就ては、誰しもその卓見に首肯したらうけれど、家康の勧告を斥けて、當然手に握る事の出来た、富貴榮達を逸した事に就いては殆ど義郷の深意の何れにあるかを解するに苦しんだのであつた、然し義郷は義の堅い大將であつた、百萬石の知行よりも、一片の節義を重しとした人であつた、彼が名利の下に膝を屈しなく

つて、一生を堅田の漁夫で送つたのは、右京太夫局に引受けた責任を全うする爲ては無かつたであらうか、彼は局に約するに、春雄を立派な武士にして、冤枉の罪名の下に祀らざるの鬼となつた、常陸介の名を清うさせやうといふ事を以てした、常陸介の名を清うし、常陸介の冤枉を雪ぐはどうしても春雄を豊臣家の家來にせねばならぬ、行末の幸福は徳川家の士にした方がよいのは知れて居るけれど、それは萬劫未代まで豊臣家の仇とならねばならぬ、假令常陸介は豊臣家から疑はれて、妙心寺の露と消えたにせよ、木村家と豊臣家とは主従の間である、義として豊臣家を敵に取る事は能きぬ、成る者ならば春雄を豊臣家の家臣にして、さうして常陸介の悪名を雪がせたかつた。

義郷が若し家康の手に配けば、春雄も家人にならねばならぬ、それで義郷は家康の使者を斥けて一生漁夫で終つたのではあるまいか、義郷の今の境遇は、所領よりも名譽よりも、春雄を早く一人前の武士にして、右京太夫局に誓つた事が遂げたかつたに異ひない。

其後は別に異なる事もなく相變らず義郷は釣を垂れる、春雄は伴をする、偶には春雄を膝下へ呼んで讀書その他の事を教授する事もあるが、これは眞の折々であつた。

爾う斯うする中に關ヶ原の大戦は起つた、日本では古今その例が無いほどの大戦ではあつたけれど、勝敗は忽ち決して、西方の大將であつた毛利輝元は降参する、石田三成は誅に伏する、家康は旭日の

昇る勢で天下の主となつて了つた、義郷はこの戦争の結果に就ても、春雄の爲には少からぬ苦心をしたのであらうと思はれる。

これから慶長八年春雄が九歳の時、家康は征夷大將軍となり、秀頼は内大臣となつて、徳川豊臣兩家相併んで世に出て行くやうには見ゆるが、内實はさうで無い、秀頼は僅百萬石の所領、攝津、河内、和泉三箇國の主と云ふだけで、事實は一箇の大名といふに過ぎぬ、けれど義郷はこの頼もし氣なき人を春雄のち主に仕やうといふので、學問武藝を仕込んで居る。

その後は一向變る事も無いが、徳川家は繁昌にて天下の衆望を得て行くと反比例に、豊臣家は殆どある甲斐もなく衰へる、處かこゝに兩家の間に不思議な縫れが出来て來た、不思議な縫れと云ふは他でもない、例の京都大佛殿の梵鐘問題であつた、是は誰しも御承知の事であるけれど、摘要して申し上げて置かぬと、話の順序がつかぬから、一寸概略だけをお聴きに入れやう。

(十二)

その時から算へて十九年前に當る、天正十八年は、太閤全盛の砌であつたから、自分の武威の般であつた事を末代まで知らせたいと云ふので、大佛殿を東山に建立した處が、慶長元年七月の大地震で悉く破壊した、太閤殿下を見て大いに患へて云ふには、是は何んたる馬鹿氣な事だ、乃公がこの

佛殿を建立したのは、天變地妖の害を除かうと思ふからであるのに、こんな大きな身體で居ながら自分の身さへ保つことが能はず、見る影もなく頼れて了ふやうなことで、何うして人を救ふことが能ざるものか、と云ひながら弓矢を取つて三度までも射た上、もう大佛には愛想が盡きたといふので、信州善光寺から佛像を取り寄せてこれを其處へ安置した。

けれど北の政所は評判の信仰人であるから、太閤薨去の後、善光寺の佛像は元へ返して再び大佛を鑄造したが、善くく大佛には縁が無かつたと見えて、大佛の首を載せやうとする時、鍛工の錯誤で鐵火を胴へ住ぎ入れたから堪らない、忽ち火災を起して見る／＼間に焼けて了つた、斯ういふ風で大佛と豊臣家とは不思議な内縁があり、遂に三度目の大佛建立が豊臣家滅亡の原因になつたのは奇怪至極と云ふべしだ。

秀頼は慶長十三年八月、北政所の遺志を繼ぐと云ふので、大佛殿造營の手筈始めを舉行した、これが豊臣家で大佛を造つた三度目である、それが段々工を竣つて、佛像も鑄、又梵鐘をも鑄た、その鐘の銘は南禪寺の長老で、其の頃碩學の名の高かつた清韓長老が選んだのであつたが、この銘の中に「東迎素月、西送斜陽」とあるは、月を關東に比して陰となし、日を大阪になぞらへて陽としたので、その次に「國家安康」の四字を挿んだのは、家康の二字を截て、國安からんと云い、暗に關東を調伏

したのであるとの難題を持ち出した。

是に就ては例の片桐且元が命懸けて辨疎をしたけれども聞かれぬ、豊臣家の大奥からは大藏局、それに正榮尼を遣はしてさまざま辨疎したのであつたが、家康はまだ聞かぬ。

さればとて、大佛の鑄造を終つて居るのに、開眼供養の式を擧げずには居られぬから、大阪方ではよろ／＼準備に着手した、これが慶長十八年の末であつた。

その頃大阪方でも、もう一度太閤在世の當時に見た榮華の夢を見やうと願ひ、徳川家の威勢を妬む者もあつて、天下の浪士や豊臣家に所縁ありながら、日蔭者になつて居る英雄豪傑を招き集めた。

慶長十八年は春雄が十九の歳で、義郷ももう大分老境に入つて居る、市郎兵衛と太兵衛とは、義郷の丹精で、春雄が日に／＼生長するのみならず、學問武藝にも熟して来る、容姿も次第に美はしくなるその姿、その聲までが死んだ常陸介に生寫しとなるのを見て、嬉し泣きに泣いて居た。

するとその年も明けて慶長十九年正月、太兵衛はある日市まで買ひ物に出て、莞爾として歸つて来た。

莞爾として歸つて来た太兵衛は、買物を臺所へ遣つて置いて、庭前から縁へ廻つて来た、此時義郷は書見に倦んで、釣の道具を調べて居たが、太兵衛の顔を見るより、

「太兵衛、今日は嬉しい事があると見えるな、顔の相が頼れて居る」

太兵衛は縁前に跪つて、

「へえ、今日は若様の爲めに耳寄な事を聞いて参りました」

「春雄の爲に……」

「へえ、誠に耳寄な事でございます、お殿様は御存じて居らつしやいませうが、大阪方と江戸將軍との間に縫れが出来て、今にも戦争が起るさうにござります」

「浮世の事には關り合ひをせんが、何處てそんな噂をするな」

「私も今日お城下へ参つて、始めて噂を聞きました、處がもし不思議な人に出逢つて、大阪方の様子を悉皆聞くことが出来ました」

「不思議な人とは」

「身分が異つて居りますゆゑ、殿様なんぞ名前も聞き及びはござりますまいが、常陸介の御家人に、

「塚原才兵衛と申す者がござりました」

「塚原才兵衛、一向聞いた事が無し」

「御存じの無いのは御有理でございます、主人全盛の頃には雜式頭を勤めた者で、當年は五十九歳、昔氣質の老人でござります」

「それが何うした」

「今日その男に出逢ふたのでござります、常陸介様御生害の後は、土佐の長曾我部様を便つて、關ヶ原の戦争にも加はつたげにござりますが、運拙く世に埋もれて、久しく浪人致して居たのを、今度長曾我部殿豊臣家御歸参に就いて、その身も隨身、百五十石取りの侍になつたと申します」

「常陸介家人が世に出るのは芽出度い、大阪方の様子は何んとあつた」

「お聞き及びてもござりませう、大佛殿の鐘の銘の一件で、江戸將軍から一方ならぬ御難題ぢやげにござります」

「それは聞いた、それで秀頼公、關東を敵にして戦争でもなさうとるか」

「其處まで承りませんが、才兵衛の申すには、大阪に於かせられては二三年前より、天下の浮浪人を御扶持になつて居たが大佛殿の一條から、戦争でもあると見えて、更に多くの浪人を召抱へ、取

分け豊臣家に由縁ある者は、高祿をお與へなさるやに申します、お殿様思し召しは何うか存じませんが、春様も今年はお十九歳、お蔭を持ちまして一人前の武士とも爲らせられたる事、もしお殿様お許しが出ましたら、才兵衛の縁に絶つて、大阪方へ御奉公を遊ばすやうに」

こゝまでは續けて云つたが、春雄が腫んだとも潰れたとも云つて呉れぬので、幾分か張合拔がしてそのまゝ沈と口を嚙んだ、義郷は暫く考へて

「私の思ふ旨もある、市郎兵衛を是へ呼び」

「へえ」と太兵衛は後を向いて「市郎兵衛、市郎兵衛、お殿様のお召だぞ」

玄關前で草鞋を作つて居た市郎兵衛は、應と答へて現はれ出た、義郷は見て、

「春雄は何らした」

「お居間で御書見になつて居られます」

「どうか、話すことがある、是へと申せ」

例とは異つて詞が改まつた、市郎兵衛は心の中に心配しながら、春雄の居間と定められた南向の六

疊へ行つて、

「春様、お殿様のお召してござります」

春雄は徐に巻を捲ふて、「さうか」と、云ひさま起ち上つた、十九歳の角前髪、女にしても見まほしうとはこんな姿を云ふのだらう。

(十四)

春雄はもう十九歳であるから、普通ならば疾にも元服すべきであるが、義郷の思ふ所でもあつたと見え、その時まで喝食姿のまゝ置いて置いた、義郷の召と聞いて縁端傳ひに座敷へ通つて、禮儀正しく平伏する、義郷は機嫌好く、

「春雄、おぬしは十九歳であつたのう」

「御意でござりまする」

「全躰十五歳の時、元服致さする筈であつたが、人間は年齢ばかり大人になつても、心が子供では何んにも爲らんから、今日まで童形のまゝ置いて置いた、然し追々成人して今では一人前の士となつても宜しい、幸ひ今日は吉日であるから、私が加冠の役になつて元服を致して遣る」

市郎兵衛、大兵衛の満足は云ふまでも無い、春雄は謹んで、

有難く存じまする」

「元服にはそれ／＼有識故實があるが、火急の場合であるから略儀で済ます、市郎兵衛は理髪役、

太兵衛は鏡臺の役、今日は子の日であるゆゑ申の方が吉方に當る、春雄も前は申の方へ向いて座るが好からう」

春雄は萬事沈着いて吉方へ座り直した、義郷は何時の間にも準備して置いたものか、牧平に吩咐けて一間より調度を出させる、その中に市郎兵衛も太兵衛も衣服を改めて役目の座に着く、と理髪に選まれた市郎兵衛が總ての調度を持つて出る、まづ第一には長小結の烏帽子、これは春雄の前右の方に置く、次には打亂箱、これは烏帽子の左に置く、次には汗坏に白水を入れてそれを尻枕にのせ、臺にすゑて持ち出で、打亂箱の左に置く、それで調度は調うて市郎兵衛は詞正しく、

「只今より御髪に参ります」と挨拶する、さうして春雄の後へ寄り、元結を解いてそれを亂箱へ入れ、櫛を取つて髪を梳き、細梳にて鬢を揃へ、水引一筋取つて假に結び更に小元結を取つて、假緒の水引を少し轉し、その後へ小元結と三巻巻きて結ぶ、それから水引を筋取つて小元結の結び餘りを鬢に取りそろへ、更に三巻する、その又結び餘りをそのまゝ置いて、その上へ墨紙を當て、その上を又水引にて三巻する、都合結び所の三ツあるを一ツにして三巻づゝ巻く、これを三々九巻と云ふ九は芽出度の數であるから、九で納めるが吉例にしてある、

それが終ると左の手に柳のかき板を取り、右の手に箆刀を取つて、かき板の上へ鬢を載せ、小元

結の巻めと第二の水引との間を切り、鬢の長さを好い程に計らいて、切りたる髪を亂箱へ入れ春雄の後より三尺退つて加冠の人の烏帽子を冠せるのを待つて居る。

するとその後へ太兵衛が出て、烏帽子を春雄の前近く左の方へ寄せて退く、すると義郷が立ちて春雄の前に座し、烏帽子を取つて冠せ、後の烏帽子留めの針を鬢にさして退く、これにて元服の法は終るのである、義郷はつくづく見て、

「さて／＼善く似合ふた、この姿を見るにつけて、世に亡き常陸介の事が憶ばれる、そこで名乗は……」と暫く考へて「常陸介の名乗重茲の一字を取つて、重成と號けるが好からう、精神一たび到れば何事か爲らざらん、人間は何事をも成し遂ぐるといふ心が無うてはならぬ」

市郎兵衛太兵衛の二人は互に顔を見合せて主人の男になつたのを歡び合ふて居る、義郷はまた詞を改めて「今日からは木村重成、父の家を繼ぎたるからは、昨日までの童でない、何れなりとも主取をして、名を後世に残さねばならぬ、それで改めてお身に尋ぬるが、お身は名を求むるか富貴を求むるか、譽が欲しいか、知行が欲しいか、この返答が聞きたいものぢや」

「重成は膝の上に兩手を置いたまへ、
「私、富貴は望みてはおりませぬ、

義郷は我が心を得たりとのやうに微笑んで、

「富貴は望みて無いと云ふか、さらば名、譽れ……」

「身は死すとも名の譽れ、一念只父の汚名が雪ぎたうござりまする」

「可し、さらばお身は秀頼公お内人となつて、常陸介が悪名を雪ぐことに心掛けよ、秀頼公御内には眞田後藤長曾我部の面々補佐し奉りて、武威未だ全く落ちずと雖も、例へば盛りを過ぎたる花の、あしたの風を待つが如く、長き命あるべしとは思はれぬ、主と頼みて久しき榮を見んことは難かるべきも、後の榮えを見るばかりが武士の本意にはあらず、お前の心に少しも富貴を願ふ心あらば、徳川殿へ推舉せばやと思へたれど、一念只父の穢名を雪ぐにありと云へば、秀頼公へさし上ぐる、主を頼みて後の心掛けは更めて云ふに及ばず、市郎兵衛、太兵衛、お身も供して重成に取り返し附かぬ過失をさするな」

市郎兵衛と太兵衛とは聲を揃へて、

「御教訓有難うござりまする、斯くて若様世に出て給はし、先殿様も御満足、右京太夫局もさぞお歡び遊ばしませう、常陸介様は秀次公にお事へなされて、あらぬお疑ひの中に非業の御最期、是れ然し

ながら時運の然らしむる所なれば悔いて詮なし、若様男とならせられて、御舎弟秀頼公に属させられ父君の御名を清うしたまへば、お家の名はそれで立ちまする、假令秀頼公御運拙く明日滅亡し給はんとも、若様は花となりてお散り遊ばすことが能きまする、是と申すもお殿様のお蔭、九つの世を替ふるとも報恩の誠を盡す時あるまじきかと、只そればかりが心懸りてござりまする」

斯ういふ尾に着いて、十三年來親に勝りたる大恩を受けたる慶びを述べて、後は祝ひ酒宴となつた

慶長十九年二月五日、大藏局の推舉に由つて、大阪城中に一もとの花は移し植ゑられた、名は木村

重成、昨日江州堅田より大藏局を頼つて來て、直に秀頼公に見参したのであつた、大藏局へ誰人

が重成を紹介したかは、こゝに説き明かす必要は無いらう。

秀頼公は重成が風姿の美しく優しき間に、稟として犯すべからざる威風あるのを見て、心の中に頼

もしく思つた、殊に彼が兄秀次公に執事であつた木村常陸介の遺胤で、さうして秀次公の親友であ

つた佐々木六角宰相義郷の教訓を受け、その手許で育てられた者だと聞いて、一入懐しく頼もしく思

はれた、由つて始めから優握なお詞下されて、長門守に任じ、眞田、後藤、長曾我部を始めその他の

奉行七武者にも引き合せ、七百石を下されて、以後忠勤を勵むべき旨仰せ下された。

大藏局の推舉であるから、重成は勢ひ大野治長織田有樂などの仲間に入りて、大奥の人々と接近

する筈であつたが玲瓏玉の如き彼の氣質は、陰険にして偽り多く、眞實無くして儀式のみを重んずる大野一派の人々と馴れ親しむことは能きなんだ、それで入城以來は眞田後藤の人々と交はつて、常に武邊にのみ心を傾けたれど、姿の美はしきと共に、心も亦風流であつたから、時としては秀頼公の相手として、亂舞狂歌の樂みにも耽つて居た。

斯ういふ風に重成は武將たる眞田後藤の人々にも信任を得、秀頼公にも寵愛せられて居たので、新参者の分際で怪しからぬ事との非難は何處の果にもある嫉妬の口の端に乗せられた、然も當時は前に記した鐘銘問題の爲に、城中は鼎の湧くやうな騒ぎであつたから、重成も亦その波の中に巻き込まれて、頻りに胸を痛めて居た。

(十六)

何處の國、何時の代にも、茶坊主ほど始末の附かぬ者は無いのであつた、慾が深く嫉妬が深くさうして君公の御前へも罷り出る、彼か三寸の舌の頭に、何萬石の知行を棒に振つた者が少くない、附届の悪い大名などは、何かの時に恥をかゝされる、重成は正直一遍の若武者で、忠義の他に何もないから、況して茶坊主などは眼中に置いて居らぬ、新参者ではあるが秀頼公のお覺えは芽出度く、眞田後藤などの歴々と肩を併べて、一方の旗頭となつたにも關はず、茶坊主へ一度の附届もせぬ處か

ら、坊主等の評判は殊の外悪かつた。

木村長門め、君龍に誇つて我々を輕蔑する、いつか一度は目に物見せて呉れやうのう、と互に機會を待つて居たけれど、重成は氣が附かぬ。

一日の事であつたが、秀頼公は例の鐘銘問題について、淀君と御對面、密々何か御協議になつて居る、重成はお詰所に只一人座を占めて、折からの秋雨に、庭の小草に蟋蟀の唧くのを聞いて居たが、其處へ遣つて來たのは、茶坊主中ても随分顔の利けた宗右といふ男であつた。

「あゝ、宗右か、秋の雨は淋しいのう」

「誠に陰氣で可けません、それに虫の聲が膈へ泌み渡るやうに聞こえます」

「内府様は何う遊ばして在らつしやる」

「只今まだ淀様と御密談最中てござりまする」

「それでは御用もあるまい、こゝへ來てちと浮世話でも致せ」

宗右は少しばかり膝を前めて、

「私、御存じの通り御殿にばかり居りますゆゑ、浮世の事はちつとも知りません、是は却て長州公の方が近い處を御存じてあらうと思ひます」

「然し歌人は居ながら名所を知るといふ、お身なども御殿に居て、浮世のさまを知りさうなものてな
いか」

「中々さうは参りません、處て長州公、一度お暇な時、お聞き申さうと思つて居りましたが、浪人の
味はどんなものでござりますな」

「異しなことを聞くのう」

「宗右まだ一度も嘗めたことがござりません」

「浪人の味は辛いものさ」

「へえ」私は又苦いものかと思ひました、然し辛いにも色々ありますが、鹽のやうに辛いか醬油の
やうに辛いのか、少し分るやうにお話しを願ひます」

「宗右の心でこんな事から長門守を嘲弄して、日頃の鬱忿を晴らさうとするのであつた、けれど重成
は中々腹を立てぬ、

「乃公も其處までは氣が附かんが、お身はまづ何のやうな辛さと思ふ」

「私浪人致したとなければ、この御返答は致しかねます」

「其處が歌人は居ながらにして名所を知るのぢや、は、は、は、」

「重成が何んと云つても取り合はぬので、宗右はやゝ張合ひ抜けがしたらしい。

「長州公、斯う申しては失禮なれど、あなたは堅田の茅屋で御成人、能狂言など御覽になつたことは

ご存じですか」

「まことに耻かしいが、まだ一度も見たことが無し」

「ては御覽に入れませうか」

「秋雨の徒然、これで見物致すであらう」

「宜しい、只今お目にかける、宗圓は居らんか宗圓々々」

宗圓は宗右の幕下で、茶坊仲間の横道者である、應と答へて入つて來た、後につゞいて五六人の茶
坊主ども、一物あり氣に附いて來た。

(十七)

宗右は一同を振り返りて

「何れも御苦勞、さて外では無いが、こゝにお在の長州公とも云はれる方、まだ能狂言を見たこと
が無いと被仰る、どうぢやの何事も功德になるが、こゝで一曲お目かけやうては無いか」

宗圓は目を圓うして、

「ま、長州公がまだ能狂言を御覽なされぬと……」

「さうぢや、由てこゝてぬしと合舞、甘い處をお目に掛けやうでは……」

「それも好からう、さらば何を……」

「何とは限らぬ、武張つたものがよいてはないか」

「武張つたものといふと……」と、宗圓は良考えて「長州公は風流を旨となさるゝ、それを只武張つたばかりにては御意に入るまじ、私の存ずるには、情の中に勇武の單れる紅葉狩などは何うてこ

らうな」

「紅葉狩は面白からう、さらば拙者が立方をする、貴公はそれにて地をなされ」

宗圓は「心得、たと勢好く、手に持つ扇子に拍手取りて「あら淺ましや、我れながら無明の酒の酔

ひ心」と語り出せば、他の茶坊主ども聲を揃へて「まどろむ間もなき中に、あらたなりける夢の告と」

宗右は扇子取りて舞ひ出す、此の道に掛けては堪能至極の者であるから、さす手引く手に云ひ難き

妙味がある、やがて「驚く枕に雷火亂れ、天地もひびき風あちこちのたづきも知らぬ山中に、おほつ

かなしや恐ろしや」の地となり足拍子踏み鳴らして、彼方此方舞ひ歩く中に、何んても重成を嘲弄し

て遊ばうと云ふ氣があるから、故意と重成の前近く足を運んで、不思議や今まで有りつる女、とう

と

く化生の姿を現はし、或は巖に火焰を放し、又は虚空に炎を降らし」と語り出せば、手に持つ扇

子で重成の頭を丁と打ち、咸陽宮の煙の中に、七尺の屏風の上になほあまりて、その丈一丈の鬼神の、

角はかぼく眼の日月」と舞ひ出せばまた丁と打つ、この亂暴狼藉に出逢うては、いかな大器大量の

兵も堪忍なり難い處であるが、重成は顔の色もかへぬ。何故頭を打つたとも咎めもせぬ、泰然自若

としてこの怪しからぬ振舞を眺め入つた。

宗右はその中に舞ひ終る、他の坊主共は手を拍つてわい／＼と賞め立てる、宗圓は冷笑ふやうに

「長州公、能は風流なものでござりませうかな」

重成は一向平氣で、

「是ならば折々内府様御相伴で拜見する、宗右お身は大した隠し藝を持つて居るの」

「長州公、お解りになりましたかな」

「兎も角も感心した、お身は能師になつても一人前ぢや」

この位嘲弄したら、さぞ重成が腹を立ててあらう、腹を立て、刀傷に及ぶやうな事があつたらこ

れを落度で讒言の資を作つて遣らうと考へて居た、當事が悉皆外れて、少々張合抜けはしたけれど、

根深く謀んで居る事であるから、宗右もまた何食はぬ顔で、

「長州公、お寝めのお詞で、私も浮む瀬がござりました、只今承れば内府様御前で折々お相伴になつてお在さうな、定めてお嗜みもござりませう、一さしお舞ひなされては何うてござります、お氣には入るまいが地は私が勤めます」と、意地悪う云ひ掛けた時、次の室から

「木村重成様召します」と、小姓の聲。

(十八)

内府様お召しと聞いて、重成は起ち上る、宗右は心得て、

「さらば私が御案内致しませう、内府様はお居間にお在遊ばす筈ぢや」
云つて前に立つたから、重成も後に續いて

「それは御苦勞ぢやの」

「いえ、どう致しまして、さア斯うお来て遊ばしませ」

長い廊下を通つて、内府様お居間と定められた春雨の間へ行つて見たが、どういふものかお姿が無
し、宗右は丁寧に辭儀して、

「や、内府様お在が無い、何處へお在遊ばしたか知らん」

「お身は今も居間にお在と申したてないか」

たしか左様に心得ましたが、こゝにもお在遊ばさねば、多分鶴の間にお越してござりませう、こちら
らへ御案内を致します

「どうか、それは御苦勞ぢやの」

春雨の間から鶴の間まで、餘程の隔りがあるけれど、重成は嫌な面もせぬ、宗右に案内せられて行
つて見ると、これにも亦お在がない。

「これはしたり何處にお在遊ばすか知らん」

「貴公また鶴の間にお在と申したてはないか」

「多分爾うあらうと存じましたが、お在が無うては仕方ありません、それでは松の間かも知れませぬ
御酒宴は何時お松の間にお間に極つて居ります」

「お前の云ふ事も當にはならぬ、誰かに聞いてはくれまいか」

「いえ、夫には及びませぬ、今度ばかりは大丈夫でござります、さア斯うお出てなされませ」

今度はまだ松の間へ案内した、處がこゝにも内府様の姿は見えぬ。

「宗右、こゝにもお在はないぢやないか」

「誠にはや申譯もござりませぬ、それではお草紙の間かも知りませぬ、お草紙の間ではいつもお

學問を遊ばします」

「間違ひてはあるまいの」

「間違ひはござりません、さア御案内を致しませう」

云つて又前に立つた、大體の者なら二度三度の無禮、何とか小言も云ふべきであるが、重成は氣にも止めぬ。

宗右はこの氣の長い若武者を案内して草紙の間へ行きかける、すると廊下に添ふた局の襖の間から、宗圓やその他の茶坊主やが隙見をして居て、

「やア、彼を見よ、當御城内には狐に魅された大將がある、先刻からこの廊下を五六遍も通るぞよ」

「あの眼付き、あの顔色、恰て魂が無いやうな、魂のない大將は神武以來の珍事、狐の魅ひの無理はない、笑へく、大笑ひに笑ふて遣れ」

云ふかと思ふと、彼方でも笑ふ聲、此方でも笑ふ聲、終ひには襖の間から顔を出して嘲る者さへあつたが、重成は氣にも止めず、勿論振り返つて見さうにせぬ。

この間を無事に通つて、重成は草紙の間へ來たのであつたが、原より茶坊主どもの悪謀であつたから、内府様のお越し遊ばさう筈がない、宗右は頭を掻いて、

「ほい、こゝにもお在がない、この上は御足勞を掛けるにも及ばぬ、私内府様御所在を見て参ります、どうか暫くお待ちを願います」

(十九)

重成は沈と辛抱して、

「諸々、さらば此處に待つて居る、お前氣の毒ぢやが内府様御在所を見て参れ」

「畏りました、ては御免を蒙ります」

宗右は重成を其處に待たせて、何處ともなく出て行つた、處が何時まで経つても消息をせぬ、内府様お召しといふのも、彼等の悪計から出たのであれば兎も角も、若し眞實お召しになつたのなれば、少しも早く御前へ参らねばならぬ、茶坊主共の無禮狼籍は自分で堪忍すれば事は濟めど、内府様へ不奉公になつては、忠義の道に缺くるであらうと思ふと、重成は起つても居ても氣が堪らぬ、寧ろ役人に掛つて内府様御所在を開き合さうとまで思つた處へ、宗圓がつかくど遣つて來て

「やア長州公、これにお在てござりましたか」と、事も無げに聲を掛けた、

宗圓でないか、内府様は何れにお在遊ばす」

「私今日は非番でござりますゆゑ、一向に存じませんが全躰あなたはこんな處に何をしてお在なさ



るのでござりませす
 「私は宗右の返答を待つて居る」
 重成は是でも怒らぬ、徐に口を開いて、
 「それでは宗右、私に一杯喰はせたかの」

「えい、宗右の……」
 「宗右が内府様の御所在を聞き合せて参る筈ぢや」
 「長州公、確乎遊ばせ、宗右はもう疾うに飯宅致しましたぞ」
 「これ、偽言を云ふては可かん、いかに宗右が義理を知らぬと云ふて、私に約束して置きながら、肝腎の返答をも致さず、歸宅致さう筈がな」
 「もししく、そんな言をお云ひになつては、あなたのお人躰に關はりまするぞ、高が宗右如きものに、長州公とも云はるゝ大將が一杯喰はされたと沙汰せられて御覽じろ、末代までの瑕瑾、上様へ聞こえても餘りお手柄にはなりませんぞ」

「宗右よりは狐に魅されてお在遊ばすのぢやござりませんか、申すまでは無くこゝはお草紙の間もう二三年以來、このお室へお成りになつた事はござりません」
 「さうか、是は怪しからぬ」
 「もし、この御城内には性質の善くない狐が居りますぞ、先刻から拜見致す處、どうもあなたのお眼の色が宜しくない、斯ういふ時に内府様御前へお勤め遊ばして、萬一の御疎相があつてはなりません御病氣とても御披露遊ばして、早々お歸り遊ばすが宜しからうと存じます」



「大きに爾うだ、さらば歸宅致さうかの
悪い事は申しません、少しも早く御歸宅になつて、心氣をお鎮めなされませ、御前躰は私から善く申し上げて置きます」

「さらば何分頼む」と重成は少しも逆はず「歸るゆゑ案内を頼む」

「私がお付き申して居れば、大丈夫、此方へお出てなされませ」

宗圓は案内して先に立つた、重成はまた後に従ふ。

重成とも云はるゝ者が、茶坊主に嘲弄ばれて、武士にあるまじき耻辱を受けたとの風評は、口から口へ傳へられて、城中一ぱいになつて居たから、重成が宗圓に案内せられて廊下を通る時は、この溜り、かしの詰所、人の影を見ることに、クス／＼と忍び笑ふ聲がした、けれど重成は沈と堪へて今しも玄關へ掛らうとする時、衝立の蔭から現はれて、

木村姓、一寸お待ち下さい」と、聲をかけたものがあつた。

(二十)

重成は呼ばれて思はず足を止める、衝立の蔭から現はれたのは、七武者に續いての剛の者で、眞野豊後守頼包といふ四十男であつた、重成は慇懃に辞儀して、

「誰方かと思へば眞野姓でござつたか」と一たん式台にかけた足を返して、何か御用でもござりませるか」

「よし當り用といふては無いが、兎も角まづそこにお座り下され、ちと申し上げたい事がある」と、何處までも眞面目でさも憎さうに宗圓を見返つたが「宗圓、その方に用は無い、そちらへ参れ」

宗圓は委細畏りて次へ退る、豊後守は膝を進めて、

「先刻からの御様子は具に承はつた、重成殿を御無念でござらうのう」と、同情に堪へ難さやうに云つた、重成は詞も無く首を垂れる、豊後守は語をついで、

「然し、成り難い處をよく我慢なされた、それこそ常陸介殿御息ぢや、もう拙者が貴殿であつたらば、茶坊主共をその分にはして置かね處、頼包殆ど威服致した」

「お詞に領つてお耻かしう存ずる、定めて重成を命を惜しむ卑怯者と思召されうが、命は一つ、輕々しく捨つべきには無いと存じて、沈と我慢致し申した、最も拙者に遠き謀さへ無くば、生かして置くべきものではござらねど……」と、言ひかけて涙を拂つて心中を察しを願ひまする」

いかにも深くお察し申す、老年の古兵にても、斯程の耻辱は忍び難さを、お若いには似ず沈とお忍びなされた心中、拙者只有難く存じます」

「御挨拶痛み入りました、是についても思ひ起さるゝは師匠の恩、全く佐々木六角宰相殿の御蔭でござりまする、義郷殿會て石田治部少輔の使者を切つて、染み染みと堪忍の大切な故にしをお聞かせ下された、そのお詞骨となつて胸に残り居れば、成りがたき堪忍も沈と我慢致してござるわ、豊後守その重成の謙遜つた返答を聞いて一入感に入つた體であつたが、やがて涙をばら／＼と流して、

「内府様はお任せぢや、當城の武威衰へて、太閤殿下恩顧の大小名、大方は關東將軍の下に平伏して、子孫の計をのみ圖る中に、御身の如き忠義の御家人を得たまひしは、當城の御運まだ全くと地に落ちぬ處あればぢや、申すまてはないが、此の上ともに忠勤を勵まれて、内府様補佐の大任を全うせらるゝやうに頼み存する」

「尊公始め方々の驥尾に従いて、犬馬の勞に役するのは兼ての覺悟、一つの命は内府様御馬前の外、いかなる事あつても捨てじと誓ひ居れば、取るに足らぬ茶坊主どもの不禮、心には止め居らねど、重成の心中を察しなく、頼み効もなき者と思し召さるゝ事は無きかと、只そのみが口惜しう心掛りてなりませぬ」

「その事は御心配なさるゝな、内府様とて貴殿の御忠節を御存じ無き事はあるまじ、假し御存じ遊ば

さずとも、機を見て拙者より執申すであらうわ」

「何分宜しく頼み置く、さらばこれにて」

云ひ捨て、起たんとするを、豊後守は又引き止め、

「貴殿御心を見ぬき、折入つて御談し申したき事がある、今晚にも拙者の宅へお越し下さることはな

(二十一)

豊後守は餘程重成の堪忍強い處が氣に入つたと見えて、

「弱年の身に堪忍と云ふことは中々出来難い、今日の貴殿のお仕打を見て、老境の拙者も一方ならず教訓を得た、此上ながら御入魂にも願ひたく、且は申し談じたき仔細もあるゆゑ、拙者宅へ御來遊が願はしう存する、尤もこれといふお響應は致さぬが、一献の粗酒に胸襟を開いてお談し申さう」

とさも慕はしげに云ひ出した、人間と生れて己を知らるゝ程嬉しいものはないから、重成も甚く歡んで、

「御芳志千萬辱ない、追て御挨拶に参りませう」

これを此場の別れにして、重成は自分の屋敷へ飯つたが、直に奥の床の間へ、佐々水義郷の畫像を

掛けてその前に手を突いて、

「お殿様、今日はあなたの御教訓で危い一命を助かりました、あなたの膝下へ仕へて居ります時、鎌田六郎をお手にお掛け遊ばして、私へ泌々の御教訓が無かつたら、今日はきつと宗右を切て捨て、居るに違ひありません、けれど蔭で堪忍の二字を守りました爲に、一身の無事を得たのみか眞野豊後守殿からお賞めのお詞を戴きました、是と申すもお殿様の御厚恩、仇やおろかには思ひません、此上ながら私の心をお守り下さるゝやうに願ひまする」

義郷の畫像は、重成が大阪へ来てから、名譽の畫師に寫させたのであるから、宛ら生けるやうな出来であつた、それが重成のこの詞に満足したかの如く風に動いて、今にも口を開きさうに見えた、

夫から義郷の好物であるといふので、三寶の上へ盃を載せて波々と酒をついて、

「何うか一つお召し飲み下さりませ、私もお相伴を致します」と、當人が前に居るやうに云つて、快く飲み乾した、

「是で私も氣が爽々致しました、豊後殿守御懇志もござりまするゆえ、私は只今より眞野殿へ御挨拶に行つて参りまする」

そこで丁寧な詞を残して、日も漸う暮れやうとする時、太兵衛一人を供に伴れ、眞野豊後守の屋敷

へ行つた、豊後守は大さう喜んで、

「さて、喜ぶお来て下さされた、身共は太閤殿下御恩の者であるに由つて、秀頼公御代になつても、相變らず御奉公申して居るが、見る事、聞く事頼み少い事ばかりで、實は早や御運の末と存じて居たが、貴殿の今日のお仕打を見て、急に又心強く存じた次第、貴殿ほどの氣量あらば、關東將軍の麾下についても一かどの御知行を下さるべきに、今や孤城落日の態ある當城中へかほどの名將をたまはつたのは、弓天入幡まだ全く豊臣家を見捨てにはならんと思ゆる」

重成は廣々とした座敷へ通されて、さうしてこんな嬉しい詞を聞かされたのであるから、大いに満足して、

「物の數にはあらねど、一命を君の爲に捧げて、御當家を昔の繁昌に復し奉りたき願ひ共々に力を協はせて、内府様の御身を守る事に致しませう」

云ふ處へ酒が出る、下物が出る、お酌には美はしき少年、時は七月の下旬で、庭は女郎花、桔梗の花盛り、餘興のつもりか、ずつと彼方の高臺で、妙なる琴の調べ、重成は生れてから始めて氣の伸びるやうに思つて、常よりは酒も過した、豊後守もほろりと酔つて、

重成殿、お歡び下され、御當家の御武威昔の盛りに復るやうな事がござるぞ」

重成も歎んで、

「御當家の御武威、昔のやうに復ることゝは」

「さればお聞き召され」と、豊後守は膝を前めて

「貴殿も御存じの大佛殿御開眼、鐘の銘の事に就いて、關東將軍から怪しからぬ難題も持ちこまれたが、老功の片桐且元、さまざまに辨疏する。又淀様のお手許から大藏局、二位局、正榮尼までが駿府へ参つて、前將軍へ直訴する。そして、關東のお心も少しは柔いたが、今度當城の御評議では、八月二日いよいよ開眼式を御執行になることになつた」

「おては愈々大佛殿御開眼の御儀式をお舉げになりませるか」

假令關東の故障はあらうとも、内府様の厚き思召しを以て、御建立あらせられた大佛殿このまゝに致し置かれては、御當家の武威に關はり、第一は太閤殿下御威徳を傷くるやうにも當るに由り、關東への辨疏は追ての事、兎も角も開眼式御執行といふ事になつて、西國の大小名へ御通知なされた處、さすがは殿下御恩徳を思ふ輩、また澤山にあると見えて、加藤福島その他の諸家より、金銀米穀の御寄附もあつた、奉行は例の市正、當日は近國遠國より見物の群集定めて多くあらうと申すので、大佛

の近邊は芝居、見せ物、商賣人の小屋掛け、それはそれは大した賑ひ、都の老人どもは重ねて太閤様、御在世の時に遇ふやうなと云つて涙を流して居るさうな」と、豊後守はさも歎ばしさに、大盃を快く飲み乾した。

重成は沈と考えて何とも云はぬ。

「斯様な事は千歳一遇、亦と云つてもあるまじく存するゆえ、當日は家内の者を召し伴れて、見物に参らうと存じ居る、大佛開眼の爲、諸大名の心再び御當家に歸服致すやうの事あれば、此上もなき慶事、草葉の蔭の殿下もさぞ歎びてあらうと思ふ」

「大佛開眼式、八月三日愈々御執行と定まりましたか」

「誠に御當家再興の基、斯様な歎ばしい事はござらん、當日は内府様、淀様も御上洛親しく御盛況を御覧になるであらう、貴殿も是非お上りなされ、席は拙者方にて設け置く」

「御厚志は辱ふ存じまする、萬々一上洛致すやうの事あれば、きつと邪魔に参るでござらう」

「是非お出て下され、當日は妻、娘をも同伴致せば、序がながらお知己に爲つて戴く」と、豊後守は上機嫌。

夫から後は八月三日大佛殿開眼式の話で持切て、重成は歸途に就いた、關の夜てはあるが、月の光

り清く秋風天に滿ちて袖吹く風も物淋しい、後に従つた太兵衛は聲をかけて、

「旦那様、あなたお氣附なつすたか」

「突然問はれて重成は驚いて」

「唐突に何を申す」

「いえ、お格子窓の中にお氣が附きなされましたか」

「格子窓の中、いや少しも氣が附かん」

「眞野様の姫君と見えて、お年の頃は十六七の、それはく美しいお方、格子窓の中から旦那様のお姿を羨ましさうに見てお在てなされました」

「馬鹿を申すな、左様な事があるものか」

「旦那、それは眞個でござります、御容貌と云ひ、お年頃、同じものならあのやうなお方を」と云ひかけて「明日もどうやらお天氣のやうでござりまするな」

(二十三)

慶長十九年八月三日、今日、京都大佛殿に開眼式供養の式あると云ふので、近畿七道から集まつた見物の群集は實に一通りのこととなかつた、雲霞の如く押せるとは全くこのやうな景況をさして云ふ

のだらうと、事に當る人は驚いた、總奉行は片桐市正、秀頼公名代は織田有樂、それに従つて萬事の指圖を司る役人は、五六人もあつたであらう、京都中の旅館といふ旅館は、大佛供養の見物で埋められ、少し後れて來た者は大佛邊の樹々の蔭で野宿をするものが澤山あつた。

やがて當日となつた、定めの特限は來た、門主は伽陀を唱へる、千僧はそれに従つて道を作る、伶人の奏する樂の音は澄み渡り、佛前に焼く香の煙は絶えず燃えて、その嚴な事は筆にも詞にも盡されぬ、宛ら稻麻竹葦のやうに、四方を取り巻いて居た見物人は耳にこの天女に奏する如き樂を聴き、目にこの生菩薩の有難き行爲を見て、均しく無量大功德に浴せんとし、掌を合せて拜禮する時、忽ち汗馬に鞭を當て、群集の中へ割つて入つた侍があつた、人々は驚いて何事ならんと片唾を飲んで見て居ると

「關東將軍の御沙汰なるぞ、そこ除け、そこ除け」との聲は馬の前後に従つて居た供人の口より聞こえた、

「やア意地の悪い關東から御沙汰と云ふぞ、何うせまた難題を云ひかけて秀頼様を苦しめるのであらうぞ」との怨聲は、多くの見物人の口々に上された。

拙者は京都所司代、板倉周防守名代でござるが、大佛の鐘の銘に不祥の文字あり、由りて關東將軍

の御立腹一方ならず、供養延引すべき旨、只今早打を以て駿府より仰せ越された、直に群集を解散して供養を停止なさるゝが宜からう」と嚴達した。

片桐織田の二奉行は云ふに又ばず、豊臣家一統の驚き警ふるに物も無かつた、然し且元は老功の武士、暫く考へて後、

「關東將軍家よりの嚴命とあれば、致し方も無き事なれど、今日開眼供養と申すに由て、諸般の準備も整ひ、導師たる門主門跡のお成りもあつて、將に御儀式を擧げんとする處、殊には遠近より集まつた僧侶貴賤の者、洛中、洛外の商賈人共、只今中止となつては、幾許の損耗、幾許の失望を致すかも計り難い、何卒夫等の事情をお察しありて、兎も角も今日の儀式御許可に相成るやうお執成が願ひたい萬々一それ等の事より關東將軍のお譴りを蒙る事あらば、不肖ながら片桐且元、腹かつ切つて申譯仕る」と云つて除けた。

最も豊臣家掉尾の盛事ともいふべきこの供養式を、關東將軍の故障に由て停止したとありては、今まで僅ながらも太閤の勢力を維持して來た大坂方の威信は、忽ち地に落つる事となる、高き梢に咲き残つた櫻の花が、嵐に吹き散る事になる、供養停止は取りも直さず豊臣家屏息を意味するのであるから、且元が死を以て儀式を繼續せんと主張したのも無理のない所であらう。

然し所司代側の人は頑として聞き入れぬ。

「お詞御尤もてはあるが、貴殿の切腹は貴殿御一人の責を負ふに止まる。關東將軍の御旨に背いて供養式をさし許すやうの事あつては、京都所司代の役目が勤まらぬ、強ひて御承引無いに於ては、直に人数をさし向け、弓矢の力を以てお止め申す」

開眼供養に戦争の用意は無い、兵力をさし向けられては、此上の耻を見ねばならぬ、且元と有樂とは互にホツと息をした。

(二十五)

所司代からは更に嚴重な談判をする、もう斯うなつては致し方が無いので、且元は有樂とも相談の上、血を吐くやうな思ひで、供養延引の旨を張り出した、多くの見物人はこれを見てまた驚いた、中には天皇の御惱であらうと云ふものもあり、内裏今炎上の最中だと云ふものもあつて、その混雑は警ふるに物も無かつた、兎も角もこれだけに用意せられた開眼供養が、急に中止せられたのは、何か深い理があるに相違無いといふので我れ前に歸途につき、大佛の周圍に花と飾られた小屋も棧敷も瞬く間に取り拂はれて、今までの繁華は一場の夢となり終る。

此時所司代からはまた使者が駆け付けた、手の中の珠を奪られたやうに茫然として坐つて居た且元

は、もしや供養をお許しになつたのではあるまいかと思つて、直ちに出迎へ來意を尋ねた、所がそんな嬉しい口上では無くて

「今日の供養を御停止になつたのは、所司代に於ても殊の外遺憾に思召さる、その理は、鐘の銘に東に素月を迎へ、西に斜陽を送るとある、これは關東を月に比べて陰となし、大阪を日になぞらへて陽としたるばかりでない、その次に國家安康の四字がある、これは勿躰なくも關東將軍の御諱を二つに截いて、國安かれと祈り、暗に關東を呪咀したものに相違ない、これに由つて將軍家に於かせられては、殊の外御立腹、鐘銘の筆者清韓長老を、疾く嚴罰に處せよとの御仰せ越してござるぞ」と、供養停止の理を傳へたのであつた。

且元は威儀を正して

「存外の御口上、市正承はつて口惜しう存ずる、この鐘の銘は拙者改めて申すまでもなく、凡て陽塘の韻を用ひたがる故、斜陽安康などの文字を入れたものと思はる、もしその文字を以て不祥なりとせられなば君臣豊樂とある、この四文字は明かに豊臣氏の姓を顛倒したものはござらぬか、斯様な見易い道理を見ずして、恐れながら内府公、高臺院様（太閤北の政所）の御遺志を繼がせられ、漸やく落成の歡びを見んとするこの開眼供養の式を、御停止遊ばされた關東の御主意、市正甚だ以て

その意を得ませぬ、何卒防州殿へ御申達あり、今日の供養首尾克く相濟むやう、お執成を頼み存ずるどうかして無事に供養を終らうといふ心があるから、且元は詞を卑うして頼み聞こえたけれど、所司代の使者は聞き入れぬ。

「御尤もではござるが、所司代は只關東の御命令をお傳へ申すに止まる、内府様申譯の次第もあれば駿府へ直々御訴あるが至當であらうかと存ずる、之れに由つて我等何事もお取合へ致し難ぬる

使者の口上はこれで盡きて、忽ち座を立つて了つた、大阪方一縷の望みもこれにて絶え、さしも壯嚴に次第せられた大佛供養も空しく中止の止むを得ざるに至つた、且元は悄然として「ア、是非も無き事、最早や云ふべき詞もござらぬ、我等は今より大阪へ歸りて、内府様へ有様の事を申し上げる、織田殿は後々の取方付、萬事お任せ置くと織田有樂齋に挨拶して直に大阪へ出發した。

この供養は實に前代未聞の盛事であるといふので、大阪方の家人も多く見物に入り込んで居たが關東の命令に由つて、供養中止の事に立ち至つたと聞き、すはこそ主家の一大事出来したれ、後れて大事を餘所にするなど云ひ合ひ、且元と前後して、悉く大阪に馳せ歸つたが、彼の眞野豊後守は女房娘を伴れて來て居るので、思ふやうにもならず、人々に後れて宛ら大風の後の如き大佛の前を通らうとする時、微行と見えて供をもつれず、幾度となく大佛を見返りては無念の涙を拭ひ居れる木村長

門守の姿を見た、豊後守は妻と娘とを見返りて

「あれに長門守が居る、この場の状さぞ、無念に思ふであらうの」

(二十六)

さア斯うなると豊臣家の威信は地に墜ちる、昨日までは一縷の望みを、大阪城に繋いで居た者も、落膽の極、關東へ内援しやうといふ者まで出来て来た、秀頼公を始め、大阪城中の諸人は、何れも關東の處置に不平を抱いて、家康父子を恨み、憤らぬものは無かつた、

此の儘に捨て置いては、兩家の間が何うなり行くかも知れぬ、是れは少しも早く真面目に辨疏して兩家の和睦を計らねばならぬと云ふので、片桐市正は鐘銘の筆者たる清韓長老を引き具して、八月五日阪地出發同じ十三日鞠子の徳願寺へ着いたから、その趣を本多佐渡守へ届け出た、全躰ならば直々に家康へ對面を願ふべきであるが、折が折であるから遠慮したのであつたらしい。

鐘銘問題と長門守とは、直接に何の關係も無いけれど、大阪冬陣は全く此の事を孕んで居るし、市正と重成とは、格別の惡意でもあり、旁々この次第を明かにして置かぬと、後々の事情が分らぬかも知れぬので要を摘んで、鐘銘問題から大阪關東衝突の事を記すこととした、看る人幸ひに作者の微心を察したまへ。

處が翌日大御所の命とありて、駿河安西の邸に寄留すべき旨を命ぜられ、翌日は本多佐渡守、安藤對馬守、成瀬隼人正など大御所の腹心が尋ねて来たけれど、鐘銘の事に就いては一言も云はぬ、市正大に焦思て、
「申し上げるも思かなれど、彼の鐘の銘の一條より内府様御母子殊の外の御心痛で、日夜寢食をも安んじたまはず、願はくば三方のお力で大御所さまの御前宜しくお執成を願ひ存ずる」と、云ひ出した。

處が佐渡守は冷淡なもので

「いや、今日は貴殿遠路の勞れをお慰め申す爲めに參つたので、公用を帯んで来たのでは無いから、その御返答は致しかねる」と、云ひ捨て、歸つて行つた、市正は腹が立つたが致し方無い。
すると八月十七日、本多佐渡守を以て明日登城致せとの口上があつた、市正は今はその事と思つて、定め時刻に出頭すると、家康も亦鐘銘の事は餘り云はないで、秀頼と淀君とが、今日まで自分に対する仕向の好くないことを色々云ひ立て秀頼に訊問せよと斯う云つた、徳川家でこんな言を云ふなら、此方にも云ひ分があると思ふから、其の場では何んとも云はず、佐渡守に對つて甚だ失禮ではあるが、明日拙者の宿所まで出てが願ひたい、さすれば膝組で萬事の御相談を致すてござらう、と云

ひ置いて歸つたが、翌日も來ず、翌々日も來ず、漸と三日目に遣つて來た、其處で市正から徳川家の仕向の好くないことを申し立て、今度は大御所様の御返答が承はりたいと切り出した、處が例の狸爺、市正の詞を空吹く風に聞き流して、

「雙方からの申し立ては、お互に聞捨てに致すがよいではないか」、と世にも横着な挨拶をした、處へ市正の爲めに、又悪運が降つて來た、それは淀君からの使者として、新に派遣せられた大藏局、二位局、正榮尼の三人がその月二十八日駿府へ到着したのであつた、處が市正には辛く當つた家康が三人の女には白い齒を見せて、

「遠路の處善くぞ來てくれし、淀殿にも爾う申せ、物には表裏がある、今度の事は世上の物議を慮つたまで、乃公にちつとも異存は無い、家康も七十に手の届く齡をして、秀頼母子に隔心を存するやうな、事はないわ」と、笑ひながら云ひ出した。

(二十七)

三人の婦女はころりと家康の口に載せられた、大阪を出る時は、いかなる難題を云ひ出されるかと互ひに恐れを抱いて居たにも拘らず、打解けた詞を聞いたのであるから、この喜悅は譬ふるに物も無い、案じるより産むが易いとは此事であるといふので、早速大阪へ飛脚を立てる、如才ない家康は三

人を厚く待遇して、所々の見物をさせた後、江戸將軍へも拜謁するがよいといふので、江戸へ出發させ、その留守中に且元へは又鬼の面と被つて見せた。

それは且元を呼び寄せて、家康の口から、大阪關東の間を和けて、兩家長く親密に交はらうとするには、第一秀頼を大阪に置くのは宜しくない、大阪は日本の要害咽喉の地であるから、秀頼が彼に居ては天下の浮説止むことなく、遂には兵亂の基となるべきに付き、暫く和州郡山へ所替するか、もしそれが不承知とあれば、秀頼今は將軍家の縁者(秀頼の籠中は家康の孫千姫といふのである)であるから、何の憚る所もない、宜しく諸侯參勤交替の例に倣つて、毎年關東へ下つて參るか、第三は淀君を江戸の住居にするか、この三箇條の中、一箇條を實行するの外は無い、如何様とも返答せよ、と直ぐに嚴達した。

處が三箇條とも豊臣家に取つては由々しき大事件であるから、且元は容易に返答する事が出来ぬ、篤と考えて御挨拶致しませうと云ふので座を退らうとすると、家康は引き止めて、

「只今申した言、世上静謐の基であるから、汝果して秀頼に忠勤を盡さんとなれば、まづその中の一箇條を承諾して、その上で大阪へ歸るやうに」と云ひ足した、こゝで且元が異議を云ひ立つれば、忽ち事の破れとなる、さればとて主家の大事を輕々しく決すべきではないから、一方ならず心を苦しめ

だが、天下の騒亂にはかへられぬ、由て三箇條の中、一番行はれ易い淀君下向の事を承諾し、兎も角もこの難場を切り抜けんと思つたから、遂に意を決して、

「御説讀んで承はる、私の思ふ所では淀様御下向の事、さして大阪の御耻辱ともなるまじ、大閤殿下の御武徳を以てしても、御生母を三州岡崎に人質となさせたる例もあれば、秀頼様とて御異存は在すまじ、由て私の計ひとして此事を承知し置きます」と申して上げた家康はホク／＼笑つて

「それで私も安堵、然らば天下は御無事であらうぞ」と満足する。

且元は側にあつた本多佐渡守に向つて、

「もし愈よ淀様御下向と定まらば、江戸品川にて四五町の屋敷地を下さる事が出来ませうか」と問ひ掛けた、すると家康がそれを引き取つて、

「それは勿論ぢや、然し淀殿は江戸へ下向致さうかの」

「其儀は心安く思し召せ、市正命をかけて御下向の事お計ひまする」

「さうなれば重畳、そこでお身へ申し達する事がある、お身は秀頼柱石の臣、本多佐渡守は乃公の股肱、兩家和睦致す上は、柱石の臣も又水魚の交りがなくてはならぬ。由てお身の嫡子出雲守の嫁として、佐渡の娘を娶る事に致せ」

且元は是ばかりは固く拒んだ、

「仰せてはござりますれど、私は大阪の御家人でござりまする、忤へ嫁取りの儀は一應内府様にお伺ひ申し上げませうでは」

「いや、苦しうない、秀頼何んとか申したらば、家康の嚴命だと申し傳へし」
もう仕方が無い、且元は「はッ」とばかりお受をした。

(二十八)

且元はそれにて漸く暇が出て、九月十一日辰の刻に駿府を立つた、その頃江戸へ行つた三人の婦女も歸る頃であるから、待ち合せて同道すれば好かつたが、一つは歸りを急ぐのと、一つは三女を餘り重く見て居なかつたのとて、何んの云ひ置さもせず、打ち合せもなく歸途に就いた、これが大阪方の爲めにどれほど不幸になつたであらう、邪推して云へば、或はこれも家康の策略であつたかも知れぬ。且元の出發した同じ日の申の刻に、三女は江戸から駿府へ歸つた、すると直に家康から阿茶の局を遣はした。

「秀頼と淀殿とに傳ふべき口上は、善く市正に申し含めて、今朝大阪へ立たせたから、お前方には何も託ける言葉が無い、心任せに大阪へ歸つて好からう」と、斯う云はせた。

且元が三女を置去にして大阪へ歸らうとは思はぬから三女とも驚いた、中にも利かぬ氣の正榮尼は口を歪めて、

「片桐殿が内府様のお使であれば、私ども淀様のお使ひでござりまする、一日や二日私どもの爲にお待ち下されても好いてはござりませぬか」と怨じかける、

それを阿茶局は慰めて、

「その様に仰せ遊ばすものではござりませぬ、市正殿があなた方をお待ち合せ遊ばさんで、大阪へお歸りになりましたのは、いかにも情無のお仕打でござりまする、然し遠からぬ中、重ねて皆様とお目もうじ致す時が参らうと存じますゆゑ、それまで何んにも被仰らぬが宜しくはござりませぬか」

遠からぬ中、重ねて阿茶局に對面する時が来やうとは、三女の腑に落ちぬ詞であつた。

例の正榮尼は眉を擧めて、
「大阪と御當家とは大分の道程、此たびのやうな不祥なお使ひが、重ねて私共の身に仰せ付けられうとは思はれませぬ、それに遠からぬ中、再びお目に掛る時が来やうとは、全躰何の事てござります」と、問ひ掛けた。

阿茶局は白い目を剝いて、

「てはあなた、何事も御存じないと見えまする」

「は、私は何事も存じませぬ、遠からぬ中、重ねてお目に掛る時が来やうといふその理をお聞かせ下りませ」

「さや〜」と阿茶局は頭を掉つて「此事は申しませぬ」

「それは何故でござりまするか、もし他人に言ふて悪い事なら、八幡口外は致しませぬ、私共淀様お使ひとして参りながら、市正殿に先越されては何んのお土産もなく歸りまするは、誠に残念でなりませぬ」と、正榮尼はぬからず「けしてあなたに御迷惑は掛けませぬ」

「さほどまでに仰せ遊ばすこと、申し上げは致しまするが、御口外遊ばしてはならぬ、實は御兩家御和睦の證據として、淀様江戸へ御下向に相成りまするぞ」

「えッ、淀様が」と、正榮尼はびつくりする、大藏局は笑つて、

「おほ〜、何事かと思へば理もない、何んのおア淀様が」

「いえ、間違ひてはござりませぬ、市正殿きつとお引き受け大御所より品川表へお屋敷地までお下げになりました」

「え、それでは市正殿が引き受けて」

「まだそればかりではござりませぬ、市正嫡子出雲守殿と、本多佐渡守御息女と御婚禮の御約束まで調へてお歸りになりました、何んと重ね〜お芽出度いことではござりませぬか」

(二十九)

正榮尼は目を睨つて、

「まあ怪しからぬ、市正殿ともあらう方が、淀様を人質のお約束など、……是は斯うしては居られませぬ、もし二位さま、大藏様、少しも早う大阪へ歸つて、此事淀様へ申し上げやうではござりませぬか」と、こゝまで勢ひよく云つたが、阿茶局の前で、喋々しては云はれぬことゝ氣が付いたか、忽ち悄れて口を噤んだ、二位局も大藏局も互に顔を見合せるのみで別に意見は吐かなだ、阿茶局は聞き答めるやうに、

「もし、お心違ひを遊ばしてはなりませぬ、淀様の御下向は御兩家和睦の根本をお作り遊ばすので、けつして人質などいふ忌はしい御相談ではござりませぬぞ」

眞に是はさうありさうな事、と大藏局は執成顔に云つて「もし爾うなれば折々お目に掛ります」

「さア、私も夫を樂しみにして居ります、關東とて鬼の住む處ではなし、皆様からお勧め遊ばしたら、淀様もさつと御下向になりませう、大御所様も老る年、淀様に逢ふて昔語りがしたいと被仰つて

どの位お待ち遊ばすかも知れませぬ」

阿茶局の詞はたゞこれだけであつたけれど、その底には何んとなく忌はしい意が籠つて居るやうに三女の耳へは響いた、大御所様が淀君を待つて居ると云ふのは、たゞ昔語りがしたいばかりでなく、淀君を納れて御臺所にもしやうとせらるゝては無いかとの疑が起つたのであつた、それでは三女は面白からず思つて、大御所から隨意に歸れとのお許しも出て居るからといふので、十二日の朝早く駿府を出發した、それだけ出来るだけ道を急いで、遠州の濱松で且元に追ひ付いた、然し阿茶局から聞いた事は少しも云はず、駿府でいろ〜厚い欺待になつた事を悦び物語つた、且元は頭を掉つて、

「さや〜油断はならぬ、大御所様の底意中々我々共の覗ひ知るべき事ではない、現に我等に向はせられて、三箇條の難題を仰せなされた」と、例の一條を詳しく物語つた。

正榮尼は何處までもとぼけて、

「その三箇條の中、あなた何れを御承諾なりました」と問ひ掛けた、且元は斯る大事を婦人に打ち開け語るのは、害があつて益の無い事と思つたから、故意と事實を押し秘して、

「お尋ねてはあるが、何れも國家の大事でござるに由つて、輕々しく口外することは出来ませぬ、なれど内府様に國替へ又は參勤交替の御耻辱をお見せ申すよりは、淀様御下向の事最も行はれ易いかと

存ずる、各々大阪へお歸りの後は、國家の爲め淀様へお執成を願ひまする」
且元のこの詞が又三女の胸へ障つた、且元が淀君下向の事を承諾しながら、淀様御名代とも言ふべき我々にその事を押し隠すは畢竟且元が本多佐渡守と婚儀を結んで、關東の爲めにお爲めを圖るからであらうと邪推したから、強ひてその事を問はず、翌日濱松を出發して、江州土山に着いた時、且元は三女に別れを告げて、大佛供養の跡方付をすべく京都へ赴き、三女は直に大阪へ歸つた、これが大阪に取つては、此上も無い不利益であつた。

(三十)

もしも三女が且元と共に歸阪して、駿府の事情を殘る方なく秀頼に復命したならば、或は自分の思ふ通りに淀君を動かすことが出来たかも知れぬ、且元ともあらうものが、それ位の事に心附かずさしもの大事を等閑にして、大阪へは足踏もせず、土山から京都へ行つて、その不在中に三女をして毒舌を逞しうせしめたは、且元の不幸の上もなきのみならず、豊臣家を悲しむべき運命に陥れたものであつた、且元の失策は即ち大阪方の不幸、天が、豊臣家をお滅しになる時刻到來したのであらう。
大藏局、二位局正榮尼の三女は、土山で且元に別れて、九月十九日大阪城へ着いたから取るものも取り敢ず、淀君へ拜調を願ひ出だ、折から淀君は暮れ行く秋の物淋しきに、御寵愛の大野修理太夫を

お側へ召されて、お盃の献酬などをして居たが、自分の使者として駿府へ遣はした、三女の歸つたことを聞いて、兎も角も是へと御説であつた、修理太夫は如才無く、
「私はお席を退りませうか」と、お伺ひ申したが、淀君はお許しにならぬ、
「いえ、迷惑ではあらうが、お前も共々駿府の様子をお聞き申して呉れやいの、駿府の御返答次第に由つて、又相談を致さねばならぬ」
それにて修理太夫は座に落ち着いた、さうして淀君の旨を受けて執次の女中へ、
「大藏局を始め二人の女中へ、淀様御對面遊ばさうとある、早々これへ通して宜からう」と吩咐た。
「執次の女中が引き退ると間もなく、三人の女中は旅装ひのまゝ遣つて來た、淀君は御機嫌克う、
「あゝ、三人とも大儀であつた、まづ是へ來て駿府の様子を物語りやいの」と、側近う座を與へられた、三女は時候の挨拶を申し上げた上、駿府にては、大御所の厚き待遇を受け、江戸將軍家にては御臺所の御最負に預つて、名所古蹟を殘る限なく見物した事から説き及ぼし、片桐且元の事に話し至つた時、三女とも申し合せたやうに均しく口を濁らせた。
「さうして市正は何う致したの」と、淀君は問ひ掛ける、正榮尼は例の粘り氣のある口で、駿府以來快からず思つて居た不平を遠くから説きかける、

「さればお聞き遊ばしませ、武士の数は多けれど、片桐殿こそ世にも情なく義を知らぬ者に候へ、駿府の御用がいかにか終りましたかそれは存じませぬ、土山より入浴、大佛供養の御用済ましたる上にて在さねど、怪しからぬは大御所へのお約束」と、云ひかけて目を圓うした、

修理太夫は聞き答めて、

「片桐殿大御所へのお約束とは、さて如何な事、正榮どのお聞き及びてござるかの」

正榮尼は他の二女と顔を見合せつゝ、

「詳しう阿茶局から承はつて、殊の外心痛いたし居りまする」

「さらばその事を申して見よ」と、淀君は不興の躰。

「申し上げるも無念の事、片桐殿何んの思ふ所在したるか、淀様を關東將軍のお膝下へ御下向と申すことに」

「え」と、淀君は顔の色をかへて「私を江戸へ人質にといふか」

「人質と申すには在すまじけれど、人質ならば武門にはある習ひ、堪へ難き御耻辱と申すまてはあはさねど、市正殿の御内約はまだそれよりも忌はしい事てござりまする」

「人質よりも忌はしい事とは……」

「勿躰なくも淀様を大御所様の御臺所に遊ばさんとの御内約と申すてござりまする」

「え」と、淀君は再び驚いて、我れと我耳を掩ふたのであつた。

(三十一)

流石の修理太夫も容易には信ぜず、

「何者が左様の事を申したるかは知らねど、當將軍の御臺所と、淀様とは御同胞の御間、市正いかに愚なりとも人倫の道を辨へぬ事はあるまじ、それに大御所臺所に淀様をさし上げるなど、以ての外口上、よもや左様な内約は結ぶまい、これは何かの聞き違ひにては」と、云ひかゝるを正榮尼は打ち消して、

「いえ、間違ひ聞き違ひではござりませぬ、私がありませぬ事を申し上げて、皆様に偽り云ふやうな者か無いか、天道様が御存じ、大藏様も二位様も活きた證據てござりまする」

「それでは且元、大御所へ内約して、淀様を御臺所に」

「さし上げやう下心、最も是は秘中の秘とか申すことで、日頃親切な阿茶局が内々知らせてくれました」

淀君の顔の色は颯と變つた、もう此處に修理太夫が居なかつたら、帳臺深く泣き入つたかも知れぬ

大藏局は正榮尼の詞を確めるやうに、

「只今正榮どの御申しの事は、私共同席にて聞き、決して偽りはござりませぬ、是れ皆且元どの賢ぶりて、大御所様へ献策なされた故との事、大きい聲では申されませぬ、且元どのにお氣をお許しなされませぬ」

二位局も亦側から口を添へて、

「そればかりではござりませぬ、淀様御下向の件、且元どの御承諾にてお引取りになりし證據は、江戸品川でお邸地までも下されました」

「え、私の爲に、もう屋敷地までも」

淀君は悲しさに面を掩ふた、正榮尼は此處ぞと云ふ態、

「是れと申すも且元どの、子息出雲守殿嫁に、本多佐渡守の息女を迎ふる事に取極め、將軍家へ御奉公の始め、淀様へ御難題を申し上げる心と見えまする」

「存外の珍事、さらば且元、本多佐渡守と縁者になつて、關東へ御奉公の心ありといふか、犬畜生にも劣りたる奴、武士の風上にも置かれぬ、よし／＼その分ならば此方にも思案がある」と、修理太夫は恨めし氣に天の一方を睨み附けた。

淀君は口惜しさ、腹立たしさ、飼犬に手を噛まれたとの憤懣頂上に達して、さめ／＼と泣き出した、修理太夫は此の氣色を見て取りて、

「大藏どの、二位どの、正榮尼は云ふまでもなし、老躰と云ひ遠路の處お使ひ御苦勞至極に存する、各々の骨折空しからず、且元の密計、關東將軍のお心も略知れて、御當家此の後の御思案御決定の序ともなる、恩賞は追つての御沙汰、まづ二三日は疲れを休め、改めて御出仕なさるが宜しからう」と、女の氣を取る事に妙を得たる口上、それにて三人満足して、丁寧に暇乞ひ申し上げ、各々屋敷へ引き取つた。

關東下向といふだけならば、淀君のお心も多少動いたかも知れぬ、けれど七十に餘る老將軍の枕の塵を拂はねばならぬと聞いては、舌を噛んで死ぬるとも行く氣にならぬは、無理の無い處、三人の挨拶を善くも聞かず、袖を掩ふて潜々と泣いて居るのを、修理太夫はさまざまに慰めて、兎も角も臥床へ入れ参らせたが、その日修理太夫の口より秀頼へ三人の女から聞いた事を残る方なく言上した、秀頼は聞くと凄しく髪を逆立てた、且元の失策過失不忠不義は云ふまでもない、七十に餘る好い年をして秀頼の生の母を御臺所にせんなどは、前將軍ともあらう者の爲さるべき事では、これは此の分てさし置けぬ、淀様のお目にかゝつて、篤と私の存じ寄りも申し上げる、といふので翌日秀頼公は淀君

をその居間に訪れた、修理太夫同席たるは云ふまでも無い。

(三十二)

淀君の居間では秀頼の外に修理太夫も参り合ひて、且元處分に關する秘密の會合が開かれた、淀君は口惜し涙をばら／＼と流して、

「いかに時世とは云ひながら、生れて斯程の辱しめを受けた事は無きぞ、昨日大藏局の歸りて申すには、大御所私を後妻になされうとて、且元に御内意を下されたといふ、私は世に亡き殿下の妾とこそなつたれ、氏を云へば織田右府公の姪淺井長政の女、今はあなたの生の母では無いか、關東下向の事さへ無念至極の至りなるに、大御所の枕の伽をせよとあるは、只私ばかりをお辱しめなさるてない、世に亡き殿下の御靈魂に對し、且は當城の威信に對し、此上も無き耻辱をお與へなさるのぢや」と、こゝまで云ひ續けて口を噤んだ、それは云ふべき詞の絶えたのでは無い、感極つて云ふ事が出来ぬのである。

「御心中いかにもお察し申します、關東將軍のお詞は是非もなし、太閤殿下御厚恩を蒙つた身でありながら、斯る御耻辱堪へ忍びて淀様御下向の内約を取り結んで歸つた且元の罪科、是は免るゝ道もあるまいかと心得ます」と、修理太夫は淀君の心を迎へ顔に云つた、秀頼は無言。

「それとも内府様思し召して天下の爲めにはかへられぬ、強つて私を關東へ犠牲にさし上げやうとの事なれば、私は是非なくお心に従ひます、實は私の一身に關はりたる小事なれど、實は豊臣家存亡の大事、善く御思案をなさらねばなりませぬぞ」と、淀君は涙聲になつて修理太夫に膝を向け「斯程申しても御返事の無いは、内府様思し召しも私を關東へお遣はしの心と見ゆる」

「左様に内府様をお恨み遊ばしてはなりませぬ、日頃より御孝心厚き内府様、何とて様(様とは淀君をさして云ふ事、今少し尊みては様々と續けて云ふ)を關東の手へお渡し遊ばしませうぞ、もし上様内府様、御母儀には一方ならずあなた様をお恨みてござりまするぞ、早く御安心の参るやうに優しいお詞をお掛け遊ばしませ、假しや天下の爲とは申せ、不義不孝の御名をお取り遊ばしては末代まで家の瑕瑾でござりまするぞ」

「修理太夫、もう何事も云やるな、内府様のお心は私を賣つて、お身の安さをお買ひ遊ばすお覺悟と思はるゝ」と、云ひかけて秀頼の顔を覗き込んで「斯う頼みなき世に、生き永らへて何とかせん、今さら關東へ身を賣られて、生恥を曝らさんよりは、死んで殿下の御側へ参るが望み、修理太夫介錯頼み入る」と、懐劔に手を掛けんとする、修理太夫は驚き、

「お急ぎ遊ばす時ではござりませぬ、オアお待ち遊ばして……」

「いえ、内府様お心は善く知れてある、一思ひに死なせて呉れやいの」

「勿體ない、母上何事を云ひ遊ばします」と秀頼は頭を擡げる、淀君は聲を慄はせて

「でも私の申すことに御返答が無いではないか」

「御返答の後れたるは、心に深く思案する事のあればにて候ひき、秀頼不肖ながら母上を賣り奉り

て、一身の生を偷む心はござりませぬ」

「さらば御母儀を關東の手へお渡しはござりませぬか」

「弓折れ矢盡き秀頼生害の後は知らず、一寸にても息の通ふ内は、母上を畜生の香餌にはおさせ申さ

ぬぞ」

「あゝ、それでこそ」と、修理太夫は膝を拍ちて「然し淀様御下向候はずは、關東將軍も御納

得は遊ばすまじ」

「兎も角もまづ且元を呼び出して、速かに實否を問ひ糺し、返答の次第に由りては……秀頼に思ふ

仔細もあるわ」

「その御思案と申すは、もしや且元を……」

「うむ」と秀頼は頷いて「只一刀に切つて捨つる」

「流石は内府様」と、修理太夫は故意とらしう手を舉げて「その御勇氣ありてこそ太閤殿下御偉業を
も繼ぎたまふべけれ、然し且元御成敗の事關東へ聞こえては、將軍家の思し召し、いかやうのもの
でござりませうな」

「その時は戦事ぢや、父上の遺させたまひし千生瓢の馬印、今も光りは滅せぬぞ」

(三十三)

淀君のお居間にこんな相談が熟して居やうとは知らず、且元は京都大佛殿の後始末をして、大藏局
等一行に後るゝこと三日、九月二十六日大阪へ立ち歸る、由て速かに登城せんとする處へ、木村重成
は微行の體にて尋ねて來た、豫て懸意にする間であるから、直に通して對面すると、重成は聲へをひ
そめて、

「さて是非もなき世の有様、貴殿今日の御登城、至極危いやうに心得る、暫くは御病氣とも御披露あ
りて、城中の模様お取り調べになるが好くはありまいかと存ずる」と、云ふ面に真情が溢れて見えた
且元は何の氣も付かず、

「不思議なる御口上、それは何故でござるの」と問ひ掛ける、重成は云ひ難さうに口を開いて、

「實は且元殿貴殿お身の上について容易ならぬ噂がある、今日御歸阪と申すに由つて、委細は御存じ



もあるまいが、御當家の御武運も今は是までと頼み
少なう見えまする」

且元の眉根はびりりと動いた、重成は語をつ
つて、

「日月いかに明かなりとも、雲霧これを掩ふ時は光
りなきと同様、内府様御母子御心の光りは千里に輝
き、太閤殿下の御遺業後々の世の珠とも見ゆれど淀
様御側には大野修理太夫と云ふ黒雲があつてお心の

光りを遮り止めて居る、されば貴所の誠忠、天日と光りを争へども、その黒雲の爲に遮られて御母子
のお心は少しも照らさぬ」

「なれど」と、且元は押し止めて「精神の到る處は金鐵も亦徹る、修理太夫いかに龍に誇りて、上様
のお心を惑はすとも、在下の誠忠は神々こそ善く御存じもおはせ、この心、この誠を上様御前に披き
て、御當家千年の基を堅うせんとするに、何んの憚る所がござらう、貴殿殿懇情は有難く受けるが、
在下は在下の思ふ所を遣り通す

「いや、お詞ではあれど、今日の御登城、重成強てお止め申しますぞ」

「これは又何故でござるな」

「御不審は御有理、斯様なことを申し上げるは拙者志にてはあらねど
打捨て置いては貴殿御一身の安危にも關はり、御當家

の土臺に搖ぎの出づる事と存じ、秘す所な
く言上するが、御油断なされては相成らぬ、
修理太夫献策、淀様御同意、内府様も御承
知ありて、貴殿御登城の折を窺ひ、只一刀に刺し殺して……」

「え、在下を……」

「亡き物に爲さらう御計略、無念ながら淀様帳中に於て御決定相成り、誰人にも内々七
隊長すら存じ無き事を、拙者と織田常真どのとへ御内談ありて、兎も角も善きに計へと
の御沙汰でござつた」

且元の鬢髪は風も無きに揺いた、重成は又語を續ける

「拙者は新參、心には驚さしが其のまゝさし控へ居たる處、常真どの以ての外に驚かせ



て、内府様へ御意見申し上げらるゝやうは、存外の御沙汰、常真承はつて恐縮至極に存じまする、且元關東より執事として當城に附けられてはあれど、御當家譜代の大名、何とて太閤殿下の御厚恩を忘却し、關東の鼻息を伺ふやうの事あるべき、輕々しく成敗して後々の災の基となりては爲るまじ、善く御思案なさせられとて、様々に申し和めたれど、淀様且以て御承引なく、今にも貴殿御登城あらば、只一打と修理太夫一味の力士、刀の目針を濕し居りますぞ」

(三十四)

且元は聞いて聲を濕ませて、

「且元御當家に仕へ奉りて、忠義の心届かぬをこそ憾みとすれ、毛頭悪心を扱ひ心なきに、上様と云ひ御母儀と申し、何とてさほどまでにお憎しみあるやらん、重成殿御芳志、今日の登城思ひ止まる考えなれど、一命は御當家の爲めに捨つる覺悟、修理太夫一味の者が、嫉妬、猜疑の鈍刀で忠義に凝つたる且元の胸板を貫かうとは思ひも寄らぬ、然し人間は老少不定、世に知らるゝ所なく埋もれんも口惜し、幸ひ貴殿お越しと云ひ、忠義に厚き御心を見貫いて、且元が思ふ所を申し述べ置く、卒爾ながらお聞き下され」

沈んだ詞で斯う云つて、且元は膝を進める、重成は頷いて、

「兎も角も承はり置いて、機もあらば執成を致すてごらう、御苦心の胸中、具に物語りなさせられ」
「此の度關東より下されたる鐘の銘の御難題、表面の御口上で、内々はこれを楯に、御當家の勢ひを此の上にも殺ぎ取らせたまはん御計略を見て取つた、その證據には第一上様を和州郡山に移して、御隠居同様の御身に爲させ参らせん心、それが爲らば他の大名と同じやうに、毎年江戸將軍家へ参勤交替するか、又は淀様を人質として江戸へ下向致さるか、この三箇條の中一箇條承引なくば、其方も大阪へ立ち歸ること相成らじとの御説、我等つくづく思ふに上様も國替へ、又は参勤交替の事、家來として忍ぶべき事にはあらず、由つて兎も角も淀様御下向の事を承諾して、漸くにしてお暇賜はり、今日只今立ち歸つたる處、それが爲上様の御不興斜めならず、命までも召されん御評議御決定は是非もなし、抑も我等淀様御下向の事を承諾して歸りしには、深き思案あつての事、是も序なれば申して置く」と、前にあつた澁茶に咽喉を濕した、

重成はホツとつく息の下より、

「その事第一に淀様御立腹、殊に貴殿は品川にお屋敷地まで申し受けられたと云ふてはないか」

「さ、そこに我等苦衷は存して居る、淀様御下向の事を承引して歸りしは、大御所様計略の裏をかき、御當家末代の御基を立てんと思ふたからぢや、大御所も早や七十歳、いかに御長命なればとて、

八十の御書はあはすまじ、淀様御下向と事定まりても、御屋敷地無くては協ふまじきに由り、我等品川の砂地を選びたるは、この埋立に三五年の歳月を費やすべく、その上材木を大阪より積み出し、御普請に念を入れなば、これにも又五七年の歳月を要すべく、彼是致す中、大御所御他界、當將の御代ともならば、大小名の心も離散、御當家に志を運ぶものも出て來らん、由つて其時徐に策を立て、關東將軍を一戦に攻め亡ぼさば、太閤の御威勢、再び天下に輝き渡らんとの見込みを立て、さてこそ淀様御下向の事を承引して罷り歸つた我等の深意、淀様御下向を眞實に致すては無い、普請略の存する處、具に上様へ申し上げなば、よも且元をお叱りはあはすまじ、御芳志は辱けなければ只今より登城する、誰かある供の用意」と呼び立てた、

「斯う聞いては重成も強ひて止める事が出來ぬ、然し随分御用心、犬死を爲さるまじきぞ、と出來るだけの注意を興へて、そのまゝ其處を辭し去つた。

(三十五)

且元は重成の歸つた後で、直に準備を調へる、舍弟元重を始め家中の者は薄々城中の模様を聞かぬても無いから、今日の登城は石を抱いて、淵に臨むやうなものであると云つて、頻りに引き止めやうとしたが、且元は少しも聞き入れぬ、假へお手討に相成るとも、使して命を果さるるは家來たる身の

道でない、と遂にその日城中へ出仕した。

且元出仕の事を聞いて修理太夫一味の力士は、廊下の蔭に槍を伏せ、刃を秘して、修理太夫の一言を待つて居る、修理太夫より一言の合圖あらば、襖の蔭に伏せられた槍、衝立の背後に潜ばせたる刃は、直に且元の頭上に向つて閃めいたであらう、されど流石の修理太夫も聊か秀頼を憚るところがあつたかして、無法の合圖もなり兼た、大剛力士が今かくと合圖を待つ中に、且元は恙なく例の詰所へ入り、執次役を以て且元出仕の旨を秀頼の御前へ披露させた。

もし秀頼に一片家を思ふ心あらば、兎も角も且元を前へ呼び出して、關東の模様を聞き、嫌疑の次第を訊問して、更に善後の策を立つべき處であるが、家よりは淀君を重く、且元よりは修理太夫を信じる心が深かつたのか、遂に對面の沙汰に及ばず、修理太夫に命じて不審の數々を訪ね問はせた、且元たるものは是を快く思ふ謂れは無い、修理太夫は傲然として、

「且元殿内府御不審がござるぞ、明かに御返答めされ」と、斯う云つた。

且元は不平で堪へられぬ、けれど内府様御説とある上は致し方がない、謹んで手を突くと、修理太夫は愈よ傲然として、

「貴殿、關東へ志を通じ、駿府にござる大御所と怪しからぬ内約を結ばれたと聞く、内府様は云ふ

までもなう、御母儀に置かせられても殊の外御立腹、早々實否取糺せよとある、まづ此の返答より承はらう」

何んと言ふ不埒な詞だらう、且元怪しからず思つたが、さあらぬ躰で、

「これはまた存外の御不審、且元關東將軍家より御當家の執事役として附けられたるものなれど、故殿下には一方ならぬ大恩を蒙りたるもの、何とて關東に志を通じて、當家を粗略に致すべきや、天地神明も照覽あれ、且元聊かも異心は持ちませぬ」

「御當家へ對して異心無きものが、何故御母儀様關東下向の事承諾して歸つたるぞ」

「さ、それについて且元思ふ仔細もある、まづ關東の模様から物語り申さう」と、斯う且元は冒頭をして、此度關東へ下つてからの一伍一什より、彼の三箇條の難題を云ひかけられたる願末迄を詳しう物語り、

「只今申すやうな仔細、三箇條の中一箇條にても承引せずば、且元歸阪の機も無く、兩家の和儀直ちに破裂すべきを思ひ、右の中にて最も行はれ易しと思はる、淀様御下向の儀をお約束申してござる」

「すると貴殿は御母儀を關東へ人質におさし遣はしなさるお心てござるの」

「さや、關東御下向の大事なること、且元存ぜぬにてはござらねど、其處が愚存のあるところ、只お察しを願ふ他はござらぬ」

「さらば貴殿存じ寄りを聞き申さう」

「折角のお尋ねなれど、只今は申されぬ、この儀御披露頼み存ずる」

「然らばそれは追ての事、貴殿慾に本多佐渡守と婚儀を結ばれしは、内府様を蔑に致したる仕方この返答は如何てござるな」

(三十六)

且元は少しも臆せず、

「本多佐渡と婚禮の約束を結びし事、原より我等の本意ではござらねど、何を申すも駿府大御所のお指圖、もし違背致す時は無事に歸阪致し難き事情もありて、一旦は口約致したれど、上様思し召し次第に由りては、直に約束變換すべきは勿論の事、それにて尚且元の仕方に落度ありと云はるゝか此の御返答承はらう」と、少しく氣色ばみて云つた。

先が下手に出れば出るほど突げ上れど、良強く出られる時は、返答にも窮りて、逡巡するが此の種の人の常である、修理太夫も聲を曇らせて、

「貴殿の辨解、確に承つた、一應内府様へ申し上げ、追つて御沙汰致すてござらう、兎も角も今日

は引取りなざるが宜し」
且元も仕方が無い、内府様の御前、宜しく執成を願ふと云ひ置いて、その日は要領を得ず引き取つた、その進退に五分の隙も無かつたから、流石の修理太夫、廊下に潜ばせた剛力士に合圖する猶豫も無かつた。

「そこで修理太夫から秀頼へ、且元の言つた事を申し上げる、最も日頃から間のよくない且元の事を披露するのであるから、好い處は抜きにして、悪い點にばかり尾鱸を付けて言上したのは言ふまでも無い、秀頼も暗愚と云ふては無いから、且元の誠忠を諒として、彼の罪科を不問に置く意志は無い、無かつたけれど、淀君は非常の大立腹、斯程の不忠漢をそのまゝにさし置いては、他々の示しにも相成らん、直ちに誅伐を加へるが宜しからうとの事であつたが、それには織田常真、同有樂、真野豊後守などの溫和説も出て、一應重役古老の意見を聞き糺し、愈よ且元成敗に極らばその上にて最後の手段を取るに遅くはあるまいと云ふに一決し、九月二十八日城中大廣間に於て、且元處分の大評議が開かれた。

事は一家臣の成敗であるけれど、延て關東との大衝突ともなるべき問題、云はゞ豊臣家の一大事である云ふので、上段の簾の中へは、秀頼母子の出座もある、一列には織田常真、真野豊後守を始め

として、近頃お召し抱へとなつた真田左衛門尉幸村、後藤又兵衛基次、長曾我部盛親、瑞團右衛門直之列を直して着座すれば、一列には又、大野修理太夫治長、同道犬、渡邊紉を始めとして、女ながら淀君の意志を代表する大藏局、二位局、正榮尼も加はつた、そこで修理太夫は座を前めて

「何れも早々との御出仕御苦勞至極に存ずる、今日の評議餘の事では無い、大佛供養の事について、駿府へ使つた片桐且元、關東將軍家へ志を通じ、恣に淀様御下向の約束を取結び立ち歸つたるのみならず、上様へ一應の相談も無く、本多佐渡守との姻戚の約束まで致し歸つたは、云はうやうも無き不忠不義の所爲、これに由て直ちに成敗なされてある、名々意見ども候はゞ腹藏無く申されて宜しからう」と口を切つた。

けれど誰人も可否を言はぬ。

修理太夫は一座をずらりと見廻して、

「先輩古参の方々をさし置き弱輩の在下、斯様な事を申し上げるは恐れあれど、且元厚恩を忘却して上様を軽んじ奉る段、その罪極めて輕からず、直ちに討手をさし向け御成敗あつて苦しかるまじさかと心得まする」

修理太夫が斯う云ふと、一味の武士は云ふに及ばず、三人の婦人も口を揃へて、且元御成敗なきに於ては、御當家の武威忽ち地に落つてござりませう、と云ひ添へた簾の中には淀君の髪の毛びりりと動き、秀頼の口を漏るゝ太息幽に聞こえた、織田常真遮つて、

「すると修理太夫殿御意見にては、且元を軍陣の血祭にして、關東と劔戟を交へんお心てござるかか勿論の事、徳川家康武威に誇りて、殿下御厚恩を忘却し、上様御成人の後は、恙く天下の政を還し奉らんと約束しながら、却つて御威勢を殺ぎ奉り、只の大名同様に取扱ふ段、いかにしても無念の至り、上様深く御覺悟あつて、御家傳來の千生瓢の御馬印を、當城の上に樹てたまはゞ、殿下御厚徳を思ふ大小名、蟻の甘きにつくが如く御加勢申さんは必定なり、さあらば家康、天下の勢を催促して當城に迫り來らんとも、恐るゝ事は絶えてあるまじ、且元成敗いたす上は、徳川勢を引受け、御當家の武威を似さんこと、我々の願ふところてござるわ」

「いや」と常真は頭を掉りて、「戰場にはお馴れ無き修理太夫殿、さう思はるゝも無理ならねど、大御所の武勇は斯う申す常真が云ふまでもなく、假にも弓矢取る方々の知りたまはぬ事はあるまじ、假令西國の大名方に、殿下御厚恩を思ふ人ありて、御當家へ御味方なされんとも、頼むはこゝの一城郭の

み、當城いかに要害たりとも、天下の勢を引き受けて戦せんには餘りに用意無く見ゆる、殊に且元の心中未だ十分に理解もいたさず、早まつて御當家千歳の礎を危うしては相成るまじ、なほ御評議肝要と存じます」と、意ありげに云ひ切つた。

「織田殿には徳川どのをさほどに恐れたまふか、以前北畠信雄殿にて在せし時、殿下にも従はせて格別の御武功ありしものと承はつたにさて、思ふ程にもなき卑怯な詞、我等存するには、徳川殿いかに武勇勝れて在さんとも、當城は天下の要害、金銀兵糧の備さへ全く、軍師大將にその人を得ば五年十年の籠城、最後の勝は譲るまじと心に信ずる、假へ戦争は負くるとも此の上關東の蔑如を受け、有る甲斐もなく在には勝るならん、左様な事は仰せなされず、且元成敗の御用意、少しも早く願ひ存ずる」と、何處までも強う云つた。

常真は押し返して

「左様に無謀な戦争はせぬものぢや、且元御成敗は即て關東將軍へ矢を向けるも同じ事、上様の思召しにも由るべきなれど、列座の面々善く御思案ありて然るべう存ずる」

眞野豊後守は常真の溫和説に賛成する、渡邊胤は一も二も無く治長の戦争説を可とする、兩派の争ひ暫くは静まるさまもなかつたが、簾の中に淀君の聲は聞こえて、

「且元成敗を猶豫せよといふは、私を關東の人質にせよと云ふも同じ事、年老いて此の上の耻を見るほどなら、潔く刃に伏して冥途にはす殿下のお側に参るが望み、内府様思召し、強て織田殿のお詞に御加擔もあらば、此の場に於いて……」と涙に咽び返つた。

するとこれを慰める秀頼の聲もした、さしもの常眞豊後守も、淀君の此の決心を聞いては、此の上溫和説を主張する事も出来ぬ、修理太夫一派はいさり立ちて、

「御母儀様御命と、且元殿とはつり替へにはならぬ、今日の評議は定まつた、何れも且元成敗の御用意めされ」

一座は殺氣に包まれた、列席の面々は互に顔を見合わせる、此時執次の役人立ち出て、木村長門守出仕の披露をする、引き替えて長門守病中と見えて髪も亂れ、顔の色も悪さが、末座に出て、遅刻の辨解、辨舌はよし、男は立派なり、水際立つといふのは斯ういふさまを云ふのだらう、簾の中へ一禮して、

「折からの病氣、大事の評議に遅刻致したる不禮の段は幾重にも御容赦を願ひます、さて先刻よりの御様子、お次の間にて詳しう承つたが、且元殿御成敗はお家の大事、是は暫くお見合せを願ひまする」

(三十八)

すると修理太夫一派は左右から突きかゝつて

「さては貴殿、御母儀御生害を餘所に見る心ぢやの」

「いや、左様ではござらねど、此の度の紛擾、原をいへば大藏どの二位どののお詞を深く御信用遊ばしたるに起りし事、忠臣は身の爲に計らずと申すことあり、且元殿當家譜代の家來として、關東將軍へ志を運ぶ所以なし、早まつて御後悔ありてはならぬ、列席の中誰人か且元殿心中をお聴きなされたお方がござるか」と、重成は何處までも且元を庇護ふのであつた、修理太夫は目を瞞らして、

「やア存外の言葉、且元の心中改めて聴かずとも、御母儀様を關東へ人質に遣らんといふにて、その深意は知れてあるわ、恐にも附かぬ評定に時を費やし、且元に防戦の準備させては協はぬ、何れも早う」と、決闘眼になつた。

「まづ待たせられ、假し且元殿に防戦の御準備ありとも、誠當家を敵とせらるゝ萌しあらば、方々のお力を借りるに及ばぬ、不肖ながら重成参つて、只一戦に蹴散らし、且元殿御首級を申し受けて歸るべきも、且元殿は忠義烈誠の武士、御當家に異心無きは私がお受け合ひ申し上げる、此度關東へのお使ひ、御母儀様御下向の事取り極めて歸つたも、且元殿御本意にてなきことは云ふまでもなし我

等つらく案ずるに、關東大御所のお心は、且元殿と内府様との間を割かんとして、その昔漢の張良が楚の國の謀臣苑増を離間せし故智に習ひ、苦肉の計策を用ひたるものと覺し、由て今日且元殿御成敗相成らば、即ち自ら大御所の手術の中に陥りたまふも同じ事、此の儀篇と御遠慮ありて、此の上の御評議然るべう存じて候」と、重成は何處までも溫和説を主張するのであつた。

けれど修理太夫一派の者は同意せぬ、重成の溫和しく道理ある議論には織田真野を始めとして、眞田後藤長曾我部の諸將も、一方ならず同意を表したのであつたが、肝腎の淀君が採用せぬ、大藏局は憎さげに唇を反らして、

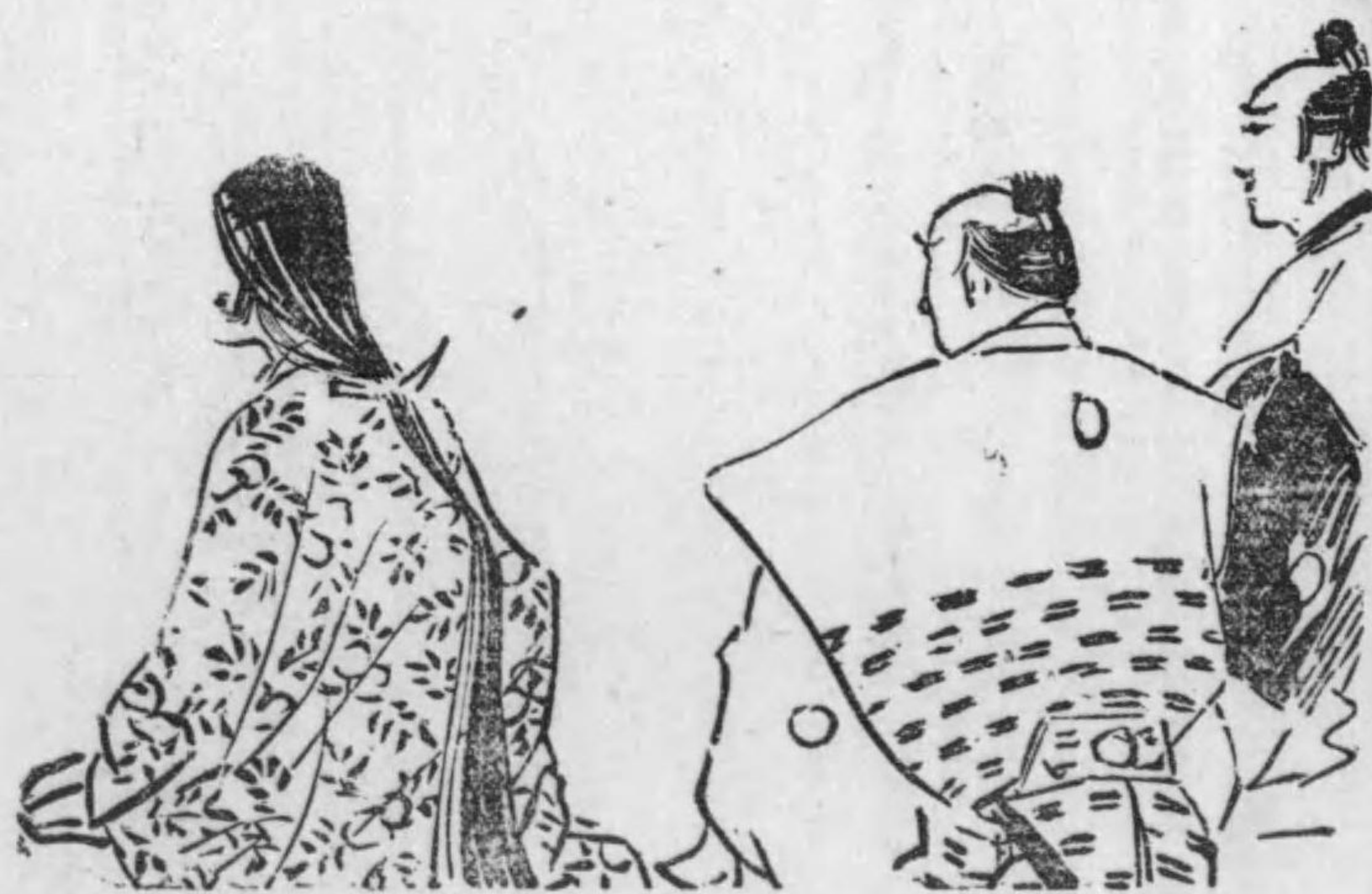
「上様へ申し上げます、織田殿木村殿甚う且元どの御最負と見えて、閉くに堪えぬ詞もあるやうなれど、これは大野殿御存意の通り、少しも早く且元殿を御成敗ありて然るべう存じまする、斯う申しては如何なれど、織田常真殿御事、まだ北畠信雄殿にて在したる時、尾州小牧山の合戦に、殿下御武威に敵しかねて、家康殿のお力を借り辛うじて御領知を全うなされたる御縁故もあり、旁々萬事に家康殿を畏れたまふ御様子、是は人情さもあるべき事、又長門殿は年こそ若けれ、江州の佐々木六角宰相義郷殿御弟子なれば、少しばかりの黄表紙を読みかぢりたるが、鼻の頭にちらつて、兎もすれば高慢の心が見えます」と、傍若無人に云つてのけた。

老功の常真さへこの詞の無禮なるを聞きかね、簾の中へはお暇乞ひもせず、つと座を立つて退いたけれども重成は少しも動ぜぬ、かほどの悪口を開きながら、顔色も變ぜぬ、然し一座は白け渡つて見えた。

(三十九)

修理太夫一派はこの躰を見て、さも愉快氣に冷笑つて居る、大藏局は臆面もなく又語をついて、
「それに長門殿は音に聞こえた臆病武士、先日お茶道の宗右があるまじき耻辱をかへせしさへ辛抱して、御城内の胡盧となつたる人、且元御成敗の曉には忽ち關東とお手切にならんことを恐れ、賢ぶりて斯様なことを申さるゝものと見えた、元來若年新參の身を以て、古參お歴々の間へ入り、口を聞くさへ禮儀を辨へぬ致し方、殊に上様御同意の御評議を蔑して、御當家の御耻辱を思はぬとは、武士の風上にも置かれませぬ、皆様斯様な人の申すことに、お心を移されず、少しも早く且元殿と屋敷へ討手の兵あさし道はすが然るべく存じまする」

局の毒舌は愈よ出て、愈よ甚しかつた流石の重成も二三度は目の色を變へたやうであつたが、こゝが義郷に教へられた甚忍の二字を守る處と辛抱して、一座の成行を見て居る、修理太夫は膝を前めて



「大藏局申さるゝ處、まづ我が意を得たものぢや、關東將軍を敵にすれば、御當家の大勢一押に押し潰さるゝやうに思ふ輩もあれど、殿下の御威徳を以て築かせられたる當城の基礎、容易くは動搖も致すまじ、殊には天下の大小名、近年土木の課役重きに苦しみて、世の亂れを願ふ者少からず、西國には殿下御恩徳を思ふ輩多し、内府様御名を以て御催促遊ばさんには、蟻の甘きに附くが如く寄り集り上様御爲め犬馬の勞を採るもの多く候べし、速かに且元御成敗ありて、義兵を擧げさせ給はんには事忽ち成就致さん、卑怯未練の臆病武士の詞に迷ひて、一刻の御猶豫あらば、御當家末代の瑕瑾ともなり候はん、早々御決定あらせ候へ」と、さつと四邊を見廻した、

これには第一淀君の同意あり、修理太夫一派は口を揃へて、且元成敗の肝要なる事を主張する、木村重成幾度か例を引いて、兎も角も一應は且元を御詮議あるべし、と申し立てたれど、常真は去りて居らず、豊後守は溫和に過ぎ、真田後藤の諸將は説を立てず、遂は且元成敗の事に一決して、直ちに討手をさし向けられる事となつた。

是が抑も關東大阪手切の原因で、且元を始め織田常真石川貞政の一派は九月二十六日大阪を退去した。

もう斯うなつては致し方が無い、全體ならば木村重成も、片桐織田石川の人々と共に、大阪を立ち

去るべき筈であつたが、彼は一命を秀頼の爲めに捨て、親常陸介の悪名を雪がうとする心がある、死となりて生命を全うせんよりは、玉となつて碎くるを武士の本意として居る、けれど且元の孤忠仇となり關東大阪手切の有様となつたのを見ては、流石心に樂しからぬ所もある、大藏局の誹謗罵言には、面色をも變へなんだ彼れも此の日城中を退出する時には、拭うても拭ひ切れぬ一むら雲の眉宇の間に糊引くのを見たのであつた。

さうして屋敷へ歸つて衣服を着換へやうとすると、袂からばらりと一通の手紙が落ちた、然もそれが女の手蹟であつた。

何事かと驚いて封を切つて見ると、真野豊後守の息女から、懐ひのたけを細々と認めて、重成に憐みを乞ふのであつた。

(四十)

大阪最後の變報が駿府へ着いたのは、十月一日の事であつた、秀頼にして當家へ異心を挟むに於ては、此方にも用意あるべしとて時を移さず駿府以西の大小名へ催促狀を發せられる、これに由て井伊掃部頭、藤堂伊賀守は東寺上下鳥羽に陣を取つて洛中を守護し、松平定勝は伏見城、北國勢は天津、坂本、堅田、西國勢は西の宮、兵庫、四國勢は泉州に陣取つて、最後の下知を待つて居た。

そこで家康は十月十一日駿府を出發して、途中の處々に鷹狩などを催し、沿道諸大名の意嚮を探りつゝ、十一日名古屋へ着、それから岐阜、柏原、彦根に日を費して、二十三日京都、二條の城に着いた、彼が斯う途中に日を暮らして、悠々と鷹狩などをして居つたのは、この間に現將軍秀忠に、出發の準備をさせる爲めてあつた、されば將軍秀忠はこの間に十分の準備をして、家康が京都へ到着した翌日、伊達政宗上杉景勝を先陣として、勇ましく江戸を出發した、さうして伏見城へ到着したのは十一月六日であつた、秀忠が路次の制法には左の如く記された。

覺

一路次中宿は木錢の事

宿主薪を焼くに於ては、一人に就て鑊錢三文

づゝたるべし、馬一匹に六文づゝたる事、

一驛賃馬の儀、

次の處より外に追ひ通し申す間敷事

一駄賃錢の儀、

如此定嚴重に可相守事、

やがて戰鬪準備が出来たから、十一月十五日秀忠共に進んで、大阪征伐の途に就いた、その勢二十餘萬騎と註せられる。

これを聞いた大阪方は今さらの如くに騒ぎ出した、前に片桐且元、織田常真の一派退散してからは大野治長の手で、城中の實權が握られた、治長も且元を目的上の瘤として居つた間こそ、彼を切つて關東を敵にしやうなどと、大言して居たが、内外の實權を自分の手へ收めて見ると、もう戰爭がしたくない、もし無事に治まるものならば、何處までも無事に済まして、自分は長く大阪の執權者で暮らしたいと思ふから、談判破裂になつた後、秀頼の名を以て、毛頭野心の無い事を所司代へ辨解したが、家康は睫毛をも動かさぬ、そこで又太閤恩顧の大小名へ懇懇な催促状を出したけれど、誰一人味方しやうといふ者は無かつた、この人はと思つた加賀の前田利常も、安藝の福島正則も、皆冷淡な返答ばかりをして來たので、治長一派の計略は又からりと當が外れたのであつた。

けれど關東から宣戰公布を受けた後は致し方が無い、明日は城中に諸將を集めて、關東方を一挫ぎにすべく軍議を凝らすことになつた、その前日の日も將に暮れやうとする時、眞野豊後守は供人一人を伴つたばかりで、木村長門守の屋敷を訪ふた、重成は書院に迎へて對面する、

「豊州様、能くこそお來て下された、駿府大御所と前後して、當將軍も伏見城へお着なされたといふ

明日の軍議も大方それ等の手配りてあらうと存ずる、それに就いて貴殿御名案もござるかの」と、前に豊後守息女から、玉章を受け取つた事は何も云はず、此事のみを問ひかけた、豊後守は莞爾ともせず、

「此の度の合戦、味方勝利はあるまじと存ずるに由つて、我等深く覺悟を極めてござるぞ」

「さては貴殿も御當家をお見限りなされて……」

「いや、大閤以來御厚恩になつた、御當家、今となつて見限る心は毛頭ない、今日貴殿をお訪ね申したは、折り入つてお願ひ申したい仔細あればちや、お聞き入れ下さるてござらうかの」

(四十一)

「改つて我等へ願ひとは、さて何事てござりまするな」と、重成は不審の眉を寄せる。

豊後守は云ひ難さうにして、

「他ては無いが、此の度の合戦、萬が一にも味方勝利あらうとは思はれぬ、我等大閤の恩に報ふ時節到來、一命を秀頼公御馬前に捨つる心なれば、却つて心安ければ、但氣に繋るはと、云ひ掛けて暫時無言、即て詞を改めて「娘菊の事てござるわ」

娘菊の事と聞いて、流石の重成も良胸を掻がした、豊後守息女の事は、幾度か大兵衛の噂にも聞い

て居る、大佛殿供養の時にはちらと姿も垣間見て居る、殊に片桐且元制敗の評定あつた時、誰とは知らず誠ある玉章を袂の中へ入れた者があつた、年は弱うても、日頃謹嚴をもつて知られた人であるから、もし是が他の姫君息女から送られた物であつたら、直ちに當人へ送り返すか、或は封を切らずに焼き捨てたかも知れぬ、いや知れぬ所では無い、今日までにもそんな例はいくらもあつた、けれど豊後守息女の玉章のみは送り返しませず、焼き捨てませず、封を切つて三度までも繰り返して讀んだ、それで重成のお菊の對する心は知れて居る。

然し豊後守はそれを知らぬ、娘から重成へ手紙を送つた事だけは、或は知つて居たかも知れぬが、重成が封を切つて、三度までも繰り返して讀んだ事は少しも知らぬ、それで今度の合戦を最後と覺悟した彼は、切めて生息ある間に娘の願ひを叶ひさせ、大阪城中の花と呼ばれた此の若武者を婿として、心置きなく討死しやうと覺悟したのであつた。

事に賢しい重成は、早くも豊後守の心を讀んだ、けれど爾うと打ち出しても云ひ難ねる、豊後守は再び語を續いて、

「自分の娘を養めて申すも如何ぢやが、當年取つて十七歳、花ならば彌生の櫻、今唇を解くべき粧ひ、標致は家中でも一と云つて二とは下るまじき姿と、出入の者も申すに由て、親自慢の一に數へ居

る、讀書習字香花の藝術まで、師を選みて習はせられたれば、人の後に落ちやうとは思はねど、只不幸な
は幼少の時母に別れ、男親の手一つに育てられ、温き春の風に當りたる事も無し、此の度の合戦御
利運無く、頼包討死にても致さば、誰を頼る者も無き野末の花、遂には名も無き百姓原の草鞋に掛け
られ、幸無き最後を遂ぐべきかと、冥路の障害これ一つぢや、頼包不惑、娘可憐と思し召されて不束
なる女ながら、切めてお腰元代りにもお迎へ下さる事は協ふまいか、普通の禮儀より申せば、然る
べき媒介人にも頼み、順序を経て、申し入るべき筈なれど、年老りては氣も焦思ち、日頃の御懇意
にお甘へ申して、直談判に罷り越した、是は強てもお聞き届け下され此の通り手を突いてお頼み申す
と兩手を疊に突いて頼み入つた。

重成は恐縮して、

「御芳志辱く聴聞、それでは傷み入る、まづお手を上げさせられ」と、豊後守の手を上げさせ、さて
改めて「數ならぬ在下を、さほどまでに思し召し下さること、武士冥理此の上の歡びなし、是が太平
の御代ならば、直にお受けを申すべきなれど、只今の御當家の御様子、大野殿執權同様、此の上も無
き我意をお振いなされるれど、さて一人の歸服する者なければ、御家來の心一致せず、思ひくりに議を
立て、内府様にお薄り申す、合戦となりて第一の不利は、將卒の心一致せざるにある事、

改めて申すまでも無し、殊に敵は大軍なり、大御所様多手の間、徳を以て懐け、恩を被せて育て上
げたまひたる軍兵なれば、進退定の如くにぞ候はん、この精兵を敵にして、手、肌々の味方の勢にて
駆け合はんは、宛ら石に向つて卵を投ぐるが如く、勝利中々及び難し、さすれば今日ありて明日無き
身、妻を取りて何とか致さん、此の儀は平に御容赦下され」と、云ふ中にはら／＼と涙を流した。

(四十二)

「さ、其處でござるぢや」と、豊後守は身を前めて「内府様を頭に戴いて、御當家に忠を致さんもの
誰とて此度の合戦に、命全う生き延びんといふ者はあるまじ、それは我れ等も覺悟の上なれど、夫
婦の情は幾千歳、假し現世にては縁薄くとも、來世來々世、添ふべき世界は未長し、それほどの事辨
へぬ娘ではござらぬ、今日祝言の盃して、明日花々しく討死なされうとも、冥途の旅を貴殿一人に
淋しうさせる娘で無し、狂げても御承引願ひ存ずる」

重成も憐れと思ふ女なり、斯程までに云つて呉れる豊後守の真心を無にするのも忍びぬと思ふから
漸く承諾の旨を返答した此の時、豊後守の歡び、手の舞ひ足の踏む所を知らぬとはこんな様を云ふの
だらう。

「なに御承諾下されるとな、それは千萬辱けない、貴殿ほどの勇士を婿に持てば、娘も幸福、私も

満足、死んで先代先々代に手柄話を致すことも出来る、さらば改めて媒介人を頼み、祝言は明日の晩善は急げ、用意も何も入つたものではござらぬ」

云々處へ市郎兵衛は間の襖を引き開けた、

「殿様へ申し上げます、只今城中よりのお布令には、今朝御大所二條城御出發、當將軍は伏見の城御進發、轡を併べて御進軍との注進、御油断なく御用意あるべしとの御事てござりまする」

豊後守は驚いて、

「え、家康殿又常手段を遣られたな、彼の大將始めは鷹狩野狩に油断させ、いざと云ふ時、短兵急に攻めかけて、勝を一舉に決する軍略、例それ、今度もそれ、されば合戦の手合せ、こゝ十日の中は出てまじ、お互ひに油断してはなりませぬぞ」

市郎兵衛は頷き、

「お年は召しても御智略は衰へさせず、いつも隙の無い御大將でござりまする」

「その老功の大將を敵として、修理太夫の軍配は物足らぬ、然し今それを云ふて詮ない事、いづれ一度は捨てるに定つた命、さして惜しうは思はねど、大閣殿下御偉業もやがて一片の土くれに化るとと思へば、それが無念で堪へられぬ」

「御心中お察し申します、然し殿様、城中よりのお使者は、このまゝお返し申しても宜しうござりまするか」

重成はまだ頷いたばかりであつた、市郎兵衛心得て座を立たうとするを豊後守は呼び止め

「これ、御當家の御譜代、斯様な處で申すのは如何ぢやが、今度御縁あつて娘菊を御當家へさし上げる事になつた、不束な者ぢやが、幾久しう頼み置くぞよ」

市郎兵衛には寝耳に水の話であるから殊の外驚いて、

「え、眞野様御息女と」

「あ、御縁あつて長州殿へ参らする、不束者ぢや、叱つてたもれよ」

「それは、お芽出度い事でござりまする、大兵衛とも申し合ひ、お慶びは追ての事、兎も角も使者を返しませう」

「市郎兵衛まづ待たせられ、其處で祝言は明日の晩、媒介人には誰が宜からう、織田常真どのお在ならば、強てもお頼み申す處ぢやが、寧ろ長曾我部殿にても、又眞田殿にても……」

「私はずお使者を返して参りまする」

「いや、まづ待たせられ、祝言は明日の晩、さて媒介人には……」

豊後守が殊の外氣にして居た媒人は、遂に真田左衛門尉に札が落ちた、十一月十六日の夜、重成



とお菊とは芽出度く祝言の盃を挙げた。此の事は秀頼母子の許可も得て居る、豊臣家安危の大事を前に控へて、婚姻沙汰でもあるまいと云ふものもあつたが、豊後守の喜悦は云ふばかりもなかつた、秀頼も最愛の家臣の慶事と聞いて、近侍の者を悦びの使者に遣はされた。

十一月十五日、關東將軍の軍勢京都を出發したりとの報道は、櫛の齒を挽くが如く注進する、さらばそれに就いて評議を凝らさねばなるまいといふので、その日城中へ諸客將を集められる、第一番には真田左

衛門尉幸村、續いては木村長門守重成、後藤又兵衛基次、塙直之、薄田隼人、真野豊後守、郡主馬、苟くも一方の旗頭となるべき者は、一人も残らず出仕する上段の御簾の中には秀頼母子の出座あること云ふまでもなし。

段々軍議を凝らす

れたが、大野一派と他の武將とは、從來の確執で議が一致せぬ、大野派の中に於いても、渡邊胤は秀頼の意志を受け、修理太夫は淀君の心を迎へて、兩々互ひに鎬を削る様であるから、一座の中が三つ



にも四つにも分れて居る、武將派の云ふ處は大野派で可けぬと云ひ、大野派から云ひ出す事は武將派で反對する、評議は巳の下刻から始まつたが、未の刻過ぐるまでも是れと取り止めた事は無かつた、そこで真田幸村は一策を献じて

「斯様に味方の心が一致せいで、面白い軍をする望みも無い、我等思ふに老翁の大御所天下の大軍を率ゐて、この一孤城を攻めやうとなさる、勝敗の数は云ふまでも無く知れ切つて居る、この敗運を挽き回して、此方に勝利を得やうとするには、それだけの備へが無くてはならぬ、まづ第一は戰場の古兵大軍をもつて來り攻めやうといふを、坐して當城に待受けるのは愚の極みと云はねばならぬ、凡そ籠城の法、隣國の援けにても頼むか、又は勢ひ少くして兵を出すことの出来ぬ場合、止むを得ず要害に據つて力限り敵を拒み自分を守るか、この二つより無き筈、然るに當城の御有様、他に頼むべき援助は無し、城中には兎も角も十萬騎からの軍勢を有ちながら、隣國へ兵卒をもくり出さず、一戦をもせぬとあつては、城中の軍氣自ら沮喪して、遂に救ふべからざる非運にや陥り申すべき、我等承るに、關東大軍とは申しながら、關東北國の兵まだ到着せぬと云ふ、この機に乗じて我が軍より二萬騎をくり出だし、一方には宇治勢多の流れを扼し、一方には茨木高槻に兵を分ちて、京都駿府の通信を塞ぎ置き、諸國へ催促の御狀を賜はらば、日和見に時を移す大小名或は我に味方する者あら

んも知れず、最も是は我等一人の存じ寄りて無く、亡父昌幸今果の時に遺言して、關東大阪御手切れの事、三五年の中は出てし、その時は汝秀頼公に申し上げて、斯様々々致せとの詞、今も耳底に残る如く思はる、此の議御採用あるに於いては我等その衝に當りて、少しにても御當家の御爲を圖るべし、方々御存意如何てござる一と、辨舌水の流るゝ如くてあつた。

後藤木村長曾我部の諸將は云ふに及ばず、秀頼公にも御同意の模様であつたが、大野治長幸村に功を收めらるゝのを嫉ましく思つたのか、つと膝を前めて、

「さや、我等同心致さぬぞ」と遮つた。

(四十四)

武將の提議に反對するのは、殆んど大野一派の常であつた、重成は怪しからず思つて

「修理殿には只今の真由殿畫策を、宜しからぬやうに仰せらるゝ、さらば他に御良策でも在すかの」と、詞は優しう、心は強う問ひかけた。

「さや、さして良策があると申すてはないが、當城は故殿下の御心を注ぎ、御力を盡させて築き給ひし無双の名城でござるぞ、この名城に貴殿等如き名將多くおはし、軍勢十萬とは申せども、配下々々を仔細に調べたらば、十二三萬騎にも餘つてござるぞ、その上糧食は足り、彈藥は十分ある、假令天

下の兵を引き受くるとも、確には三五年は支へられう、その中には西國の大名にて、殿下御恩徳を受けたるもの、必ず内通致すべし、何とて輕々しく兵を出して雌雄を決するに及ぶべき、尙々御評議が肝要でござらうぞ」と、修理太夫は一言で云ひ退けた。

修理太夫の詞には、邪が非でも淀君の御同意がある、修理太夫の詞は説き伏せる事が出来ても、淀君に勝つことは出来んから、流石の幸村も口を噤む、すると郡主馬良列が末座から聲を掛けて、

「只今の眞田殿御計略は、深謀遠慮ありて、殊の外善きやうに存ずれど、御採用なしとあれば是非に及ばぬ、藤堂高虎先鋒となりて、住吉の陣を構へたりと承はる、然も續く勢は無し、彼奴太閤殿下の御恩を受けながら、義理人情を忘れ果て、御當家に弓を引かんとする條奇怪なり、上様の御許可さへあれば、我等手勢を具して走せ向ひ、一戦に蹴散らして高虎の素首持ち歸り、軍神の供物とせん、宜しく御評議願ひ存ずる」と、思ひ切つて云ひ出した。

「主馬の献策、切めて御當家の武威を輝かすに足る、今ならば高虎の手の者のみ、何程の事かあらん、早く討手をさし向けて、初陣に敵の荒膽を挫ぎ候へ」と、長曾我部盛親は賛成した、後藤木村も異存もなし。

「さらば中座仕つる、各々御免下され」と

郡主馬の座を起たうとするを、修理太夫又引き止めた、

「主馬殿待たせられ、輕々しく戦しては、勝敗の數に關はらず、御當家の御耻辱となりまするで、高虎如きを二人殺したりとて何程の事か候ふべき、小せり合ひの勝利よりも、大局の勝が專一、急ぐ處で無い、待たせられ」と

「あはれ此の献策も用ひられなんだ、主馬は殊の外残念に思つたが仕方が無い、更に一策を献じて

「さらば此の議はさし控へ、心利きたる手の者を遣はして、密に兩將軍の陣地へ火を放ちては何うて

ござらう、いかな大御所も當將軍も、火事と見て慌てずには居たまふまじ、其際に打ち入りて、あは

好くば兩將軍の御首級を申し受け、御當家千歳の計を立つるを得ば、我等死すとも恨みとは思ひま

せぬ」と、主馬は血眼になつて云つた、けれど修理太夫は耳も動かさぬ、

「主馬殿の謀計、勇ばかりあつて智慧が足らぬ、さほどの小細工で兩將軍を滅ぼすこと思ひも寄ら

ず、その儀も如何、尙評議をなさせられ」と

武將派から云ひ出すことは何一つとして採用せぬ、氣早の基次息を機させて、

「我等存し寄りありて申すこと、一議にも及ばず云い斥くるは奇怪なり、されど上様お思し召しとあれば是非に及ばぬ、我等存するに、兩將軍とも日ならずして當地に到着、御陣所は茶臼山か、天王

寺か、天下茶屋住吉の他は出てず、その時御陣備への十分ならぬ間に討つて出て、一方に敵の英氣を挫ぎて、一方に味方の士氣を鼓舞し候はん、此の儀よも御異存はござるまら」

真田幸村も賛成した

「後藤殿献策我意を得たり、寡を以て衆に敵するには、奇計を出して敵の不意を打つ外はあるまじ、此の儀御進達頼み存ずる」

けれど修理太夫は頭を掉つた。

「各々の御奇策、何れも結構でござるが、之を小戦には用ふべし、今天下の大軍と戦ふに奇計のみを弄んで、萬一利を失ふ事あらば、悔ゆるとも及ぶまじ、それよりはこの名城の下に敵を集め一撃して打挫ぐが上策ならん、尙御評議が肝要でござらうぞ」

(四十五)

斯ういふ風で城中の議は容易に決せぬ、その間に關東の軍勢は到着して、家康は茶臼山、秀頼は天王寺に陣を取つた、天守櫓から見渡すと、旗旛馬印目の届く限りは翻りて、軍勢雲霞の如くてあつた。

さらばといふので、城中では持場々々の取り極めに掛つたが、肝腎の治長に人望の無い處へ、諸

將に一致の心が無いから、容易にそれが定まらぬ、此の上は抽籤にする他はあるまいといふ議論が出て、大野と渡邊糺とが鬮奉行になつた、これで障りなく鬮を作れば好かつたが、例の治長どうかして自分に勢力を附けやうといふ野心があるから、鬮を引く前に斯う云ひ出した。

「時に渡邊殿、黒門口は平野近くで、大手第一の要害でござるに由つて、他の客將にお譲り申す事は出来ぬ、不肖ながら拙者自分その任に當つて、當家の武威を輝かしてお見せ申す」

處がそれでは糺が治まらぬ、糺は秀頼の執事といふので、何うかすると治長を凌がうとする、

「これは大野殿お言葉とも覺えぬ、諸將の持口に善惡の差があればこそ抽籤で定めやうとする、これに奉行たる貴殿にして、まづ此の事を蔑視にする、それで諸將を歸服させる事は出来まい、早くお約束通りに鬮をお作りなされ」と云つた、

治長は頑として聞き入れぬ、

「いや、さうは行かぬ、鬮を引いて割り當つる時は、いかなる人が黒門口の持になるかも知れぬ、萬々一手勢少く、身分な人の持口となつて御覽あれ、内廣く外遠き第一の要害を、何として守ることが能きやう、是に由つて拙者此の任に當らうと申したのぢや、秀頼公の御寵愛を肩に着て、馬鹿な事を云はつしやるな」と云つて退けた。

「怪しからぬ、一言、御當家の爲めに忠を存するもの、持口に私あつて何んと致さう、假令小勢であらうとも、死を決して防戦すれば、功はさつと現はれる、御自分の他に忠節の士無きやうに大きな口をお叩きめさるな」

「やあ云はせて置けば舌長の口上、今一言云ふて見よ、その分にてはさし置かぬぞ」

双方とも決闘眼になる、一列座の面々捨て、も置けんから、漸く間を引き分けた、そして二人の紛擾は静まつたが、抽籤の事は止になつて他の方法に由る事となつた、何事も天運と云ひながら、こんな事に日を送つて居る中に、關東勢の手配は十分に行き渡つて、北國勢も續々到着する。

この抽籤の騒動のあつた日であつた、茶臼山の家康の陣中から本多佐渡守使者として、大阪城へ乗り込んだ、口上は大御所様より秀頼公へ申し傳へらるべき仔細ありての事であつたから、取り敢えず大野治長罷り出て來意を問ふて見たけれど、秀頼公へお目に掛つた上で無くては、申し上げる事出来ぬと云ふ、さらばといふので、秀頼公の御前には大剛の力士を多勢伏させて、佐渡守を案内した、佐渡守は音に聞こえた老功の兵であるから應じたるさまもなくずつと進んで、まづ時候の挨拶、恭悅の旨を申して後、

「恐れながらこれを御覽下され」と、云うて一束の書類を取り出した。

お側に付き添つて居る渡邊紉受け取つて秀頼へ参らする、秀頼手に取つて御覽あるに、これは一々秀頼の名を記して、大阪から西國九州の大小名へ送られた味方催促の書状を取り纏めたものであつた。

(四十六)

秀頼は意外の事に驚いて、手紙持つ手をわなくと慄はした、佐渡守はこゝぞと云ふ様で、

「内府様へ申し上げます、御兩家のお間兎角圓く参りかねて、兎もすれば干戈の上に見る事となり、武門の意地、止むを得ずとは申しながら、大御所様に於かせられては、殊の外御不満足に思召したまふ、只今お目に掛けたその書状、それがいかにして大御所お手に入つたりと思召す、これみな四國九州の大小名より、大御所様へさし上げたものでござりまするぞ、御當家に於かせられては、大閣恩顧の大小名、少くも三五人御當家の爲め忠節を勵むならんとの御願みもあらせらるべきなれど、御催促の御書状すら大御所様手にさし上げて、關東の爲めにお味方せんと申すもののみ斯く申しては如何なれど、一人として太閣の御恩に死して、大御所様を敵とする者はござりませぬぞ、只今大阪到着の人数ばかりにても二十七八萬騎はござりまする、その大勢を以て當城を取り圍まば、御當家の御内人に、鬼神を挫く勇者ありとも、一戦にして打ち破らんこと、佐渡守の方寸にござりまする」

する、なれど大御所様に於かせては、原より事を好みたまふにては在らず、秀頼公にして舊來の交誼を思し召し、速かに大御所様御本陣へお越しあらば、人馬を傷くるには及ばず、事忽ち治まらんとの御説、御返答の次第に由りては、恐れながら佐渡守より御前宜しなに御執達も仕る」と、辨舌水を流すが如く云つた。

大阪の城中にも、和議を願ふものが無いではない、大野治長の一派などの口には、強硬な説を吐いても、心に無事を願ふのは云ふまでも無い、處へ大御所から時宜に由らば無事に兵馬を治めんとの御使者があつたので、これを好き時機に和睦を申し出てやうかと思ふ心もあつた、一膝ずつと前める時秀頼は他の諸將の意見は問はず、應揚に口を開いて、

「使者の口上善く解つた、先君の御厚恩に由りて、一國一城の主となりし者すら、恩を忘れ義に背きて、秀頼の大事を餘所に見るのみか、悉く大御所の膝下に伏して、秀頼に耻辱を與ふるに至る事、當家の運の末とは云ひながら、全く天の然らしむる所ならん、假令當方に十全の謀なくとも、今となりて前將軍の思し召しには従はれじ、身は當城の露と消ゆるとも、再び大御所にお言葉は交すまじ御身歸りて、この事を善く申し傳へよ」と返答した。

大野一派は案に相違したけれど是非が無い、佐渡守は秀頼が日頃の氣象にも似ず、勇まじき返答を

與へたるに驚いて、も早や是非なし、さらば戰場にお目に掛りませう、と云ひ置いて立ち去つた、この時佐渡守の使者振り、威あつて猛からず、應揚にして迫らざるを、木村重成は次の室から沈と見て密に感に入つて居た。

佐渡守は茶臼山の本陣に歸つて、秀頼公の口上を傳へたから、この上は猶豫すべきで無いといふので、十一月二十五日總攻撃の命を下された、先陣は上杉景勝、佐竹義宣これは今福鳴野の方面より、直に城へ迫れとの事であつた。

大阪方面も斯うなつては内輪争ひに日を送れぬ、番頭矢野和泉守、飯田左馬介に八人組を添へて今福を堅めさせ、山本靜馬、井上對馬頭の番頭に鳴野を守らせた、處がここの擲のまた十分成就せぬうち、佐竹の先鋒數百人、堤に沿うて攻め寄せた。

木村長門守重成の働くべき舞台が出来たのであつた。

(四十七)

この時後藤基次は、浮武者と云ふ名で、城中に詰めて居たが、今福鳴野の方面に當つて、鐵砲の音矢叫びの聲、手に取る如く劇しく聞こえたれば、すはこそ大事、戦事の様子如何ならんと、急ぎ櫓に上つて見ると、今福口の戦鬨が眼の前に見えたら、直ちに秀頼の御座所へ駆け付けて、

「木村重成が初陣の武者振り、敵は東國一の大名佐竹殿と見えまする、疾く戦争の機を御覽せよ」と、お進め申した。

秀頼も重成の初陣の武者振りが見て遣りたい、殊に東國一の大名を相手にしての戦争、勝負いかゞあらんと思はれたから、基次の云ふが儘に櫓へ上つて御覽ある、すると重成陣頭に馬を前めて、佐竹勢の雲霞の如き大勢を敵に取り、八百足らずの小勢をもつて、命限りに奮闘して居る所であるから、いかにも危く思し召したと見え

「又兵衛、彼を助けよ」との御説が下つた。

基次は性來の戦事好き、それが浮武者となつて沈として居るのはいかにしても堪へられぬ、髀肉の嘆の所であつたから、この御説を聞いて、雀躍して起ち上つた、秀頼はいかにも重成の陣が危いので

「又兵衛早く、又兵衛早く、早く〜」と急ぎ立てた。

「又兵衛は心得て櫓を下りたるが、鎧を着けて居る間も無い、鹿毛の三歳駒にひらりと乗つて、その上て具足を着ける、手勢悉くを集める隙は無いから、一同我に續けと云ひ切つて、韋駄天の如く駆け出した、配下の武士我後れじと後につく、その勢ひ殆んど敵の大勢を呑むが如くに見えた。

早速今福口に驅け附ける、戦争は今が翻て、何れが勝とも定められぬ、基次は馬上ながら聲を掛

けて、

「重成殿、重成殿、勇まじき武者振り、脱漏なき軍配、それがし上様のお指圖を受け、助太刀として向ひたるぞ」と、鞍を叩いて絶叫した。

重成助太刀と聞いて歡ぶかと思ひの外、徐に馬の首を回らして、

「上様の思し召し、基次殿の御芳志、今に始めぬ事ながら肝に銘じて忘れませぬ、なれど今日は重成の初陣、殊に今は命がけの激戦と云ひ、大將を取りかへては陣列を亂す恐れもある、この一戦それがしが引き受けて、上様の御名を落すやうな事はせぬ、貴殿は暫時この境にて御見物下され」と云ひ切つた。

斯う云はれては基次も是非が無い、

「さらば基次これにて見物する、随分手柄を致され」と、いふので後藤は控へて見物したが、初陣には似ず、重成の軍配に一點の非を打つところが無い、さらばと云つて折角こゝまで来たものを、見てばかり居られぬから、舟を集めて溝の中に浮め、こゝへ鐵砲方の人數を載せて横合から佐竹の陣へ鐵砲を浴びせかけたから、堪らない、さしもの大軍、前と横合とから攻め立てられて、遂に三の柵を棄てるに至つた。

高松内匠は音に聞こえた大剛の武士、佐竹右京太夫義宣が柵を捨て、退却しやうとするのを追ひかけ、旗本へ突き入つた、主君の大事を餘所に見ては居られんから、濫江内膳引つかへして鎧を交へたけれど内匠の矢頭に敵しやう筈はない、二三合するうちに胸板を突き刺されて、馬より墮と落つる所を、内匠の手の者駆け寄りて、忽ち首をかき落した。

この日の戦争で重成の勇名は、城中に鳴り渡つた、昨日まで卑怯者と賤しんで居つた者まで舌を巻いて感服した。

(四十八)

佐竹右京太夫東國一の大名でありながら、弱年初陣の長門守にまくし立てられて、三の柵まで退却するに至つたのは、言語同断と云はねばならぬ、當人も口惜しく思つたから、直ちに上杉景勝に使者を馳せて、助勢の議を云ひ込んだ、武士は相互、殊に隣國の交誼もあるから、さらばといふので鐵砲組の武士數百人を繰り出した、けれど重成は驚かぬ、大井何右衛門氏を大將として、この上杉の新手に當らせた。

上杉の勢は新手でもあり、關ヶ原以來徳川家にはお覺えの芽出度くない上杉家であるから、斯ういふ時には忠勤を勵まねばならぬと思つたか、思ひの外鋭く砲撃する、何右衛門は陣頭に馬を立て、こ

ゝを先途と應戦する中、上杉勢から打ち出した流弾に眉間を討たれて、無念の戦死を遂げたのであつた、重成は見るより、直に河崎和泉を代りにして、屈せず撓まず防戦させる、その中に又榊原式部少輔の先鋒が下知も待たず、横合から攻め立てた、是で重成の軍勢は三方に敵を受けることとなつた、是ではならぬと思つたが、何右衛門の首級を敵の手に渡すのは残念な、どうかして首級を收めて、厚く葬つて遣りたいと思つたから、彈丸が隙間もなく降る間をぬけつ潜りつして、何右衛門の死骸を探しに出た、重成がいかに部下の將卒を愛撫したかはこれでも知れる、見ると朱に染つた一ひら繁れる草の間に、何右衛門は二箇所の重傷を受けて、無念の死を遂げて居る、重成が望み通り首級を拾ふまでは、いかな事があつても應戦の手を緩めるなと命じてあるから、和泉は少しの絶え間も無く鐵砲を打ち出す、敵は三方から攻め立てる、その間に立ちて悠々と首級を收めて、元の陣へ歸つた時は、日もくれぐれになつて居た。

重成は心の中に、小勢を以て大勢に駆け合せ、長時間に亘る戦争をするのは、味方に損があつて敵に得分がある、これは早く休戦するが好からうと思つたから、何右衛門の首級は大兵衛の手に渡し、自ら先陣へ駆け入つて、瞬く間に兵を收め、瞬く間に陣を退いた、その迅速な事譬ふるに物も無かつた。

この跡を見た右京大夫と景勝とは舌を捲いて、大阪城中に木村重成といふ智勇遠謀の若武者があると聞いたが、今日目の前に見て驚いた、これは必ず一塵の物になるだらうと云つて、互に稱賛したと云ふ。

この日の戦争は是で終つた、この日の戦争が是で終つたばかりで無い、大阪冬陣はこれで終つたと云つても好い、さしも名高い冬陣の戦争と云ふのはこの今福口の激戦のみであつた、老獪な家康が二十萬に餘る大軍を率いて來たのは、秀頼の軍勢と雌雄を決しやう爲ては無く、この勢ひで城方を威嚇して、無事に媾和を結ぶ爲であるのだ、媾和が唯一の目的ではない、媾和を利用して、大阪第一の要害たる外壕を埋め立てる爲めであるのだ、外壕を埋め立て、大阪方の要害を奪ひたる後、戦争をしばらくして第二の戦争を始めやう爲であるのだ、

家康の胸中にこんな恐ろしい謀計のあることを秀頼は知らぬ、淀君は知らぬ、治長の一派は原より知らぬ。

(四十九)

爾ういふ事があらうとは知らぬから、二十五日今福口で手柄をした武士の爲に、二十八日城中では論功行賞の評議を開いた、關東勢は大阪城を遠巻にして攻めるでも無く攻めぬても無く、極めて暖

昧の態度を取つて居た。

今福口の合戦に、もう感状を受くる者がありとすれば、第一には木村長門守、第二には後藤又兵衛その他は與らぬ。

長門守へ感状を下さる事に就いては、さすがの治長も不承知は云はなんだ、不承知は云はなんだけれど、それよりもまだ恐ろしい事を云ひ出した、それは自分の舍弟主馬(名は治房)にも重成同様感状を賜りたいといふのであつた。

最も治房にも多少の功の無いではなかつた、二十五日今福口で戦争のあつた翌日、彼は手勢二三百騎引き連れて、上杉の陣へ夜襲を試みた、これが不思議にも功を奏して、十二三も敵の首を得て歸つた、手柄といへば手柄であるが、重成の勳功に比べる事は原より出来ぬ。

治房の感状に就いては、一同に異議があつた、云ふ中にも織田後藤の面々が承知をせぬからと云つて、それで治長は黙つては居られぬから、これが高じた曉には兩方の大衝突が起るかも知れぬ、秀頼は双方の間に立つて、殊の外苦しんだ、もし治長の後に淀君が附いてさへ居なければ、いかやうにも處分したのであらうけれど、斯う云ひ出されて見ると、重成ばかりに感状を與へて治房を袖にすることは出来ぬ、さればと云つて、治房に感状を與へては武將派が治まりさうな様もない、可愛さうに

大阪方の大將ともあらうものが、いつもこんな事てばかり胸を痛めて居られる。

重成は例の沈着いた調子で、

「治房殿功名は、中々我等の及ぶ處ではない、感状をお與へになるは、當然の事と思はれる、然し治長殿、感状が何んの役に立ちまするな」と、柔かに治長へ問ひ掛ける、

治長は笑つて、

「これは長州殿お詞とも覺えぬ、武士の譽は知行でない、領地でない、死したる後の名を飾るべき感状、これが第一でござるまいか」

「死後の飾り、いかさま爾うありさうなこと、然し誠忠天に達さなば、感状は身に附けずとも、譽は不朽に傳ふてござらう、それとも生前御入用の事でもござるかの」

「最も死後の譽と云ふばかりではない、生前にも身の飾りとして他に誇ることが出来るてはござらぬか。」

「生前にも身の飾りとして、いかさま他に誇ることも出来やう、生前にも身の誇りとして……」と、重成は二度までも繰り返して「修理どの思召しは知らぬこと、假令重成微功ありて、御感状を賜はらんと云ふとも私は堅く御辭退申しまする」

これには一同驚いた、中にはその理由を詰問する者もあつた、重成は徐ろに、

「私の身の飾りは、誠忠の二字、これを鎧とも甲とも申して、戰場に臨みまする、原より一命は君に捧げたるもの、二君に仕ふる心なれば、他人に手柄を誇る用もござりませぬ、私思ふに御感状は浪人として二度御主君に有り附かんとする時、古き手柄を申し立つる爲の字形同様と存ずれば、御當家の他に二心なき私、いかやうの事ありても御感状は戴させぬ、この儀宜きに御執達頼み入りまする。」

秀頼は御感斜めならず見え、一同は心にアツと感じ入る、さすがの治長も重ねて感状の事は云はな

(五十)

感状の沙汰は重成の辭退に由つて沙汰止みとなつた、そこで重成は城中を退出して、自分の屋敷へ引き退つた、市郎兵衛大兵衛を始め部下の諸將は式臺まで出迎へる、次に來るべき戦闘準備に就いて、尙協議を要すべき事のあるのだから重成は一同を大廣間へ召集した、日は漸ら暮れかゝる、燈火參るの聲々は、奥、局の處々に聞こえる、市郎兵衛は重成の恙き様を見て、歡ふこと限りない「此の度の戦功、上様に置かせられても、殊の外御感、重成一座へ面目を施し申した、是れ然しなが

ら、大問殿下の御遺業、御威烈の今も残りて、味方の勝利得させたまいたるは云ふまでもなければ、御身達の忠節、お家大事と思ひたまふ心に依る、重成一方の大將を蒙りたれば嗚呼がましけれど、拔群の勳功ありたるものへ、我が名を以て感状を與へ申す、左様御承知下されへ」と、重成は一同へ云ひ渡した。

然し重成の部下に屬する者は、皆重成の心を以て心として居る、感状欲しさに戦争したるのみにてなきのみか、重成が秀頼より御沙汰ありたる感状を受けなんだ事も、已に承知の上であるから、一同は頭を掉つた、中にも市郎兵衛は聲を絞つて、

「申し上げます、我々一統感状欲しさに戦争したるにはござりませぬ、殊に今日城中の御評議も、感状御辭退と申すこと、私どもばかり大將の御威に預つて何とか致さん、この儀は平に御免し下されませう」と云ひ放つた。

他の諸將も異論は無い、口々に市郎兵衛同様の事を申し立てる。

「いや、各々の遠慮はさる事ながら、重成が上様へ御奉公申すこと、各々が重成へも屬さ下されたとは、事の次第が相違して居る、上様滅亡の後に重成はあるまじけれど、重成戦死の後も各々の命はある、命ありて他の大將に事ふる時、忠烈節の他に勝れたるを彰すものなくば、奉公はいくらの

損があらうも知れぬ、心には染ひまじけれど、我等名を署したる感状御受け下されへ」と、言葉を盡して云つた、然し市郎兵衛は承知をせぬ。

「お詞ではござりませすけれど、御前が上様へ御奉公遊ばすのも、私が御前へ御事へ申し上げるも、事情に相違あらうと思ひませぬ、他のお方は存せぬ、私と大兵衛とは假命令を召さるゝともこの感状は戴させぬ。

いかさま市郎兵衛と大兵衛とは、他の諸將と關係の違つた點もある、これは重成も同意のさま、「さらば市郎兵衛と大兵衛とは沙汰に及ばぬ、高松殿を始めこの度の戦争に勳功ありたる方へは、我等より感状を参らす、假しお心には染ますとも、枉げて御受領頼み存する、もし又強いて御辭退とあらば、重成何れもへ参らする知行は持たず、何れも勳功に報ふべき物もなければ、是にて御退出を願ふ他は無し

斯う云はれては是非に及ばぬ、志にてはなけれど謹んで頂戴する旨をお受け申したれば、重成歡んで感状を授けた、昔が今に至るまで、武門武士の身に取つて、この感状ほど尊い物はない、重成の與へた感状が後々その人の身に、何れ程光りを添へたか知れぬのであつた、今その中の一つをお目にかける。

威状

今度秀頼様大阪御籠城の節、片原町今福村の堤に於いて、敵佐竹右京大夫切懸り候處早槍を合せ首
一つ討捕之段感入候儀に候時分柄御事多く候間先我心得可申入由被仰出候也

霜月二十八日

木村長門守重成書判

高松内匠殿

そこへ執次の者は駆け附けた。

「申し上げます、備前島の菅沼殿御陣より、大筒を放し懸けられたれば、城中の騒擾申すばかりもなく、大變の體にござりまする」

(五十一)

家康奇計の大筒が、いかに城中を騒がしたるかは大坂城史を讀む者の齊しく眉を蹙むる處である
家康は前に記した通り、一舉して雌雄を決しやうとするのでは無い、斯うして城中の女連を騒が
さうして思ふまゝに和睦をしやう謀計であつた、それで城を遠巻きにして折々大砲を浴びせかけるの
だ。

大阪關東手切となつて、今や戦争の最中であること早くも天聽に達したれば、殊の外宸襟を惱ま
されて、權大納言藤原兼勝、同じく藤原實條を勅使として、家康の陣へ遣はされた、けれど家康は深く
思ふ仔細があるから、勅命に由つて和議を講ずるやうな拙いことはせぬ。
勅使に對しては相當の返答を齎せ歸して、直に茶臼山の本陣へ阿茶局を呼び寄せた、阿茶局は一方
の參謀官として、こゝまで從いて來て居る。

「阿茶、私は此の度の戦争が何うも心に樂まぬやうな、殊に畏る邊りより厚い御詞も賜はる、和睦し
やうと思ふが何うであらう」

是ほどの大事を腰巾着の木多佐渡守にも云はず、阿茶の局に相談しかけたのは、よく／＼局を利用
することがあるからだ、局はもう家康の胸中を察して居る、

「それは好いお慈悲でござりまする」

「然し、秀頼も一たん仕かけた軍を、此儘では濟ますまい、何か好い工夫は無いか、斯る事に勅使を
煩はすのも恐れ入る」

「私の思いますには、秀頼様よりもまづ淀様の御心を動かさせ申すやうに……」

「淀様の心を……さて何として」

「御女儀は御女儀同士の事、上様は京都に常光院様お在の事をお忘れてござりませるか」
阿茶局の云ふことは、狙ひ正しき征矢の如く、發矢と家康の胸を射た、常光院と云ふは京極左京太夫忠高の母で、淀君には肉身の妹に當る、その頃は出家して都の月花を友として居るが、現在の姉の大事に、胸を櫛さすには居らぬだらう、家康は手を拍つて、

「好い處へ心附いた、常光院參らうかの」

「私參つてきつとも迎へ申しまする」

「よらばぬしに委頼する、萬事を好きに計ひ申せ」

阿茶局は心得て引き退つたが、家康の參謀官とも呼ばるゝ婦人だけ、萬事に少しの脱漏も無い、その夜の中に出發して、單獨都へ發つたが、どう説き付けたのか、物の五日も経たぬ中に、常光院を同道して歸つて來た、家康は直に對面して、

「よて遠路の處御苦勞でござつた」

「上様も御達者でこのやうな嬉しい事はござりませぬ」

「此の度も身を呼び寄せたについては、局から委細を聞いたであらう、私と秀頼とは義父義子の間柄、淀様は當將軍の御臺所と血を分けた間、親子親戚の中に血を注いで戦争したくはない、お前の心より

出たる様にして、淀殿へ和睦の事を勸めては呉れまいか」

「厚さ思し召し、私も嬉しう存じまする、只今より城へ參つて、淀様へ對面、上様の御芳志を具に申し聞けるでござりませう」

「あゝ、大儀ながら頼み入る、秀頼はまだ蕾の花、むざ／＼散らすは惜しいのう」

常光院はこの日城へ入つた、淀君は思ひ掛けぬ人の入來に歡んで、直に居間へ招き寄せた。

(五十二)

常光院はまづ家康の心和議にある事、關東の大軍一舉して改め立てたらば、逆も籠城は協ふまじ事、家康の心和議にあるを幸ひ、此方よりも無事に結局を附くるやう心掛けあるべき事など、薄い唇で説き立てた、淀君はつく／＼聞かせて、

「家康殿お心は知りませぬ、秀頼様も今度こそはとの御決心、天下の勢ひを引き受けて、故殿下の御威勢を以前のやうになされんとての戦争なれば、今更和睦のお頼みはあるまじと思ひまする、それよりも久々の御入來、酒なりとも參りて、浮世の事も暫時は忘るべし、歌がるたでも致しては何うでござりまする」と、何處までも樂天主義であつた、常光院はこれに屈せず膝を進めて、

「淀様御意にてはあはせど、それは異なる御了見、申すまでも無けれど、戈劍は天下の兇器、好んで

弄びたまふものではござりませぬ、それも大御所御怒り強く、何處までも勝負をなされうお心なれば、臍を堅めて籠城の御覺悟もなさるべき處なれど、今彼方より腰を掛けられたまふは、願ふてもなき幸福、及ばずながら私間へ入りて、いかやうともお力を添へまする、一まづ和睦をなされては……」

常光院の説く所は極めて熱心、極めて親切なものであつた、淀君は冷かに打笑みて、

「御芳情は嬉しう、御志を仇にはせねど、今和睦の事など云ひ出しても、秀頼様お聞き入れはよもあるまじ、そのやうな事は止めて、暫時は太平の昔の心殿下の御前にては時々この御慰みもありし狂歌ども讀み合ふて、お互に胸清う遊ばうては……」

「いや、まづ待たせられ、さては御前のお心、殿下の御偉業を一片の煙になすとも、秀頼様御行末に悪しき雲掛らんと、この戰爭中途にては止むまじとの覺悟ござりまするな」

「原よりの事、城中には太閤恩顧の武將ども雲の如く、大野父子、織田真野、それ／＼の差配、今福口の初手合に、木村長門守の勝利、お聞き及びもあらせられん、行くの事心配に及ぶまじさかと……」

淀君の詞にては、十分に味方の勝利を信じて、容易に和議を容れまじさ心も見えた、常光院はい

かに云ふても、その石の如き覺悟の動きがたきを見て、宜しく口を嚙んだのであつた、最も永久に口を嚙んだのでは無くて、次には何と云ふべきか、適當の詞を考へて居たのであつた。

「お前に見するものがある、疾う立たせられ」

「あの私に……」

「お前の心を安むる爲に、城中の武備兵糧の高など、眼の前に見せて、秀頼様のお覺悟知らせ参らするわ」

淀君は起ち上つた、側に詰めて居た正榮尼は笑顔して、

「常光院様は御當家の武備その他を頼み少う思召すと見えまする、御安心の参るやう御一覽に御供へなされては……」

「私もその心、S」

常光院も斯く促されては立たぬ理にも行かぬ、案内の女中二三、次に淀君、次に常光院、正榮尼はうしろから附添ひて一の間、二の間、三の間は淀君の御座所二の丸、三の丸、山里の丸、隅々の矢倉、帶曲輪、残る方無く巡視して、兵糧の豊かなこと、武器銃器の充實せる事、武將より兵卒まで肉肥を勇氣満ちて、いかな大敵をも物の數ともすまじき景色、彼方此方を見せ、

「秀頼様お心強う思し召すに無理はあはすまい、この兵糧あり、この武備ありて天下の勢を引き受くるなれば、假し勝たぬまでも、殿下の御偉業を一片の煙となすまじき心づもり、それは御安心なされ、天守臺をお目に掛けます、秀頼様御弱年とて關東よりある甲斐も無く扱はるれど、殿下世におはしたる時の面影、さア御覽下さりませ。

淀君は常光院を伴うて遂に天守閣へよつたのであつた。

(五十三)

淀君の心にては天守閣より、西は武庫六甲の山々、東は生駒棕根峠、目に見ゆる限りの平野山川を指さし、夫等の山と野と、川と海と、遂には秀頼殿御手の物となるべきを誇るつもりであつたが、さて天守閣へ上つて見て驚いた、斯う云つて自慢せう、あア云つて安心せうと、胸の中に案じて居た詞は、悉く煙となつて、一言の詞も出なだ。

淀君は天守閣の上立つて、一目西の方を見下したまひ、暫くは瞬きもせぬのであつた。

それもその筈、城中の武備兵糧が思ひのまゝ充實して居るそれよりも、關東の軍勢は更に幾層倍の勇氣に充たされて、犇々と外壕の邊まで迫つて居る、太平の時はこの天守閣の上より見た野の景色山の景色、水の景色が何處やら失せて、目の届く限り關東方の旗旌で埋められて居る、關東方の兵員

で詰められて居る、雲霞の如き大軍とはこんなことを云ふのだらう、もしこれが一時に動き出して、短兵急に攻め来らば、さしも天下の名城も一日とは保つまじ、秀頼様の御運も太閤殿下の御偉業も、忽ち灰になるのであらうと思ふと、後から水を掛けるやうに慄とした。

味方自慢の正榮尼も、これには膽を潰して目を瞬いた。

「何んと恐ろしい兵ではあはさぬか」

常光院はこゝどと思ふさまで口を切つた。

「思ひの外の大軍、なれど……」

淀君は負惜みが強い、平氣の様を粧うて、

「兵ばかり多くとも、將卒の心一致せずば、恐るゝに足らぬ事、殿下生涯の大事の戦争は、いつも小勢を以て大軍を惱ませなされしわ」

「なれどこの目に餘る大軍を引き受けさせて、他に援けの兵とてもあはさぬ、秀頼様御運の末が案じられます」

常光院はこゝどと附け入つた、正榮尼も弱い音を吐いて、

「お味方の武將どもに、この大軍を懸け惱ますほどの軍略がござりませうか」

「それは大野の胸中にある事よ」と、淀君は一縷の望みを他の一方に繋ぐらしく云つて「戦争の事は婦女の身に關からぬ事、居間へ歸りて歌がたりども致さうよのう」

始めの誇り顔なりしに引きかへ、さも不平さうに、さも不愉快さうに、さも妬ましさうに、悄悄として退かうとした時、備前島を堅めた菅沼正芳の寄口より、づどんと一發、天地も覆る如き響きして人魂よりも大きな大砲の彈丸、風を切つて飛び來りしが、あなやと思ふ間に、淀君の立つて居た天守閣の二ツ目に中つて恐ろしい物音、恐ろしい煙、アツと叫ぶ聲の下に、淀君の召し伴れた二人の侍女は、微塵になつて死んで了つた。

「あれえ」と叫ぶ女の聲、

「様、お危うござりまする」

正榮尼は絞り出したやうに云つたが、そのまゝ其處に平太張つた。

淀君も顔の色は無い、常光院も慄へて居る、第一の大砲につゞいて、第二第三の大筒も鳴つた、然し幸ひに天守閣へは中らななだが、淀君の決心はこれが爲めに碎かれて、意地の悪い口から

「恐やの、恐やの」と、我知らず叫びた、

一同べたりとなつて立つことも出來ぬ處へ、大藏局は長刀小脇にかいこみ、侍女十人あまりに白

絹の褌をさせて、淀君の御身心許なく迎ひに來た、淀君の歎び瞥へんに物もなかつた、

「恐ろしいこと、秀頼様は恙もなう……」

「無事でござりまする」と、大藏局は勵ますやうに云つて「様の御身に御怪我もあらせられず、常光院様もまづは御無事でござりましたか」

淀君は茫然として四邊を見廻して居る、常光院は慄へ聲で、

「雷が落ちたのではござりまするか」

「敵方から打ち出した大砲でござりました」

「大砲と申すは恐ろしいものよ、まづ淀様を御介抱參らせて……」

大藏局の率ゐた侍女は、淀君と常光院との手を引いて、三の間へ歸つたのであつた。

この夜淀君よりの使者として、大藏局と正榮尼とは、秀頼の居間を訪れた、和睦を勧める爲であつたのは云ふまでもない。

(五十四)

秀頼の前へは大藏局も出た、正榮尼も出た、更に第二の使者として二位の局も遣はされた、常光院は久々の對面といふので、是も滞りなく案内せられた、爾うして是等の人々から、大御所から殿を

掛けさせられた事を幸ひ、和睦を結んでは何うてござりまするとの話が出た。

然し秀頼は承知をせぬ、武士の面目として今更和睦をせらるべきでは無いから、飽くまでも戦争を継続して、雌雄を決する決心であると云ひ切つた。

常光院は恨めしうに、

「斯程まで申しても聞き入れはござりませぬか、勝つべき見込の無い戦して、兵どもを傷くるは情ある大将の爲すことではござりませぬ」と、切り込んだ。

けれど秀頼は承引がない、

「勝負は時の運、天下の大軍が勝つにも定まらねば、外に援けなき籠城の味方が破るゝとも極つては居らぬ、只初心を貫くが……」

女の口にては到底秀頼の心を動かすことは能さんと極つた、そこへ罷り出たるは例の大野治長を前に立て、織田有樂、渡邊糺の二人であつた、治長はまづ挨拶を申し上げたる後、

「上様お聞き及びもあはしつらう、此度の御不和、朝廷に於かせられても、殊の外宸襟を惱ませられて、茶臼山の大御所様御陣へ勅使をも下されしと承はる、此上幾年御籠城遊ばすとも勝つまじき戦争して、兵どもを傷けんは宜しかるまじ、善く思し召し分けられて、淀様御所望の貫くやう、御分

別遊ばされて……」

最初は四天王も隊長にも勝り主戦論を主張せし治長の口から、斯る軟弱の口上を聞かうとは、秀頼も思ひの外であつたらしい、さも不興氣に、

「ては其の方は、秀頼に軍を止めいと云ふか」

「いかに、勝つまじき軍して、士卒を傷けんは武士の本意にてはあるまじく、朝廷の厚き思し召し

もあはず事、善く御分別あらせられて……」

「分別、お身は此の上秀頼に分別せいと云ふか」

「恐れながら萬民の苦勞、御母儀様の御心をもお察し遊ばして……事なく兵亂の治まるやう……」

「分別の上にも分別して、此度の戦争始めたてないか、その上に又分別せいと云ふか」

「朝廷の厚き思し召しもあはずこと、更に善きやうの御分別」

秀頼の顔の色は次第に悪う變つて來た、

「善きやうの分別、それは戦争せぬ前の事よ」

「なれど、其處を……」

「今となつてよき分別のあらうやうは無、而して四天王は何んと云ふ」

「四天王の所論も、朝廷の思し召しと云ふに我を折りて、無事に和睦を……」

「結へとあるか」

「御意の通りにござりまする」

「さらば有樂は」

「私も和睦の御儀に……」

「さらば糺は」

糺もまた頭を擡げて

「何事も御母儀様へ御孝行、親の爲には武士の意地をも捨てる習てござりまする」

「さらば 城中の者悉く和睦せいと申すのぢやの」

秀頼の聲は慄へた、一同は只畏まつて頭を垂れた。

(五十五)

暫くして秀頼は太息をついた、

「頼み甲斐も無き人の心よ、秀頼今となつて且元の忠言に思ひ當つたるわ」

治長も有樂も、糺も大藏局も齊しく顔を見合せた、

「何んと御意遊ばしまする」

「大御所も年寄られたれば、今は何事も御堪忍遊ばせ、彼のお方だに在さずば、天下は即て御當家の御手に歸せんと、且元最初より申したるを、氣に止めて聴かざりしが今となりては残念至極ぢや」

云つて一同をきつと睨んで、

「然し、今云ふて詮なき事、四天王の心、きつと和睦にあると云ふな」

「恐れながら上様に偽りは申しませぬ」

「いや、私は當城の柱とも頼む四天王が、今となりてさる弱い音は吐くまじきと心に信する、和睦の事はあぬしたちの才覚から出たことだらう」

「全く左様にてはござりませぬ、是非淀様の御發議、常光院様御同意もあらせられて、それで我々一統へも、可否の御相談ども」と、治長の詞はしどろもどろに亂れて來た。

「母上は御女儀、心弱いと詞もあらうづるわ、なれど其處はあぬし達御側に仕ふる者で、善く御介抱申し上げ、萬に一つも御過誤も無いやうにするが、奉公忠義と申すものでないか」

治長はいよ／＼詞に窮つて、額の汗を拭のみであつた、有樂は身を前めて、
「只そればかりの御儀にてもなく、茶臼山御陣より御聲掛りもおはする由で、御母儀御心も揺いたげに見うけまする、一たん御和睦あらせたまふとも、戦争は味方が勝利の後、さのみ耻辱と申すにてもござりませぬ」

「それ程の事、秀頼とて存じ居るわ」

「さらば、此上にも御分別あらせられて……」

「和睦も事と次第とに由る、秀頼とて戦争を好むのでは無い、和睦事成らば、國家の政治秀頼の手に屬くことゝならば格別、従前の通り部屋住み同様の有様に於て盤居せんよりは、深く戦場の露と消ゆるが望みぢや、再び申すな、私の心は決して居る」

治長の長い舌も、もう物を云ふ勢ひは無かつた、糺は一生懸命になりて、

「御逆懐御有理にござりまする、然し國家の政治を、上様御手へ渡さんとは、いかにしても思はれませぬ、由てそれは後々決定の事として、此度はまづ取り放さず……」

「いや、聊かにも父太閤の御名を辱しむることは能きぬ、それとも兩將軍秀頼の軍門に降服とも申すのか」

「全く左様にては……」

「爾うて無くば、秀頼より頭を下げて、兩將軍の膝下に拜伏する事となる、それは和睦でない降服ぢや」

「さらば何處までも天下の勢を敵として、軍なされう思し召してござりまするか」と、治長は口を出した。

「それは最初から知れ切つたる事、今改めて云ふには及ばぬ、元來此の度の戦争、且元のさま／＼に諫め云ひたるを聴かず、關東手切となりたるは、お身達三人の申すことを聴いたからぢや」

「なれど、それは……」

有樂の何とか云はんとするを、秀頼は善くも聞かず、

「今となりて降服同様の和睦とは何事、聞くも穢れぢや」

秀頼はつと立つた、簾はさつと下りる、一座は没趣け渡つて見えた。

(五十六)

此の間も備前島其の他の寄手からは、盛んに大砲を打ち掛けて、淀君の心膽を寒うさせる、真田後藤長會我部の諸將は、毎日合戦を凝らして必勝の謀計をめぐらして居る、その奥向には常光院が

淀君の怯へた心に附け入つて、頻りに和議を勸めて居る、秀頼を中心とする諸將の心にこそ、天下の勢を敵として花々しく唯雄を決する心はあるが、淀君を取り巻いて居る女官、治長、有樂の胸中には、早く和睦の議を講じて、假令面白からずとも、安穩なる世を送らうとの希望を満たされて居た、そこを家康の鋭い眼で睨まれて、目には見えぬ秘密の策略で撫て廻されて居るのであるから、到底滅亡せずには居られない、運の末と云ひながら誠に悲しい始末であつた。

常光院は徐々として淀君の御前へ出た、淀君は待ち難ねて、

「秀頼殿、まだ御承引は無いかのう」

「いかに申しても御承引はござりませぬ、部屋住同様に斯くてあらんよりは、大砲の彈丸に中りて、討死するが本意ぢやと御意なされます」

「え」と淀君は驚いて「討死するが本意ぢやと……」

「秀頼様の心斯くまでも強う在しては、此の戦争とても急に鎮定すべくも見えませぬ」

「私も太閤様御在世の頃には、折々戦争にも出合ひたれど、斯う恐ろしいものとは思ひ掛けなんだ、あれまた大砲の音がする、誰も死んだものは無いか、恐ろしい事、恐い事」

「是非も無き成行、此の上は最後の御覺悟でも」

淀君は涙ながら面を掩ふた、そこへ取次の女中は、茶臼山から阿茶局をお遣はしになりましたと知らせて来た。

「阿茶局が参つたとある、兎も角もお逢ひなされては……」

常光院は旨を窺ふた、淀君は頷かせて、

「家康殿御口上でもおはさうかの」

「それはさつとござりまする、まづ此方へ召させられては……」

さらばと云ふので、阿茶局を此處へ通した、案内の役には駿府で知邊になつた正榮尼が當つたのであつた。

淀君は涙の面も見せられぬ、怖へた氣色も見せられぬ、白い頬に笑凹まで見せて、

「阿茶どの、久しう逢はんの、大御所もお達者で御滞陣と云ふことぢや」

阿茶局は始才がない、淀君の胸に食い入る如き聲で、

「誠に此の度の騒動、武門の意地とは申しながら、大御所様に於かせても、殊の外御心痛遊ばします

る」

「私も何うせうと思ふ事、今も今、常光院と談合して居る處ぢや」

だけの儀式として、三の丸、二の丸、その外の總構へなど、塀石垣少々御破却も候はゞ、和睦の御誓ひ立ちどころに成り立つべし……」

「局に見込みがぢはすかの」

「私一命に掛けて、さつと無事に收めまする」

これまでも云はれても、猜疑の念にのみ驅られたる淀君は十分安心の行き難ねた様、常光院を見返り

て「御前は何んと思ふの」

常光院は阿茶局の手前、こゝで頼まれた義理を捌かうとする躰で、

「大御所様の御心、表向にこそ大軍も動かし給ふづれ、御本心より御當家の御二柱を憎う思し召さぬは、此頃の戦争の爲され振ても明白でござりまする、此上は阿茶殿御芳志に絶らせて、少しも早く和睦の御誓ひ、様より上様へ御勧めあるが宜しからうかと心得まする」

淀君の心は愈よ決した、今までは不安の色に包まれたる面に一道の光りを見せて、

「局の申すこと、只、石垣少々ばかり破却して済むことならば……」

「御和睦の爲されまするか」

「秀頼様にも勸めて……私、さつと……」

豊家一期の大事は、この一席の密語に由つて決せられた木村真田後藤などが忠烈無双の軍略も、七隊長を始めとして、豊家の爲めに一命を捨てんとする他の將卒の忠勇も、斯うなつては何んの益にも立たぬ。

阿茶局は尙密談に時を移して、日の暮れ頃に立ち歸つた、常光院は城に残つて、その柔かい手に城方の人々を撫て廻さうとするのである。

夜に入つて淀君の御居間より、秀頼の御居間へ、三度まで使者を立てられた、それは阿茶局の口上を傳へると、和睦の事を勸告するのと二つの用であつた。

秀頼も最初のほどは、承引の躰にも見えなんだが、元來情に脆く、涙に弱く、殊には孝心の厚い人であつたから、遂には心にもなく淀君の勸告に従ふ事となつた、それも阿茶局の云ふが如く、家康の意、果して二の丸、三の丸の石垣少々ばかりを破却するにて事済まば、と云ふのであつた。

焉んぞ知らん、二の丸三の丸の塀石垣少々ばかりを破却するのは、豊臣家の土臺を根本より破却するも同じであつた事を。

會て家康が太閤の名古屋の陣に従つた時、大量洒落の大將であるから、大阪城の地圖を家康の前に開いて「この城、何處を攻めたらば落ちるであらうか」と問はれた事がある、けれど家康は深謀遠慮

のある狸爺であるから、容易には意見を吐かぬ「それがしの愚存にては、とても分りかねます」と返答したると太閤は大いに笑はせて

「昔信長公の本願寺門跡を此の地にお攻めなされた時、その時一旦和議を容れて、外壕を埋められたれば、次の軍では僅か二日で落城したぞ」と、斯う云つたことがある。

家康は是の一言を深く胸に秘めて、さうして此の人の遺子を滅さうと謀つたのであつた。

(五十八)

數日を経て城中にはまた大評定が開かれた、それは秀頼より四天王、七隊長その他の諸將へ和睦の得夫を議られたからである。

勿論此の席へ秀頼の出座はない、時々刻々その評議の次第は、取次の役人から秀頼の御座所へ傳達する。

こゝで關東と和睦して可きか否きかとの問題は、豊臣家存亡の一大事であるから、容易に議論が一定せぬ。

木村長門守は云ふた「關東將軍よりまづ淀様の御心を攪り收めて、和睦を望みたまふ事、深き仔細あるに極つた、これは容易に議すべき事でない、まづ關東の様を取り糺しては何うであらう」

後藤基次はやゝ激して云つた「誠に口惜しきは味方の有様よ、上様の御大事とあるに、先君恩顧の武士は一人も應ぜず、中には御當家よりの使者を切つて、此方へ耻辱を興へたものもある、さすれば頼みなき浮世の様、今城中の兵糧乏しきと云ふては無いが、原より是にも限りがある、このまゝにして籠城を續けんには、諸將の心一致するにあれど、只今の模様ではそれも協はぬ、斯うして我々を召し寄せられて、和睦の事を問はせらるゝは、取りも直さず奥向の御評議一決の後と思はるゝ、何んと申しても詮は無い、生きて此の上の耻辱を見るより、我々一統力を協せて、敵はぬまでも、茶臼山の本陣を突いて見やうてはないか」

真田左衛門は云ふた「いや、斯うして頼まれ奉りたる上は、一日にても上様の御繁昌を圖らねばならぬ、關東より和睦の議を急がるゝは、深き仔細あるに極つた、容易に御承引あるまじきやう、一統より申し上げる事に致さう」

この評議の最中へ、秀頼よりの使者として、大野修理太夫が罷り出てた、「上様の御説、和睦の評議如何てござるな」

木村長門守は他の諸將の不平の色を見て、

「只今評議中、決定の後は此方より御返答申上ぐると御傳へ下され」

早く斯う云つたから治長は退いた、基次はもう面色が變つて居る。

「真田殿お詞は、善く家康殿胸中を見透されてあるやうに思ふ、容易に和睦すべき所でない、各々今日こそ御當家御大事の處でござるぞ」

他の諸將は四天王の議論次第に由つて、和戦何れとも心を決しやうとして居る。

長門守は打ち案じて、

「然し是は御大事の評議、一朝一夕に決すべき事でない、我々よく思案したる後、更に改めて他日の評定に掛けては何うあらうの」と、何時も優和しい詞であつた、

基次は諾と云はぬ、

「いや、評定には及ばぬ、三十萬騎に餘る大軍を引率して、兩將軍御出馬と申すに、戦争らしき戦争もせず、ひざく和睦して歸らんと云ふには、狸よりも狡猾き家康殿胸中に、恐ろしき謀計ありと知れた、和睦の事存じも寄らぬ」

左衛門尉は頭を掉つて

「さう一我意に申したるものではない、我々のみが戦争せうと申しても、肝腎の上様、その思召しなくては、馬一頭自由に動かすこともなるまい、さればと云ふて、見すく計略は掛るもあるか、さて

何んとして……」

秀頼の使者として治長は又罷り出た口上は前に變りなく、

「上様御説、淀様御仰せ、和睦の御評議いかゞてござるな」

今度は淀君だけが殖えて居る。

基次は赫と怒つた

「お身の云ふごとく、軽々しう決すべき事ではない、決定次第此方より申し上げるわ」

頭から被せかけられても、治長はびくともせぬ

「御二柱とも、諸客將の御評議を待ち難ねてお在の御様子、疾う決定して御返答申し上げられいては

……」

基次は愈よ怒つた、時宜に由らば當城の禍根たる男妾を切つて捨てん色も見えた、

長門守は間へ入つて、

「味方の大事、評議したるが上にも評議して、遠からず此方より……」

治長は頷いた、

「さらばその事を申し上げる、方々今日の御評議、和睦の二字を御忘却遊ばしてはなりませぬぞ」

(五十九)

秀頼の御座所へは、淀君もお越しあり、治長有樂、其の他の者も詰め切つて、武將等評定の結果を待つて居る、

「いかに評定に間が入るの」と、淀君は吐息をつかせた、

「中には御和睦を望まぬ者もあるげに見えまする」

治長の詞には何時も毒がある、淀君は聞かせて

「當家の爲め忠節を思ふ者でさてそのやうの……」

「戦争して命を捨てる外に、忠義の道無き如く心得る輩も、少くはござりませぬ」と、有樂は例も此の調子であつた。

それを治長は「いや」と打消して、「忠義を思ふ心より、和睦を望まぬ者ならば、多少は愛らしい處もあれど、彼等の心中、蛆虫よりもまだ穢い、是には馬鹿氣な仔細がござるわ」

「穢い仔細とは、何事てござりまする」と、常光院は後を促す如く問ふた。

「詮ずる處、御知行大切と思ふからの事、こゝで和睦成り立ち、御當家關東御間睦まじく、天下泰平の御世ともならば、有りて用なき武士、御暇も出やうかとの懸念より、斯う御返答延引いたすので

ござりまする」

「何んと云ふ、治長」と、秀頼は氣色を變らせた、

「これは眞實の事、有樂齋も氣附はありしと思ふ、由て此上は上様より、頭ごなしに和睦せいとの御命令を下されと……」

「それは餘りに」と有樂は躊躇して「此の上の御催促遊ばす程の事になされて……」

「さて」と、淀君は急に呆れ顔を見せて、

「修理が申す事眞實なれば、見下げ果てたる魂性、左様なものに當家の大事を託するには足るまじと思はれる、それについても和睦こそ大事なれ、上様御名を以て、修理太夫、疾う催促を申し候へ」

治長は承はりて座を起たんとする、秀頼は呼び留めて

「和睦の評定延引するは、當家へ對し叛逆も同様の不忠、強て異議を申すものあらば、我が名を以て相當の處分をも爲、萬事は其の方に委し置くぞ」

運の末は是非も無いもの、秀頼は心にさのみ信じては居らぬけれど、知行欲しさに和睦を欲せざるものゝやうに云はれた一語胸を刺して、終に治長へ萬事を委任するまでに激昂した、

「はッ」と治長は領承して、仔細畏り奉りまする」

「少しも假借する事は無い、治長、上様の御説なるぞ」と淀君は力を添へた、苟にも修理太夫に勢力の附く事ならば、いかな事をも辭まぬが淀君の彼に對する心中立てである。

治長は御受けして評定の席へ出た、後に淀君は得意な状、秀頼は何んと無く後事の心にかゝる體、常光院と有樂とは互ひに顔を見合せた、

評定の席では、真田左衛門和陸の怒緒に爲し難きを主張して、今や議論の最中であつた、

「方々御當城は太閤殿下御心を盡させて築かせられたる天下の名城でござるぞ」この名城に集る將卒は、今福口の戦ひに勝ち誇りたる勇猛の者ばかりでござるぞ」このまゝ戦争を續けんとも、三五年の久しきを持ち堪ふるは難くあるまじ、もし真に和睦のお誓ひなされんとなれば、歴としたる朝廷の御指圖に由るか、又は天下の規模となるべき證據を取りたる上ならでは協ふまじ、凡そ籠城の法、弓折れ矢竭きて、後討死するは武門の習ひ、決して耻辱とは云はれまじきも、敵の謀計に陥りてむざ／＼和議を爲さんこと、我々の本意でない、上様の御思し召し、果して和睦の議にありとすれば、まづこの意味を以て御披露申しては何うてござらう」

處へ治長が現はれた。

(六十)

治長は座に着いた、然し席上の形勢が穩かた無いので、まづ言葉は無く座中を見廻した、真田幸村の議論には長門守始め賛成もあつて、されば此の事を秀頼様御前へ御披露申さうといふ事になつた、もしも秀頼の信用ある人物から、右の事情を披露するやうの事あつては、秀頼の心が如何やうに變らうも知れぬ、それではこゝまで漕ぎ附けた和睦の議がいかやうに變らうも知れぬと思ふので、治長は驚いて遮り止めた。

「其の儀悪しう、暫く待たせられ」

後藤基次は目の色を變へて、「御當家御爲を思ふ者、苦肉の策を献ようと云ふ、それを如何なれば悪しうなど……」

「仔細がある、一同まづ鎮まつて我等申す事を聞かせられ」と、治長は得意顔に座を前めて、諸大將の心を激昂せしむべき口を開いた。

「一たん天下の大軍を引き受けながら、是といふ戦事も爲ず、直に和睦なされる事、我等に於ても無念骨髓に徹しまする、なれど上様附近の武士の中には、方々の御評定延引するについて、怪しからぬ事を云ひ觸らす者がござるわ」

「怪しからぬ事とは、さて如何やうの……」

「外でもない、御和睦の事成りて、天下静謐とならん曉には何れもの進退にお困りの事もあるべくそれを根に持ちて、飽くまでも戦争せん御存意など……」

「え、何者がそのやうな」と、一同は息荒く詰め掛けた、

「その人の名は申さぬ、なれど今申した如き取沙汰、奥向では専ら噂せらるゝ、上様は御存じの通り武備に心を置かせらるゝなれば、假令御和睦の事はありとも、一たんお召し抱へになりし方々、急に御暇となる筈はなけれど、我が心が濁れるをもて他の清さを付る者、世に無きとのみは申されず、上様にもその事を聞かせられて、殊の外御不興に思召され、我等へ仰せ付けて、評定の模様見て参れとの御事てござつた。されば只今當席より、只今の議論、上様へ御披露ありては、却て御立腹を増さすやうの物かと……」

他の事ならば兎も角も、扶持に放るゝが情無く、和睦の御事に同ぜぬとありては、末代までの瑕瑾弓矢の名折、此の上の事はあるまじらばいかやうにも、と列座の面々、互に顔を見合す時、正榮尼は淀君の使者として遣つて來た、さうして其の云ふ所に由ると、本多佐渡守より織田有樂へ密書到來家康の内意は眞の儀式だけにて、二の丸三の丸の堀石垣を破却すれば足る、それにて和睦の誓ひ、

兩家長く親交を結ばうては無いかとの御事、これに上様淀様も御満足ありて、和睦の御心を定め給ひたるなれば、一同左様に心得て宜からうとの事であつた。

心ある者は是を聞いて泣いた、豊臣家の運の末の漸く近く來るべきを察し遣りて皆泣いた、然し秀頼母子覺悟の上といふに力無く、眞田木村を始めとして、一同承諾の旨御受け申す、是からが和睦誓約の血判といふことになる。

(六十一)

家康より直の言葉は無けれど、其使者として見るべき阿茶局、總ての執事として見るべき本多佐渡守より和睦は表面の儀式のみ、只堀石垣少々ばかりを破壊すれば足るとの意味を通じたるなれば、奥向の全権を取れる修理有樂の心まづ動き、従ひて淀君の心動き遂に秀頼の心も動かんとして、この大事の戦争、思ふほどにも無く無事に済むべく見えなれば、淀君よりは常光院を使者としてこれに饗庭局と二位局とを附き添はせ、被物三領、緞子三十卷を當座の御進物として家康へ進らせられ、更に奥役人大角内膳をもて、羅綾の夜着蒲團一具を、陣中の御召料として遣はされた。

家康が苦肉の計は、着々として功を奏するのである、家康の成功は、即て豊臣家の破滅を意味する事云ふまでも無さ。

すると織田有樂と大野修理とは、尙更に當家の上下他意なきを證する爲とあつて、有樂よりは一子武藏守、修理太夫よりはその子信濃守及び三男彌十郎を、人質として兩將軍の陣中へ送つたのであつた。

大阪方からはほどの厚志を齎らすのを見ては、家康も黙つては居られぬ、淀君へ返禮として京都絹百匹と沈香一箱とを返禮として送り、更に二位局と饗庭局とへ丁寧な目録を下され、二人を側近くへ召されて

「さて〜一同苦勞を致したであらうの、我等世間の聞こえを彈りて、態々出馬致したけれど、弱年の秀頼と眞劍の刃を交へやう心は無い、日々の合戦心苦しく存じる折柄、和議調ひて満足に思ふぞ」との御誑を下された、二人の喜悅は譬ふるに物も無い。

其處で急ぎ城中へ立ち歸つて、右の趣きを淀君の御前へ披露する、大筒の音に怯へ上つて、内心小さうなつて居た淀君は、大御所の此の詞を聞いて殊の外の御満足、さらば早速この事を秀頼様へもお知らせ申せと云ふので、直に修理太夫を遣はされた。

由て修理太夫は、同腹中の渡邊糺を伴うて秀頼の前へ出る、秀頼も淀君に促されて、和睦の決心は堅めながら弱年血氣の大將、面白うは思つて居らぬ、修理太夫の口から、淀君より使者を遣はされた

事、修理有樂より人質を出したる事、家康より厚きお詞を下されたる、脱漏もなく手柄顔に申し上げた、すると秀頼の面の色は見る／＼中に變らせて、

「糺、こゝ、是れへ出へ」と、例の甲走つた聲は慄へた。糺は秀頼のお附の役人て、取分け心安くなされたから、修理太夫を叱るよりは詞が掛け好い、はつたと睨んで、

「母上より大御所への進物、これは兩家の交際、互にあるべき禮議作法とも見れば見る、私の命をも侍たずして、互の子供達を人質に遣はしたいふは奇怪、申す旨あらば申して見よ、返答の次第に由ては、此の方にも思案がある」と、以ての外の御立腹、糺は只管恐れ入りて、

「只何事も上様御存じまするに由つて、織田大野御兩家に於かせても、可愛き子供を……ひ、ひ、人質に……」

「だ、黙れ、不忠漢」
秀頼は思はず身を進めた、殺氣は室に満ちて居る。

(六十二)

修理太夫も斯うなつては詞が無い、糺と共に恐れ入つて平伏する、秀頼は急ぎに急いで、

「ま、まづ待たせられ」

「いや、待たぬ、この太閤御譲りの太刀頭に、犬侍の首を劈いて、切ても腹慰せにする、放さぬか」

「まづ、待たせられ、申すことが……」

此の間に修理太夫は命から〜逃げ延びる、秀頼御立腹と聞かせて、淀君も御訪ねある、奥も表も鼎の湧くが如き騒ぎ、一同御前へ詰め寄りて、只管御心を賺し参らせた、けれど此の爲に和睦の事は變らぬ、秀頼は表立つて、家康へ和睦の條件を持ち出した、それは斯うであつた。

(六十三)

秀頼は武門の意地としても、こゝて家康と和睦する心はなかつた、然し淀君から再三再四の催促を受け、關東からも又頻りに謎をかけられるので、漸く承知はしたものの、それが本心では無いのであるから、大野修理太夫を手討にしようとした翌日、取次役伊藤隼人を使者として、表面から媾和の條件を提出した、それには十分な事が云つてある、今度の媾和は常光院阿茶局をもつて、將軍家より屢々我等へ仰せ越さる、和睦は秀頼の望む處で無ければ、罪なき士卒を捐せんこと的情無く、且は母上より御便りもなされ、家來の中よりは母上の意を體して、質を出したるものもある由、この上は

是非に及ばず、仰せに任せて和議を取り結ぶてござらう、然る上は當方に於て召し抱ゆる浪人どもに于與せられぬ事、追々は當家の蔵入を憎ませられ、永久隔意なき旨の御誓約をなさるべし、然らば秀頼に於ても外構へ少々は破却し申さん、といふのであつた。

大阪で浪人はどんく召し抱へる、それに追々所領を増して呉れよといふのであるから、大阪方に取つては此の上のない利益の條件で、將軍家には非常の不利益であるから、よもや無事に治まる筈は無からう、秀頼からのこの條件が旨く行はれずば、再び戦争になるに異ひないと、人々は心の中に覺悟して居たが、老の家康、こんな事に頓着は無い、意外にも快く承諾して、

「諾しく、秀頼の云ふ處は有理ぢや、我等天下の大軍を引率して向ふからは、城方に防戦の手配りはあるであらうが、遂に落城するは云ふまでもない、さう爲つては太閤の血統を絶すに當つて、家康の本意でも無く殊に重縁の間柄、いかに天下の爲とは申せ、太刀取つて鑄を削るのも不快であるから和睦しやうと云ひ出したのぢや、諸浪人を召し抱へるのは、原より秀頼の器量にある事、我等の口を容れる所でない、蔵入の望み、是も有理なれば望みに任する、只總構破却の事は我等出陣の證までに此方よりも人数をさし向ける、此儀秀頼母子へ心得違ひの無いやうに申し達するが宜からう」

家康の遣り方は、片手に甘い菓子を見せて、片手に苦い薬を飲ませやうといふのであつた、諸浪人

藏入の事を承知する代りに、此方の人數を以て總構を破却すると返答した、前には二の丸三の丸の堀石垣を少々ばかり取り毀てば足る、と云はせた口から、今度は總構を破却すると、云はせる、總構へは太閤が殊に意を注いで築造した要害であるから、これの完全である間は、いかに天下の大軍を以て向つても、大坂城の陥ることは滅多にない、家康はこれを太閤の口から聞いて知つて居るので、まづ甘い藥を與つて、苦い藥を服すべく總構破却の事を申し入れたのであつた、總構は大坂城の命であるから、これの破却は即て大坂城の破却も同じ事であつた。

秀頼はさすがに若い、逆も聞かれまいと思つて、此方から持ち出した條件を、一も二もなく聽かれた嬉しさに、其處までは氣が附かなんだ、甘い菓子の中に、苦い毒藥の盛られてあるのに心附かなんだ。

これで和睦の事は決した、由て十二月二十日(慶長十九年)板倉周防守阿部豊後守の二人が、家康の使者として城中へ遣つて來た、これは和睦の起誓文を差し出せよといふのであつた、秀頼は打ち案じて、

「起誓文の事は心得申した、兩將軍何れへ呈らせて宜からうの」
周防守も此處までは聞いて居らぬ、然し例の頓智で、

「大御所様へ呈らせられと遣つた。」

秀頼は心得て起誓文を渡した、今度は此方から起誓文を取りに行かねばならぬ。
周防守が茶臼山の陣へ歸つた時、家康から兩將軍何れの名宛にしたかと問ひ、周防守が右の趣返答に及んだのを知り、「さすがは周防、あのして無うては何事も辨へられぬ」と云つて甚く賞賛したといふ、全躰ならば當將軍たる秀忠に當てべきが當然であるのに、前將軍たる家康へ呈らせよといつた、これには深い意味があるのだ。

(六十四)

翌二十一日城中の大廣間に於いて、諸客將の大評議を開かれた、これは何人が茶臼山御陣へ參つて、大御所の起誓文を受け取り來るべきかと評定する爲であつた。
そこへ秀頼も出座ある、大野治長織田有樂を始めとして、武將は眞田後藤木村長曾我部、七隊長の面々綺羅星の如く居流れた、後藤眞田の二人最も適任者であるけれど、是は關東に憚る所があるから行かれぬ、それでは七組の番頭を遣るが宜からう、いや寧ろ老功の織田有樂にしたが好いてあらうなど、例の如く八方から議論が出て容易に決さうて無い、長門守はその時まで默然として人々の云ふ處を聞いて居たが、やゝ席の定まるのを待つて、

「憚りながら上様へ申し上げる、若年未熟にてはあれど、一片忠義の心は何人にも劣らぬつもり、誰彼と御詮議なされうより、此の大役私へ御下命下されては何うてござりませう」と、凜とした聲で云つた。

長門守の武勇智略は、今福口の初陣で認められて居る、後藤又兵衛第一に賛成して、

「長門守、もし進んで此の大役に當らうとの思し召しあらば、是に越したる事は無からう、各々御思案は何うてござるな」と、云つて一同を見渡した、

此の期に及んで不の字でも云ふものあらば、立ちどころに捻り潰して呉れうとの様が見えた、修理太夫は何んとか故障を云ひさうであつたけれど、又兵衛の威勢に恐れて口を噤んだ、真田長曾我部その他の人に異存は無、秀頼はさも満足に堪へぬ様で、

「さらば、其方が……」

「もし私へ御下命あれば、さつと一命にかけまして……」

「仕果せて呉れるぢやの」

「恐れながら上様御武徳を頭に戴き、太閤御名を傷けるやうな事は致しませぬ」

「天晴の返答、一統に於いても異存無しと見ゆる、さらばその使者、長門守へ申し付くる」

重成は謹んでお受けをする、そこで一同から副使は七隊長の番頭たる郡主馬介良列を推薦し、これには秀頼の同意があつて、使者は木村郡の二人と定まつた、すると秀頼からの命とあつて、近侍の武士が當家の重寶の一つに算へらるゝ、緞の鎧を持ち出して、恭々しく長門守の前に置いた、秀頼、一申すまでもなく大切の使者、曠の場所なれば、最も好き甲冑を選ぶ要がある、これは緞の鎧として太閤より傳はる寶なれど、當座の引出物として取らする、これを着して當家の武名を揚げるやう致せ

長門守は有難く頂戴する、一期の面目身の譽、一座誰とて羨まぬものもない、長門守は暫時して右の鎧を修理太夫の前へさし出し、

「修理殿、上様へ御願ひの次第がござる、お取次下されう」

修理太夫は頷いた、

「此の場合、上様へ御願ひの次第とは……」

「弱年未熟の私へ、大事の御使ひを命ぜられしへあるに、斯く重器を拜領仰せ付けらるゝ事、御知行御加増下さるにも優りて、此上もなき譽なれど、此の度のお使ひ、甲冑は詮なき事と存するゆゑ何卒お執次頼み存ずる」

「え」と修理太夫は驚いて「折角の御賜物、無下に御断り申さうぢやの」

「最も軍中のお使者なれば、歡んでお受けも申すべきなれど、已に御和議調うての御誓ひなれば、泰平の兆是より現はるべきに、使者たるもの武具を着せんは宜しかるまじく、敵の陣中へ一人参る私甲冑を着せんは、却て嗚呼がましく存ずる嫌ひもあり、殊には私、少々存じ寄りの次第もあれば此の度は鬘斗目麻上下にて参り度く、この儀も併せてお執次頼み存ずる」

秀頼はこれを聞かせて、有理と頷かるゝ事もありてか、その儀は本人の心任せたるべしとの御意、一座は互に顔を見合せ、重成の智勇を感じ合つた。

(六十五)

長門守は心中に深く決する所があるから、秀頼より賜はつた鎧をも受けず、鬘斗目麻上下で悠々と立ち出づる、これを見た、草加市郎兵衛と今岡大兵衛とは反仰るばかりに呆れ果てた。

「御前、あなたは何れへお越してござりまする」と、市郎兵衛はまづ聲を掛ける、長門守は莞爾として、

「あゝ、市郎兵衛、大兵衛も歡んでくれ、城中御家人も數ある間に、今日の晴のお使者はこの重成へ命ぜられた、只今より罷り越す、兩人とも路次の介添を頼み入るぞ」

大兵衛は重成の顔の常に變らぬを忱と見つゝ、

「その事は薄々お噂に承つて、只今も市郎兵衛と嬉し涙に暮れて居りました、あゝ此の事を江州にござる佐々木の殿様がお聞き遊ばしたら、何のやうにお歡び遊ばすであらうと申して……」

長門守は手を拍つて、

「さかさまく、主家の御大事に取り紛れて、恩師義郷様の事を忘れて居た、大兵衛の詞を聞かずば直に茶臼山の御本陣へ参る處、これでは濟まぬ、いかに大兵衛、今日は殊更早急の場合、手紙を認る暇も無い、おぬし御苦勞ぢやが今から江州へ驅けて参り、此の度和睦御取り結びの事、別しては重成、晴の大役を蒙つて、只今より茶臼山御本陣へ参る事、詳しく御物語り致してはくれぬか、去年お膝下を放れてから、重成の身に着いては一つも残らず手紙にて申し上げ、一々御批判を乞ひ居たるに、一期の大事、主家安危の大役を承はりながら、一言の沙汰を致さずとは、恩師へ對して相濟まぬ、此儀平に頼み存ずる」と、事も無げに云つて除けた、大兵衛は驚とした軀で、

「それでは私、江州へ参るのでござりまするか」

「御和睦調ふからは、路次の通行に障りもあるまい、平に頼む」

「いま」と、大兵衛は頭を掉つたが、又思ひ直して「それはあなたが是非参れと被仰るなれば、随分

参らぬこともござりませぬ、なれどそのお姿は何んでござりまする、假令お和睦のお誓ひは出来たりとも、氣心も知れぬ關東方の陣中へ、武器も召さずお供の衆も召さず、平服でお越しなさるとは、日頃の御用意にも似合はぬ事と、恐れながら此の大兵衛は存じまする」

「いや、その心配には及ばぬ、私一人参るとは違ふて、相役には七組の番頭主馬介良列殿もお越しぢや」

「假令郡様御同道でござりまするとも、敵の本陣へそのお姿ではお危うござりまする、切ては實好さ鏡に、御胃にても召させられ、物の御役には立たずとも、御友配下の侍私共までお召し連れ遊ばすやうに……」

「いや、それは要らぬことぢや、假し鐵石を身に纏はんとも死ぬる時には必ず死ぬる、殊に敵勢三十餘萬騎、欺き寄せて重成を刺し殺さう謀ならば、百騎二百騎召し伴れたりとも用には立たぬ、私には思ふ仔細もある、心配に及ばぬ、少しも早う重成出世の事、江州の恩師へ御申達致すやうに……」

(六十六)

大兵衛はまだ聞き入れぬ。

「いえ、是を心配せずには居られませぬ、あなたが切めて甲冑にても召させられ、茶臼山へお越しとあらば、私は歡んで江州へ参りまする、然しこのお姿で敵の陣中へお乗り込み、千金のお身の上に萬一の事あつて御覽じろ、御幼少の時からお側を去らず、勿躰なけれど我子同様にお育て申したあなたの死に目にも逢はれぬてはござりませぬか、これ市郎兵衛、おぬしも友達甲斐がない、私の身の上にてこれほどの災難が、降りかゝつて居るのを、知らぬ顔で居るとは何うしたもの、これお執成をして呉れぬか」と、大兵衛は涙聲。

「大兵衛、善く云ふた」と、市郎兵衛は口を出し「私も先刻から其事を申し上げやうと思ふて居た、上様からの指圖ならば詮ないこと、御自分から望ませられて、敵の陣へ此のお姿はなりませぬ、大兵衛の申すやうに切ては甲冑美はしく召させられて、まさかの時は敵の大軍を相手に、花々しう討死を遊ばす覺悟、武士は死際を花と申しますぞ、江州の殿様に親しう御相談を申しませぬが、此の場合、このお姿、きつと私に御同意と存じまする、悪い事は申しませぬ、二人の爺の申すことを何うかお聞き下りませ」

二人の郎黨は手を合すやうに云つた、居合せた人々はこの忠言に動かされて涙を流さぬものは無い、重成も心中に涙を吞んで、

「今に始めぬぬし達の忠義、私は嬉しう思ふ、然し市郎兵衛、武士は實好き鎧よりも心の鎧を尊く思ふぞ、千萬人の味方よりも、一心を味方とするぞ、少し思ふ仔細もあれば、此の事はもう云ふてくれるな、大兵衛江州の事を頼み置くぞよ」

處へ郡主馬介同じく熨斗目麻上下で遣つて來た。此の躰を見て市郎兵衛も大兵衛も我を折つた。

「それでは郡様も平服でお勤めと見えませする、」

「未練な様して、主馬様に笑はれまいぞ、大兵衛疾う行け」

大兵衛も否とは云はぬ、市郎兵衛を木蔭へ伴れ行き、

「市郎兵衛、察してくれ、私見たやうな仕合せの悪い者は無いわ、御幼少の時からお側に付き切つて、お育て申した殿様の大事の場へ、参り合ふ事も出来ず、主に別れ、友達に放れ、この有様を後に見て、江州下りへお使ひに行かねばならぬとは、何と云ふ因果な事ぢやらうのう」

「大兵衛、お前の心は察する、然し田からするも畔からするも、つまり御主へ御奉公、殿様の事は私がかつと引き受けた、おぬしは江州の殿様へ今日の始末をお知らせ申せ」

「あゝ、仕方がないから行つて來やう、これ後に残つた果報者のおぬし、決して一人の身躰と思ふなよ」

「諾し、まさかの時はおぬしと乃公と二人前の忠義、敗けを取るやうな事はせぬわ」

「御前のおん身に少しでも怪我をさせて見い、おのれ聞くことでは無いぞ」

「最も、一つ異へば命は無いもの、萬々一乃公が死んでおぬしが後に生き残つたら、その時は二人前の忠義、乃公の云つた事を忘れるな」

此の時、重成と良列との乗るべき駿馬の蹄の音がする、市郎兵衛、

「それお立ちじや、大兵衛お暇乞ひを忘れるな」

「あゝ」とは云つたが、大兵衛は心の中にこれが長の暇乞ひになりはせぬかとの疑ひがある、今重成が馬に乗らうとする處へ駆け附けて、

「御前、おさらばてごりませする」

(六十七)

長門守も流石名残の惜しくない事はない、殊に心に非常の覺悟を極めて居る、

「汝も」と、云ひかけたが、その聲に曇りを帯んで居たので、更に云ひかへて「汝も無事での」

「随分お手柄を遊ばしませや」

親が我が子に云ふやうな調子であつた、重成ひらりと馬に乗つたが、うしろを見返つて、

「大兵衛」

「はッ」

「佐々木殿に申さうには、重成此の度は多勢の中よりお見出しに預つて、只今より大御所御本陣へ参る、お役目は大御所様の起誓文請取の爲め、幸ひに命あらば重ねてお目通り申しますると、心を籠めて傳へるのぢや」

「へえ、それ——は合點して居ります」

「早う行け」

重成は一鞭當てる、

「市郎兵衛、頼んだこと忘れるな」

大兵衛は名残惜しげに見送つた、重成は十二三人の供人に前後を包まれて、悠々と大手御門を立ち出づる、城中第一の美男、年は若し、日は麗なり、お塚の内外はちらほらと早咲きの梅も薫つて居る、その立派に美しいお使者の行を送らんとて、こゝかしこの——物見から色々の面が見えた。

大兵衛は此後姿の見えぬやうになるまで見送つて、涙ながらに立ち去つた、一まづ屋敷へ立ち歸つて、今日の始終を奥方へ申し上げ、直に江州へ出發する心であつた。

それは扱置き、重成は馬上ゆたかに生玉口より茶臼山の御陣所近くへ掛らうとする時、生玉神社の鳥居の蔭から現はれた尼法師があつた、長の旅にあるかして、色も黒く、法衣の裾も破れ、見る影も無さまでて寔れて居たが、由ある者の身の果てらしく何處やらに品もある、それが重成の馬上姿を見て、色を滌えるまでに驚いたが、歩き後れたる供の侍を呼び止めて、

「もし、彼のお武士は何といふ方でござります」

侍は見苦しさ尼法師に止められ、不平さうに後を見返り、

「彼のお方を知らぬか、彼れは大坂方に隠れもなき勇士、四天王の随一とお呼ばれなされた木村長門

守重成様ぢや」

「え」と又びつくりして「それでは矢張り……」

「お前、重成様の由緒かの」

「いえ、左様ではござりませぬ」と云ふ目の中に涙、是れも沈と見送つて、その姿が一心寺の森に消え行く時、心附いたやうに生玉の社に向つて、一心不亂に手を合せた此尼法師の誰なるかは、作者が披露するまでもなく、讀者は御推察になつて居るだらう。

序に記して置くが、重成の麻上下で敵の本陣へ乗り込んだには、彼れに一期の大決心があつたから

てあつた、彼れの懐には明暗々たる匕首が裏まれて居た、その匕首はまさかの時の身の守護にするばかりでは無い、彼れはあはよくばこの尖頭に豊臣家の禍根を切つて捨てやうと覺悟したからであつた。

豊臣家の禍根は何んであらう、大御所さへ無きものにすれば、秀頼様は千秋萬歳であると彼れは心に信じて居た、彼れの役目は起誓文請取にあるけれど、彼れの本心は家康を一刀に斬し殺さうと云ふのであつた。

(六十八)

重成も良列も熨斗目麻上下で、茶臼山の御陣へ馬を驅けさせた、江州の佐々木家に養はれて居た間は幼年であるから肥すほどの事も無い、當春始めて秀頼に奉公してより、今福堤の初陣に手柄を現はした他は、是と取り立て、云ふほどの事は無いが、この起誓文請取の大役、三百年後の今日まで、重成が血判取と云つて、世間へ喧しく傳へらるゝ大事の使者、是を誠に重成が生涯の苦節、生涯の活動、生涯の心血を注ぐ處の者があつた、彼れが秀頼より賜はつた額縁の鎧を辭退し、和議御誓約成りたるからは、軍中の仕度にも及ぶまい、特に別存に存じ寄りの次第もあるから、熨斗目麻上下で参上仕らんと云つた、この「別に存じ寄りもある」との一言に彼の熱血は注がれた。

重成と良列は前後して茶臼山の陣營に着いた、轅門に馬をとめてひらりと降りる、此の日茶臼山の陣では、城方から使者が來るといふので、殊の外周密の用意をせられた、最も是には嚴重に威權を守らねばなるまい、此處で關東の勢力を見せて、大阪方に一泡吹かせて遣るが宜からうとの議もあつたから、左輔右弼四方を拂ひ、劍戟刀槍目に輝きて、その莊嚴なこと筆にも詞にも盡されぬ、數萬の軍勢は道の兩側を警めて、鎧の袖はさら／＼閃めき、冑の星は一列に併びて、宛ら錦を敷いたやうに見える、

是等多勢が城方の晴の使者、いかなる者が來るであらう、後藤か、真田か、乃至は大野織田の輩かと片唾を呑んで待つて居ると、思ひの外若武者、甲冑をも帶せず、武器をも伴はず、十人ほどの供人を伴れたばかりで、静々と練り込んで來たには、誰とて一驚を喫せぬものは無かつた。

茶臼山の本陣からは、御使番の後藤庄三郎が案内者にされた、重成と良列とは此の案内者に引かれて、お玄關の前まで來ると、西尾豊後守は黒糸絨の鎧、永井右近太夫は萌黄絨の鎧、何れも立烏帽子で出迎へた、重成はそれに目もくれず、すつと奥へ通らうとする、右近太夫は袖を引いて、

「暫時待たせられ、それがしは徳川殿御内に永井右近太夫直勝と申すもの、大御所様の命令を承はつて、この處にお待ち受け申した、内大臣家の御口上を承はりませう」と云つた、